# 研 究 紀 要

第 15 号

2025

公益財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団

# 序

公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団は、1992（平成４）年に新潟県が出資・設立の財団法人として発足しました。以来、高速自動車道・国道・北陸新幹線などに関連した遺跡の発掘調査を実施しています。平成８年 10 月には、新潟県埋蔵文化財センターが設立され、新潟県教育委員会の委託により当事業団が管理を行ってまいりました。2014（平成 26）年度には、公益財団法人として再スタートを切り新潟県から指定管理を受け業務を行っています。

当事業団はセンター業務として、埋蔵文化財の調査・研究、整理・保存、情報収集、専門職員研修などのほか、発掘調査等で得られた情報を県民の皆様に還元する普及・啓発活動を行っています。「発掘調査報告会」、「企画展」、「新潟県埋蔵文化財センター講演会」、「キッズ考古学教室」のほか広報紙「埋文にいがた」の発行、発掘調査現場における「現地説明会」の開催などがその活動の代表的なものです。

近年、発掘調査の件数は横ばい傾向ですが、その一方でより高度な内容の調査と迅速な情報公開に基づいた発掘調査成果の発信が求められてきております。このため当事業団の職員は日々の業務に従事するかたわら、埋蔵文化財に携わる者としての社会的付託を意識し、自らの研鑽を積んでまいりました。その成果の一部を『研究紀要』として公表します。今後の調査・研究活動にご活用いただくとともに、皆様のご叱正をいただければ幸いと存じます。

最後に、本書の刊行にあたりご協力をいただいた関係各位に感謝申し上げるとともに、今後とも一層のご指導を賜りますようお願い申し上げます。

2025（令和７）年７月

公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

理事長　関　根　慶　一

# 目　次

【研究論文】

新潟県糸魚川市六反田南遺跡出土のヒスイ製大珠未成品……………………………… 1

加 藤　学

新潟県村上市上野遺跡の調査研究報告（1）

—第７次・第８次調査の所見について—……………………………… 9

加 藤　学 ・ 加 藤 元 康

南魚沼市金屋遺跡出土の古代の土器について……………………………… 34

春 日 真 実

【研修報告】

埋蔵文化財センターにおける整理作業の現状と課題

－「埋蔵文化財担当職員等講習会－埋蔵文化財調査へのデジタル技術の応用－」に参加して－

……………………………… 44

土 橋　由 理 子

遺構断面の３次元計測の活用……………………………… 46

飯 坂 盛 泰

村上市上野遺跡第８次調査の出土土器について

—自然流路 SR103 の出土土器を中心に— ……………………………… 48

加 藤　学 ・ 加 藤 元 康

縄文時代後期前葉の集落における墓域について

—周辺地域の事例調査—……………………………… 50

石 川 智 紀

# 新潟県糸魚川市六反田南遺跡出土のヒスイ製大珠未成品

加　藤　　学

## 1　はじめに

六反田南遺跡は、新潟県西部に位置する糸魚川市に所在する。北陸新幹線及び一般国道８号糸魚川東バイパスの建設に伴う発掘調査が行われた結果、縄文時代中期の大規模集落であることが明らかになっており、ヒスイ資料が多数出土したことでも広く知られている［新潟県教育委員会ほか 2010・2012・2018］。

本報告資料は、2024 年 12 月 21 日・22 日にヒスイ原産地遺跡研究会で資料検討を行った際に見出した鰹節形大珠の未成品である。本遺跡におけるヒスイ加工を考えるうえで極めて重要な資料であることから、ここに追加報告することとしたい。

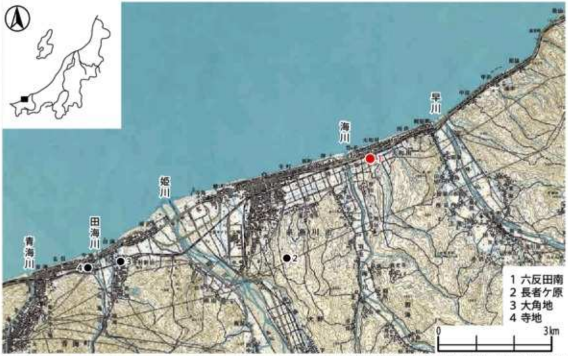
## 2　六反田南遺跡の概要

六反田南遺跡は、糸魚川市大和川字六反田に所在する縄文時代中期を中心とする大集落である（第１・２図）。丘陵と海岸砂丘の間に形成された狭小な沖積地に立地しており、洪水堆積物を挟みながら重層的に遺跡が検出されている。上層は古墳時代・古代・中世、中層は縄文時代中期中葉（古府式段階）、下層は縄文時代中期前葉（新崎式段階）～中葉（天神山式段階）の遺跡で、縄文時代の遺構・遺物は地下２ｍほどに埋没した状態で発見されている。本資料が出土した下層（第５図）は、中期前葉～中葉の集落で、竪穴建物 11 棟、土坑 90 基、土器埋設遺構 17 基、炭化物集中範囲２か所、集石遺構 26 基、溝３条、石列１条、廃棄域２か所から構成される。また、廃棄域からは膨大な数量の遺物が出土しており、一括土器として取り上げた土器集中箇所が 251 か所にも及ぶ。

石器も多数出土したが、蛇紋岩・透閃石岩を素材とした磨製石斧の大量生産が特筆される。380 点（うち７点が擦切）の磨製石斧と 1,310 点（うち 226 点が擦切素材）の未成品のほか、多数の工具（敲石・砥石）も出土しており、他地域への搬出を意図した集約的な生産が行われたとみられる。約 200 ｍ北側の海岸では、磨製石斧の素材となった蛇紋岩・透閃石岩、敲石に用いられたヒスイや透閃石岩、砥石に用いられた砂岩等を採取することができる。この資源環境が、沖積平野に大集落が築かれた一因と考えられる。

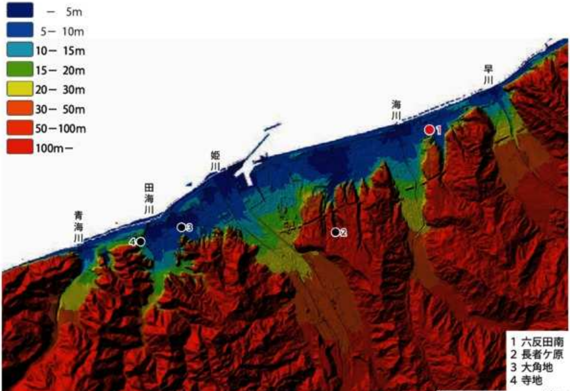
ヒスイが多数出土したことも特筆される。中層・下層のヒスイ資料は 641 点が報告されており、その内訳を第１表に示した。剥片 376 点・58.66％、敲石 187 点・29.18％（多面体敲石を含む）、礫 66 点・10.3％と多い一方、玉の未成品は７点・1.09％と少なく、成品は出土していない。ヒスイの粗割り・分割が行われたことは確かであるが、目的物が明らかでない状況にある。

本資料が出土した第６次調査下層［新潟県教育委員会ほか 2018］においても研磨痕のある未成品が６点あるが、いずれも部分的な研磨に留まっており、目的物は明らかでない。また、いずれも長さ５㎝以下であり、大珠の未成品になり得るものでない。報告者である髙橋保雄は、「ヒスイ製の玉製作の萌芽が見られるものの、本格的な玉生産とはいえないであろう。」とし、「磨製石斧製作に使用されるヒスイ製の敲石の多さから、むしろヒスイの硬さを利用しての敲石の用途に使用されたものと推測される。」と報告している。



国土地理院発行 昭和43年編集「糸魚川」1：50,000原図

第１図　六反田南遺跡の位置（S＝1:100,000）




第２図　六反田南遺跡の立地と周辺の遺跡（国土地理院色別標高図に加筆）

| 報告書名 | 層位 | 時期 | 石錐 | 磨製石斧未製品 | 多面体敲石 | 敲石 | 玉未製品 | 礫 | 石核・粗割素材 | 剥片 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 六反田南Ⅱ | Ⅴ層 | 中期後葉～後期中葉 | | | 1 | | | | | | 1 |
| 六反田南Ⅱ | Ⅶ層 | 中期初頭～中葉 | | | 5 | 2 | | | | 230 | 237 |
| 六反田南Ⅳ | 中層 | 中期前葉～後期初頭 | | | 2 | | | | | | 2 |
| 六反田南Ⅳ | 下層 | 中期前葉～中葉 | | | 1 | 3 | | | 2 | | 6 |
| 六反田南Ⅵ | 中層 | 中期中葉 | | | 33 | | 1 | 2 | 1 | 40 | 77 |
| 六反田南Ⅵ | 下層 | 中期前葉～中葉 | 1 | 1 | 139 | 1 | 6 | 64 | | 106 | 318 |
| 合計（点） | | | 1 | 1 | 181 | 6 | 7 | 66 | 3 | 376 | 641 |
| 比率（%） | | | 0.16 | 0.16 | 28.24 | 0.94 | 1.09 | 10.30 | 0.47 | 58.66 | 100 |

第１表　六反田南遺跡から出土した縄文時代のヒスイ

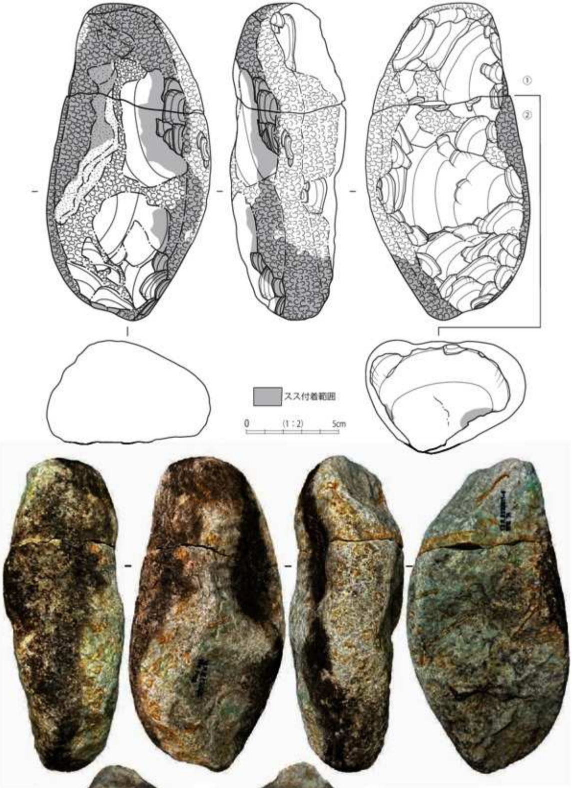
## 3　資料報告

第３図は、鰹節形大珠の未成品（敲打段階の製作工程資料）であり、良質なヒスイを素材とする。下層集落を構成する廃棄域の北東側（32G25・33G11 グリッド）から出土した資料である。折損した２点（実測図上側①：12 六反ミ 33G11-4 SM2 フ 4、実測図下側②：12 六反ミ 32G25 Ⅶ a）が接合しているが、７～８ｍほど離れた地点から出土している（第５図）。出土地点周辺では中期前葉・中葉の土器が出土しており、いずれかの時期に帰属すると考えられるが、鰹節型大珠の未成品と考えれば中葉の遺物である可能性が高い。

本資料は、整理作業時に敲石に分類されていた未報告資料である。本遺跡に特徴的に認められる敲石と比べると、明らかに細長く大型である。外周からの剥離による成形後、広範囲が入念に敲打成形されており、稜線上は凸部を除去するために敲き潰している。成形の過程、敲打の範囲から、敲かれた側と考えたほうが適当と考えられる。棒状を意図して剥離・敲打成形されていることを踏まえ、鰹節形大珠の未成品と判断した。長さ 16.8cm、8.5cm、厚さ６cm、重さ 1,100g であり、鰹節形大珠の未成品とすれば特大型といえる。鰹節形大珠は、原産地周辺で製作されたと考えられている［江坂 1957 等］が、15cm前後の特大型の未成品は発見されておらず、製作のあり方を考えるうえで重要な資料といえる。

顕著なススの付着も特筆される。敲打痕は、ススの付着前後に認められることから、敲打成形の途中に被熱していることが明らかである。特に、被熱後の入念な敲打痕は、付着したススを除去しているかのようにも見える（第４図）。また、折損面にも、わずかなススの付着が認められる。被熱前の敲打時に潜在的な割れ面が形成され、被熱時に、そこにススが侵入した結果とみられる。被熱後に再び敲打成形した際、潜在的な割れ面から折損し、廃棄されたのであろう。また、ススの付着範囲から想定すると、直接的な被熱は一部分であり、例えば灰の中に潜ったような状態にあったことが想定される。寺村［1968］は、ヒスイ加工時の加熱に言及した際、過度な加熱による変質を防ぐため、炉中または焼土にヒスイを入れ「適度の焼き」を行った可能性を指摘している。本資料のスス付着範囲は、まさにそのような方法を想起させる。

敲打成形途中の被熱痕跡は、加工における加熱処理を示す可能性がある。ヒスイの加熱処理［荒川編 2023、荒川・加藤・小池・長田 2024、加藤 2023・2024］が行われるタイミングは、分割段階（素材作出段階）と敲打～研磨段階（成形・整形段階）に整理できるが［加藤 2023］、本資料は後者に分類することができる。表面の劣化を促し、加工を効率化させることを目的とした処理と考えており、被熱後の敲打成形は、その過程を示す可能性がある。




第３図　六反田南遺跡出土のヒスイ製大珠未製品（S＝1:2）

第４図　ススの付着範囲を切る敲打痕

## 4　新資料の意義

第６図に、ヒスイ原産地をかかえる新潟県と富山県から出土した大珠と未成品を示した。本資料のサイズは、最大のヒスイ大珠である朝日貝塚出土資料（２：長さ 15.9cm）など、富山県内から出土した長さ15cm前後の特大型（２～４）に対応することがわかる。一方、新潟県内においても長さ 12cm前後の大珠（５・６）が認められるが曹長石製・透閃石岩製であり［長田 2015、小熊 2024］、ヒスイ製でない。新潟県内における最大のヒスイ大珠は長さ 10.6cmの耳取遺跡出土資料（11）である［見附市教育委員会 2015］。これ以外に 10cmを超えるものはなく、また、特大型のような厚みはなく、やや扁平である［木島 2012］。

これまでに報告されている原石・素材・未成品において、特大型の素材となり得るものはほとんど認められない。ヒスイ大珠の製作遺跡である長者ケ原遺跡では４～ 10cm［糸魚川市教育委員会 2016・2022］、境Ａ遺跡では長さ４～ 7.5cm前後［富山県教育委員会 1990］の成品・未成品が出土しており、主に 10cm以下の大珠の製作が行われたと考えられる。特大型の大珠は、生産地から搬出されたとも考えられるが、それにしても、その製作痕跡は不明瞭である。

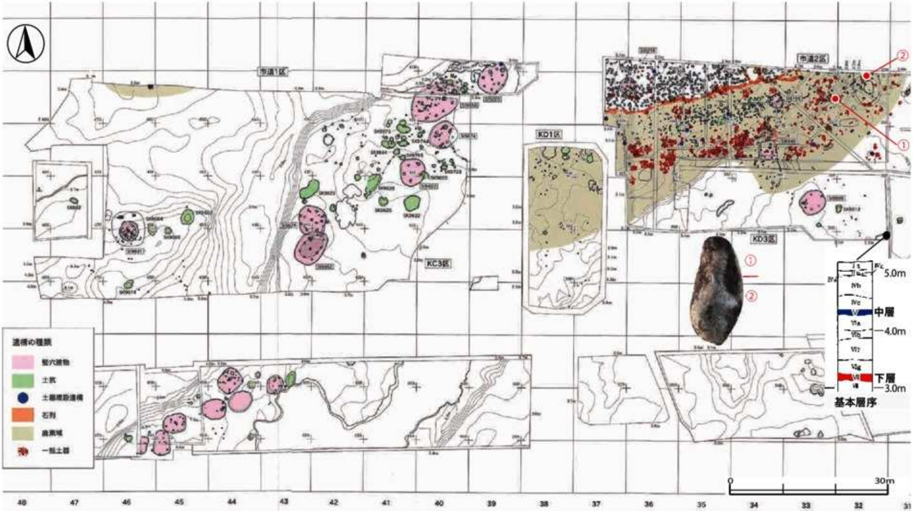
このような状況において、長者ケ原遺跡における長さ 16.6cmの未成品（12）は、特大型の素材となり得る原石が存在したことを示している。分割工程が進んだ資料であることから、原石のサイズが 20cmを超えることは想像に難くない。また、寺地遺跡（第１・２図）における中期の工房址でも 15 ～ 20cmほどの分割礫等が出土している［寺村ほか編 1987］。六反田南遺跡の未成品を含め、このようなサイズの原石は、海岸漂石でも存在するが、比率としては少なく、河川の礫が利用された可能性も考慮しておきたい。

## 5　おわりに

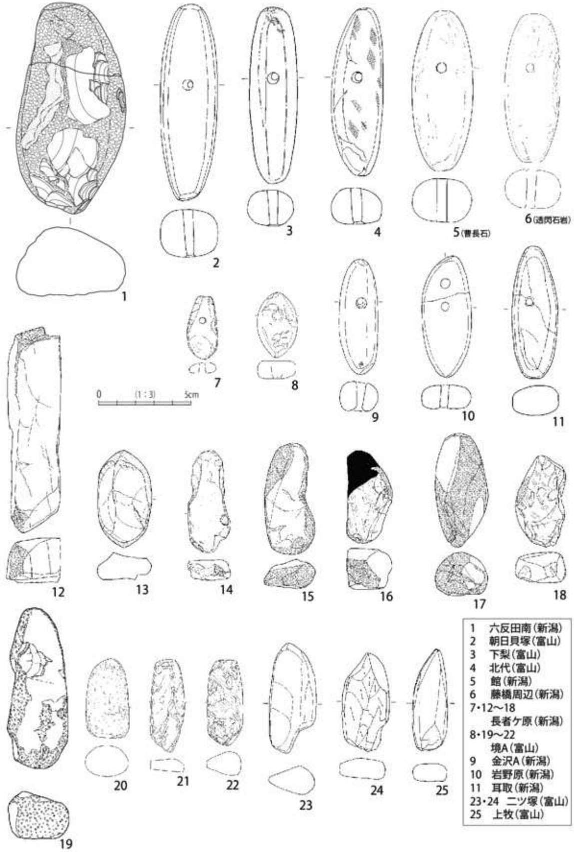
本稿では、ヒスイ製の鰹節形大珠未成品を報告した。15cmを超える資料であり、これまでに報告されている未成品と比べると明らかに大型である。朝日貝塚出土資料など、最大クラスのヒスイ大珠（第６図２～４）に対応する未成品と考えられ、その製作工程を検討するうえで重要な資料といえる。

また、本資料は敲石に分類されていた資料から見出したものである。境Ａ遺跡出土の第６図 19 は敲石として報告されているが、本資料との類似性を鑑みれば、鰹節形大珠の未成品といえるかもしれない。「敲いた側」「敲かれた側」の判断は極めて難しいが、敲石に分類された資料の中に多様な形態の大珠の未成品が含まれる可能性があり、製作工程と資料の再評価が必要と考える。

加えて製作過程で被熱していることも重要である。被熱前から敲打成形が始まっているが、被熱後にも入念に敲打している（第４図）。この痕跡は、上野［2007］が指摘した二次的な被熱とは明らかに異なり、




第５図　六反田南遺跡下層の遺構配置とヒスイ大珠未成品の出土位置




第６図　新潟県・富山県における大珠（2～11）と未成品（1・12～25）

2～4：富山県埋蔵文化財センター1987　5：長田2015　6：小熊2024　7・13・16：糸魚川市教育委員会2022
8・19～22：富山県教育委員会1990　9・10：小熊2001　11：見附市教育委員会2015　12・14・15・17・18：糸魚川市教育委員会2016

製作過程で被熱したことを示している。加工の効率を高めることを目的に加熱した可能性を指摘したが、ヒスイの加熱処理に関する研究は始まったばかりであり、課題も指摘されている［大屋 2024］。ヒスイ原産地遺跡研究会では、資料に残された痕跡学的な検討とともに、付着物の同定など、理科学的な分析を併行して行っている。本資料が、今後の検討材料として活用されることを期待したい。

最後に、本資料の報告に当たり、ヒスイ原産地遺跡研究会のみなさまから貴重な御教示をいただきました。記して感謝申し上げます。

## 引用文献

荒川隆史編　2023 『新潟県考古学会 2023 年度秋季シンポジウム「ヒスイ原産地遺跡から見た縄文～古墳時代のヒスイ　玉製作とその展開」発表要旨』新潟県考古学会

荒川隆史・加藤　学・小池悠介・長田友也　2024 「ヒスイ製品の加熱処理」『考古学ジャーナル』804　pp.15-20　ニュー・サイエンス社

糸魚川市教育委員会　2016 『史跡長者ケ原遺跡－第 6 次～第 13 次埋蔵文化財発掘調査報告書－石器・石製品編』糸魚川市埋蔵文化財調査報告

糸魚川市教育委員会　2022 『史跡長者ケ原遺跡－総括報告書－』糸魚川市埋蔵文化財調査報告

上野修一　2007 「焼かれた玉－硬玉製大珠の二次的変形－」『日本玉文化学会第 5 回シンポジウム栃木大会「縄文時代の社会と玉」資料集』pp.32-37・ｖ・ⅵ　日本玉文化学会

江坂輝弥　1957 「所謂硬玉製大珠について」『銅鐸』第 13 号　pp.1-20　立正大学考古学会

大屋道則　2024 「ヒスイの加熱処理は行われていたのか」『シンポジウム　装身具研究の現状と課題　発表要旨集』pp.23-28　明治大学黒耀石研究センター・日本玉文化学会

小熊博史　2001 「新たに確認された縄文時代の大珠について－長岡市藤橋遺跡周辺と岩野原遺跡の事例－」『長岡市立科学博物館研究報告』第 36 集　pp.113-132　長岡市立科学博物館

小熊博史　2024 「長岡周辺で発見された縄文時代中期の大珠類」『長岡市立科学博物館研究報告』第 36 集　pp.29-42　長岡市立科学博物館

長田友也　2015 「南魚沼市館遺跡出土大珠－硬玉製以外の大珠について－」『越佐補遺些』第 15 号　pp.34-37　越佐補遺些の会

加藤　学　2023 「縄文時代前期・中期におけるヒスイ玉の製作」『新潟県考古学会 2023 年度秋季シンポジウム「ヒスイ原産地遺跡から見た縄文～古墳時代のヒスイ　玉製作とその展開」発表要旨』pp.29-36・98　新潟県考古学会

加藤　学　2024 「縄文時代前期～中期のヒスイ加工と流通」『ヒスイシンポジウム縄文時代～古墳時代のヒスイの加工と流通』pp.5-6　糸魚川市教育委員会・糸魚川市

木島　勉　2012 「新潟県における縄文時代前半期の翡翠製品について」『玉文化』第 9 号　pp.51-69　日本玉文化研究会

寺村光晴　1968 『翡翠－日本のヒスイとその謎を探る－』養神書院

寺村光晴・関　雅之・青木重孝編　1987 『史跡　寺地遺跡　新潟県西頸城郡寺地遺跡発掘調査報告書』青海町

富山県教育委員会　1990 『北陸自動車道遺跡調査報告　朝日町編 5　境 A 遺跡　石器編（第 1 分冊本文）』

富山県教育委員会　1992 『北陸自動車道遺跡調査報告　朝日町編 7　境 A 遺跡　総括編』

富山県埋蔵文化財センター　1987 『ひすい－地中からのメッセージ－』富山県教育委員会

新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　2010『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 211 集 六反田南遺跡Ⅱ』

新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　2012『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 229 集 六反田南遺跡Ⅳ』

新潟県教育委員会・公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　2018『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 271 集 六反田南遺跡Ⅵ』

見附市教育委員会　2015 『耳取遺跡－ 2011 ～ 2014 年度における耳取遺跡確認調査報告－』見附市文化財調査報告第 37

# 新潟県村上市上野遺跡の調査研究報告（1）

## ― 第7次・第8次調査の所見について ―

加藤　学・加藤元康

## 1　はじめに

上野遺跡は、新潟県北部の村上市朝日地区に所在し、国道7号朝日温海道路の建設に伴い、2017年度から本発掘調査を行っている。第1次（2017年度）から第3次調査（2019年度）では土砂流堆積物が堆積する範囲、第4次調査以降は遺構・遺物が集中する集落域を中心に調査している。第4次（2020年度）から第8次（2024年度）調査により縄文時代後期前葉の大規模な集落であることが明らかになっている。

第1図　第8次調査の遺跡遠景（西から）

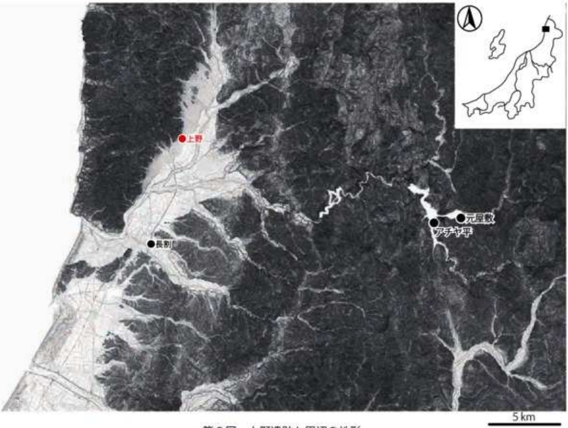
ここで報告する第7次（2023年度）・第8次（2024年度）調査は調査区域の北側にあたり（第1図）、上野遺跡の集落の中心部分である。これまでに縄文時代後期の遺物が出土する土砂流を検出した第1次調査の報告書を刊行しているが［公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団2019］、それ以後の調査についてはまとまった調査報告はしてない。また、本遺跡の焼人骨集積土坑SK439については第4次（2020年度）調査で検出し、第6次（2022年度）調査で遺構を地山ごと切り取り、新潟医療福祉大学に搬入して室内調査を進めた。その後、2023年に調査概要を報告し［平・奈良・加藤・石川2023］、縄文時代の葬制を知る上で重要な遺構として全国的に注目されてきた。

第7次・第8次調査では焼人骨集積土坑SK439を含めた集落域を解明する多くの調査成果を得られ、第28回遺跡発掘調査報告会のシンポジウムで報告した［新潟県埋蔵文化財センター2025］。ここでは、遺跡の重要性を鑑み、現段階における所見を報告する。なお、発掘調査及び整理作業は継続中であり、発掘調査報告書刊行時までの間に所見が変更になる可能性があることを断っておく。

## 2　上野遺跡の概要

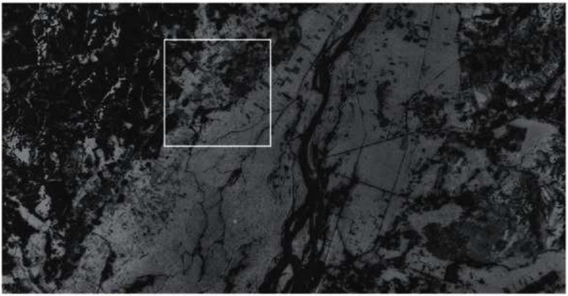
### 1）遺跡の立地環境

上野遺跡は、村上市猿沢・檜原に所在する（第2図）。三面川の支流・高根川右岸の扇状地に立地しており、標高は35～39mほどである。高根川の周囲に広がる氾濫原より一段高く、東側には谷底平野を眺望できる。遺跡の西側には岩船花崗岩類からなる葡萄山地が広がり［新潟県農地部1991］、三額山（587m）・虚空蔵山（466m）がある。傾斜30度以上の急斜面地の表層には真砂土（風化花崗岩）が堆積しているため、雨量が多くなると沢筋に土砂流が発生する。これが遺跡周辺の扇状地を形成しており、発掘調査でも真砂土が流れ下った流路跡を検出している。遺跡周辺が、災害のリスクを抱えた土地にあたることは明らかで




第２図　上野遺跡と周辺の地形
（国土地理院傾斜量図に加筆）

第３図　上野遺跡周辺の扇状地の形成と居住域の範囲
（国土地理院傾斜量図に加筆）



第４図　土地整備前の遺跡周辺の状況
（出典：国土地理院。空中写真（昭和22年撮影）を拡大し白枠を加筆。枠内が遺跡周辺）

ある。遺跡は延長370ｍにも及ぶ広範囲に存在するが、建物が築かれた居住域は100ｍほどの間に限定される。ここは土砂流の沢筋を回避した場所にあたり（第３図）、災害リスクを考慮して居住域が設けられたとみられる。

遺跡周辺の資源環境を確認する。1947年４月12日撮影の航空写真「塩野町」には、扇端部付近から流れ出る流路が認められる（第４図）。扇端部に伏流水の湧水地点が存在した可能性があり、水を得ることにおいても有利な立地条件にあったことがうかがえる。また、調査対象地の南東側の扇端部では川原石からなる礫層を検出しており、その直上から後期前葉の土器が出土している。このことは、遺跡が形成されたころに高根川が遺跡付近に流れていたことを示している。高根川では食糧資源のほか、珪質頁岩・鉄石英・メノウなどの石器石材を採取でき、遺跡は恵まれた石材環境にあったと考えられる。また、葡萄山地西側の海岸との間には古道が横断しており、内陸側に塩や海産物が運搬されたといわれる［富樫2018］。高根川を介した内水面交通も含めると、周辺地域とのアクセスにおいても良好な場所にあるといえよう。

また、本遺跡から20km圏内には、元屋敷遺跡・アチヤ平遺跡等からなる奥三面遺跡群や長割遺跡など、縄文時代後期の大規模遺跡が存在する（第２図）。村上市朝日地区は、県内有数の縄文遺跡が所在するが、特に後期の遺跡が多く、中でも上野遺跡は代表的な遺跡のひとつといえる。

**２）調査の概要**

上野遺跡は、平面積22,135㎡を対象に2017年から８年間、本発掘調査を実施してきた。縄文時代後期を中心とする遺構を重層的に検出し、調査面積は複数層の累計で48,628㎡になる。これまでに約12,000基の遺構を検出し、約4,800箱（箱の内寸54×30×10cm）の遺物が出土しているが、その大半が後期前葉に帰属する。縄文時代後期前葉の遺構・遺物としては、県内最多の数量といえる。

**①　遺跡の層序**

遺跡の地層は、葡萄山地に由来する真砂土から形成され、土壌化している黒色の層位と土壌化していない黄褐色の層位が交互に堆積する。遺物を含む層位を、上からⅢa層・Ⅲb層・Ⅲc層・Ⅲd層（第５図）に区分しており、土壌化しているⅢb層・Ⅲd層と、土壌化していないⅢa層・Ⅲc層が互層をなす。大半

の遺物はⅢa層下部～Ⅲb層から出土しており、Ⅲb層をプライマリーな遺物包含層と考えている。Ⅲb層から出土した遺物は、後期前葉（三十稲場式土器新段階～南三十稲場２式土器段階）のものが大半で、後期中葉のものをわずかに含む。遺構検出面は、主にⅢa層下面、Ⅲb層中、Ⅲb層下面に区分でき、明確な遺構の大半はこの面で検出した。

第５図　基本層序

② 検出遺構

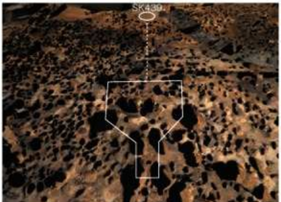
検出した遺構の大半は建物の柱穴である。柱穴同士の関係を検討しながら調査した結果、第８次調査終了時点で 249 棟の多様な建物（平地建物 210 棟・掘立柱建物 29 棟・竪穴建物８棟・敷石建物２棟）を把握している。足の踏み場がないほど密集して検出した柱穴（第６図）は、一時期に存在したのではなく、同じ範囲に建物が繰り返し建てられた結果と考えられる。集落の実態に迫るため、同時期に建てられた建物の組み合わせを検討することが必要である。

越後における後期初頭～前葉には、竪穴建物がほとんどないにもかかわらず、膨大な数の柱穴を検出する［品田 1999］。本遺跡もこのような状況にあり、同じ範囲から多数の炉を検出し、柱穴の多くは建物に伴うものと考えられた。しかし、竪穴建物のようには建物範囲を把握することが難しい状況にあるため、品田高志［1999］の復元事例や竪穴建物の柱の配置を参考に、現地で柱穴の組み合わせを検討しながら調

第６図　第８次調査の完掘状況

第７図　平地建物

第８図　凸字形の大型掘立柱建物




第９図　大型掘立柱建物の柱穴配置と焼人骨集積土坑

査を進めた。検討に当たっては、炉を中心に同心円を描き、柱穴の規模や埋土の内容、遺構の切り合い関係を整理し、柱穴の組み合わせを見出した。その結果、検出した炉を中心に一定の距離を保ち、多角形や円形の柱穴配置が認められるものを平地建物と判断した（第７図）。このように復元した建物は、直径４～６ｍほどの規模であった。

平地建物の柱穴に比して、明らかに大型で深い柱穴が存在し、掘立柱建物の柱穴と考えられた。亀甲形をなすもの、４本柱からなる長方形をなすものが主体で、８基の柱穴が「凸」字形に配列された大型掘立柱建物が注目される（第８図）。４本の柱を長方形に配置し、柱の中軸に沿って片側に直交する４基の柱穴を配置する珍しい形状をなしており、長軸 8.8 ｍ、短軸 6.5 ｍと大型である。柱穴も大型で、大きなもので直径２ｍ、深さ 1.5 ｍである。柱痕の直径は 25 ～ 40cmほどで、柱あたりを含めてひとつの柱穴から最大で６か所の柱の痕跡を確認しており、同じ場所で同じ形式の建物を６回程度建て替えたと考えられる。大型の柱穴は、建て替えの繰り返しによって形成されたといえる。大型掘立柱建物は、馬の背状の微高地頂部に立地し、かつ集落の中央に位置する。加えて建物の中軸線上に焼人骨集積土坑があることを踏まえると、記念物的な象徴性を有する特殊な建物であったと考えられる（第９図）。

なお、平地建物や掘立柱建物の柱穴は一定の範囲で２～３棟が重複しており、同じ場所で数回の建て直しが行われたと想定できる。また、建物を構成する遺構の切り合い関係から、竪穴建物→掘立柱建物→平地建物と概ね変遷することが明らかになったが、劇的な変化ではなく、各形態の建物が併存した時期もあったとみられる。

本遺跡では建物以外の土坑墓や貯蔵穴などが、ほとんど見つかっていないことも特徴的である。遺跡の規模からすると極めて少ない状況にあるなかで、焼人骨集積土坑 SK439 は特異な存在といえる。焼人骨が出土した遺構は、ほかにも見つかっているが、SK439 より焼人骨の数量は少ない。このほかに墓の可能性がある遺構として、完形の注口土器や水晶の原石が出土した土坑がある。断面が袋状を呈する土坑も含まれており、貯蔵穴が墓に転用された可能性がある。いずれにしても、建物数に比して墓の数は少なく、上野遺跡の葬墓制の詳細は把握できていない。

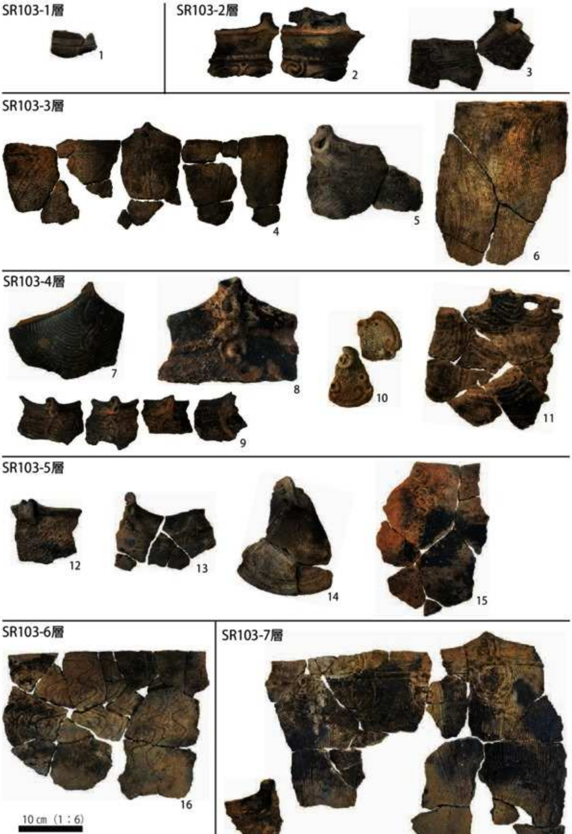
### ③　自然流路 SR103 の埋没過程

居住域を横断するように検出した SR103 は、常に水が流れていた訳ではなく、増水した時に水が流れ込んだと推定する流路である。この調査を進めた結果、集落形成の一端を把握できる重要な情報を得ることができた。

埋土には多量の遺物を含み、廃棄場として埋め立てられたと考えられる（第 10 図・第 11 図）。埋土は

第10図　SR103セクション

第11図　SR103遺物出土状況




第12図　SR103における各層位の出土土器

７層に区分できるが、各層の間に粗粒砂が挟在することから、埋没過程で水が流れ込むことがあったことがうかがえる。この粗粒砂を廃棄単位を示す指標と捉えて、遺物を層位的に取り上げた（第12図）。

最下層の７層では、綱取Ⅰ式と三十稲場式新段階の土器が出土した。本遺跡で最も古く位置づけられる遺物であり、集落の開始期を示すとみられる。６層は土砂流堆積物である。遺存状態が良好な土器も含まれるが、二次堆積物が中心である。７層は６層に覆われており、６層より上位の堆積物との間に時間差を有することは確実である。３・４・５層は、廃棄場としての埋め立てが行われた層位である。いずれの層位からも、三十稲場式新段階の土器が出土しており、この段階でほぼ遺構は埋め立てられたと考えられる。２層からは南三十稲場式土器、１層からは加曽利Ｂ式土器が出土しているが、これらは埋め立て後、陥没した部分に堆積した層位と想定している。

以上の所見から、集落の開始期は三十稲場式土器新段階で、SR103の埋め立ては三十稲場式土器新段階の時期に行われたことが明らかになった。埋め立てられたことで流路跡を横断する広い平地を確保でき、南三十稲場式土器段階以降は広範囲に建物が分布するようになったと考えられる。

**④　出土遺物**

整理箱4,800箱以上もの膨大な遺物の大半は、土器・石器である。

土器は、縄文時代後期前葉の三十稲場式土器新段階～南三十稲場式土器段階の土器が多量に出土した。これに続く中葉の加曽利Ｂ式土器段階もわずかに出土するが、遺跡の中心時期は後期前葉である。なかでも、上述の自然流路SR103における層位的出土事例（第12図）は、後期前葉の土器の変遷を知る上で重要な資料と考えられる。また、遺跡全体では在地系土器のほか、東北・関東・信州などの特徴をもつ土器も認められ、広域の交流を窺い知ることができる。

石器は、石鏃・石錐・石匙・打製石斧・磨製石斧・石錘・石皿・磨石・凹石などが出土し、礫石器（石皿・磨石・凹石）が多いことが特徴である。また、近隣の奥三面遺跡群では輝緑岩製の磨製石斧が量産されているが、本遺跡の出土量はそれと比べるとはるかに少なく、どちらかといえば自家消費的な保有数に収まる程度と考えられる。また、上野遺跡で用いられている石器石材の大半は高根川で採取可能であり、豊かな資源環境の下で盛んに製作されたと考えられる。石鏃などに用いられた黒曜石や小型磨製石斧に用いられた蛇紋岩などは、明らかな搬入石材であるが、その利用率は高くない。

このほか、土偶・垂飾・土錘などの土製品、石棒・垂飾・線刻礫などの石製品が出土しているが数少なく、特徴的な出土状況は示していない。

**３）建物の変遷**

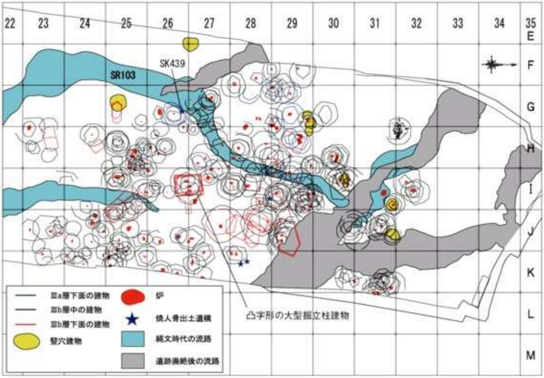
建物の変遷については、建物間の年代関係など、基礎的な分析を行っているところである。多くの建物が平地建物で、遺構一括資料を把握しにくいが、分析が進んでいる第７次・第８次調査の状況から考えられる集落の遷り変わりを示しておきたい（第13図・第14図）。

最も古い段階に位置づけられるⅢb層下面では、竪穴建物・掘立柱建物・平地建物が存在する。このうち竪穴建物は三十稲場式土器新段階に築かれており、本遺跡の最も古い段階に位置づけられる。建物が点在する状況にあり、複数が集中的に分布する状況にはない。また、集落の開始期には居住域を自然流路SR103が横断し、三十稲場式土器新段階の間に廃棄域として埋め立てが行われている。

SR103の埋め立てによって、より広い平場が形成され、南三十稲場１式土器段階の頃には掘立柱建物や平地建物が出現する。掘立柱建物の形態は凸字形、六角形、細長い亀甲形、長方形などバラエティーに富むが各形態の棟数は少ない。掘立柱建物は、弧状に分布するように見えるが、建物間の同時性については

検討が必要である。集落の中央に築かれた凸字形の大型掘立柱建物は、中核的な建物と考えられ、中央を通る線上には焼人骨集積土坑SK439が位置する。大型掘立柱建物・SK439ともに、埋土から南三十稲場1式の土器片が出土しており、検出層位も同じであることから、現状においては有意な関係にあると想定している（第9図）。

Ⅲb層中では、平地建物が主体となって建物数が最も多い。前後の時期と比べて継続期間が長いことによると考えられるが、より広範囲に集落が展開している。建物の配列は、弧状・C字状・環状を呈するよ




第13図　建物の配置

第14図　上野遺跡の建物変遷図

うにもみえるが重帯構造は認められず、中期の環状集落とは異質である。建物が著しく重複する範囲は、建物の配列が重なっている可能性がある。

最上位のⅢa層下面は、遺構埋土にⅢa層を含み、南三十稲場1・2式土器段階に位置づけられる建物が展開する。平地建物の中には、密に設けられた壁柱穴がめぐる形式が出現するほか、敷石建物もある。建物数は少なく、この段階で集落は終焉を迎えたと考えている。なお、本遺跡からは加曽利B式土器も少数出土しているが、明らかにこの段階に位置づけられる建物は発見されておらず、小規模な活動によるものと捉えている。

Ⅲa層下面の遺構を覆うⅢa層は、土砂流や洪水に由来するものである。加曽利B式土器段階以降に発生した扇状地を形成する自然の営為を契機に、上野遺跡から縄文人が離れたとみられる。

## 3　焼人骨集積土坑SK439の調査

### 1）調査の経過

焼人骨集積土坑SK439を検出したのは、2020年10月20日（第4次調査）であり、焼骨が散在する状況を確認した。この段階では焼骨が人骨であるか判断できなかったが、焼骨を伴う遺構が楕円形であること、大型礫が伴い、墓標である可能性が想定されたことから、翌21日には墓壙であると判断した。22日には、調査の進展により、下位ほど焼骨が大きく密集する状況を確認し、同日、現地を確認した筆者の一人・加藤学（当時、新潟県教育庁文化行政課）は、人骨の可能性が高いので、新潟医療福祉大学の奈良貴史氏に現地指導を受けるよう助言した。これを受け、26日に奈良氏が現地を確認し、焼骨はすべて人骨であること、高温で焼かれたことが明らかになった。11月3日には、現地説明会においてSK439の調査状況を写真で一般に公開した。当初、現地調査で焼骨を取り上げることを試みたが、焼骨の数量が多いこと、水分を含んだ状態の焼骨は脆弱であることから作業が困難を極めたことから、12月9日に調査方法の検討会を開催し、遺構を地山ごと切り取って室内で調査することとした。その後、ビニールや川砂で養生し、現地で越冬させた。

遺構を地山ごと切り取るには、その周囲の調査を完了させる必要があった。SK439周辺は、遺構が密集する範囲であるため調査が難航し、切り取り作業は2022年9月26日～10月1日に実施した。切り取り後は、新潟医療福祉大学に設置した整理用プレハブに搬入し、本格的な調査を開始した。なお、発見後約2年を経過していたが、遺存状態は良好であった。

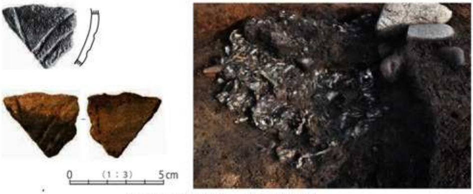
新潟医療福祉大学では、焼人骨に整理番号を付し、部位を同定しながら1点ずつ取り上げを行い、2024年12月までに焼人骨の取り上げを完了した。また、焼人骨の取り上げとともに適宜、写真撮影、オルソ画像の作成を行いながら調査を進めた。焼人骨の取り上げ後には、遺構の掘り方の確認、新たに発見された遺構の調査などを行い、2025年3月にすべての記録作業を完了した。

なお、2022年9月10日（現地）・10月30日（新潟医療福祉大学）、2023年11月26日（新潟医療福祉大学）に調査状況を一般公開した。また、2023年6月18日には研究者向けの公開を行い、遺構の評価や調査方法について、多くのご教示をいただいた。

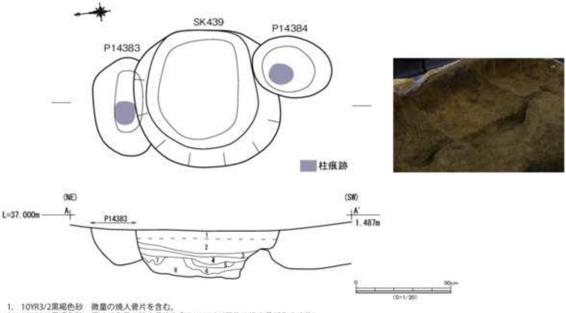
### 2）考古学的所見

**【検出面と時期】**

遺構を検出した当時の担当者の所見によれば、SK439はⅢb層に覆われていたという。付近の基本層序と対比しても、その所見に矛盾はなく、検出面はⅢb層下面に位置づけられる可能性が考えられる。ま




第15図　SK439出土土器と出土状況




1. 10YR3/2黒褐色砂　微量の焼人骨片を含む。
2. 10YR3/2黒褐色砂　極めて多量の焼人骨片を含む。ここより下位に焼人骨が集中する。
3. 10YR3/2黒褐色砂　2層と同質のシルトを含むが、ほぼ焼人骨からなる。
四肢骨で外周を方形に区画。3層より下位に焼人骨の有意な配列が認められる。
4. 10YR4/2灰黄褐色砂　ほぼ焼人骨からなり、砂・シルトをほとんど含まない。四肢骨を東西方向に並列する。
5. 10YR3/2黒褐色砂（中粒砂）　焼人骨を極めて多量に含む。
南側テラス下で東西方向に広がる長方形区画内のみで認められる。
6. 10YR5/4にぶい黄褐色砂（細礫混じり粗粒砂）　焼人骨を多量に含む。φ15～20cmほどの地山ブロックをまばらに含む。
7. 10YR3/2黒褐色砂（極粗粒砂～細礫混じり中粒砂）　焼人骨の小片をごくわずかに含む。
8. 10YR5/4にぶい黄褐色砂（細礫混じり中粒砂）　比較的粒度が細かく均質な土質。焼人骨の細片・φ1～2mmの炭化物粒をごくわずかに含む。
掘り方部分を整地した痕跡か。

第16図　SK439の遺構平面図・断面図

第17図　焼人骨集積土坑SK439の焼人骨出土状況
（左：第7次調査の状況、右：第8次調査の状況）

た、自然流路SR103縁辺の斜面際に位置し、SK439はSR103の埋め立て後、平地化された後に構築された可能性が高い。SR103の埋め立ては三十稲場式土器新段階に完了しており、集落の変遷観を踏まえると、SK439の年代を南三十稲場式土器段階に位置づけることができる。埋土の最上位を覆う1層中からは、南三十稲場1式段階の土器片が出土しており（第15図）、このころに形成された遺構と考えたい。なお、現在、焼人骨を試料とした年代測定等を行っている。

**【形状】**

SK439は、検出した翌日に楕円形の掘り込みをもつ土坑と評価し、長径150cm、短径100cmの楕円形の掘り方をもつ土坑と報告してきたが、所見を大幅に修正することとなった。調査の最終段階にさしかかった2025年1月に、遺構を固めた薬剤を除去し、切り取った遺構全体を再精査したところ、SK439と複数の柱穴が重複することが明らかになった。また、現地調査時の記録を再整理し、断面の再精査を行った。その結果、楕円形と見ていたプランは、土杭と複数の柱穴の集合体であることが明らかになった。SK439の規模は、長軸約76cm、短軸約74cm、検出面からの深さ約26cmで、方形または多角形の平面形で有段の掘り込みをもつ土坑であることが確定した（第16図）。

周囲の遺構との切り合い関係は、SK439が北側のP14383を切り、南側のP14384に切られることを確認した。したがって、遺構の構築順序は、P14383→SK439→P14384となる。P14383・P14384は、平地建物に伴う柱穴と考えられ、柱痕が認められた。平地建物が多く建てられた時期にSK439を位置づけることができ、集落の変遷観と調和的に理解することができる。

なお、現地調査時にSK439に伴うと考えられた大型の礫は、P14384の埋土に含まれることが明らかになった。P14384は、SK439を切るように掘られており、焼人骨の配列の一部を乱している。このような状況から、P14384の埋土には、焼人骨の小片が混在した。本遺跡においては、埋め土材として大型の礫を利用することが多く、SK439に伴うと考えられた礫もそのひとつと判断した。

**【出土遺物】**

SK439から出土した遺物は極めて少ないことが特徴である。埋土最上位の1層から、南三十稲場1式の土器片（焼人骨集中直上）、凹石が出土したが、二次的な混入である可能性がある。2～5層では、ほぼ焼人骨しか出土していない。時期を特定できない土器の小破片や、礫片が少数出土し、これも二次的な混入とみている。少なくとも、副葬品と見られる遺物は認められず、焼人骨が集中的に出土した2層以深では、炭化物もほとんど出土していない。土坑に被熱面が認められないことも踏まえれば、遺体は他所で焼成され、収骨してから納められたと判断できる。

**【土坑の形成過程】**

埋土の堆積状況、焼人骨等の出土状況、周囲の遺構との切り合い関係の整理から、SK439の形成過程を復元したい。

SK439構築以前、西側にある自然流路SR103が埋め立てられ、それにより形成された緩斜面地にSK439が構築された。周囲には柱穴が密集しており、SK439の形成前後に平地建物が建てられたと考えられる。SK439以前にP14383、以後にP14384が掘削されている。すなわち、流路の埋め立て後、断続的に平地建物が建てられた間に位置づけることができる。

開口部で長軸約76cm、短軸約74cm、深さ約26cm、遺構中位の有段部で長軸約60cm、短軸約56cmの掘り込みが掘られ、最下部には厚さ10cmほどの8層が堆積している。8層は地山と区別が難しい土質であるが、焼骨の小片や炭化物粒をごくわずかに含み、地山と比べると粒子の細かな均質な土質である。この

堆積後に焼人骨の埋葬が始まっていることから、埋葬前に整地が行われた痕跡といえるかもしれない。

5・6層は、南側の長方形の範囲内でのみ認められた。長方形に掘り込み、ここを中心に焼人骨の埋葬が始まっている（第17図右）。5層は、3～4層に認められる集中的な埋葬に連続すると考えられるが、これらよりも明らかに1段深くなっている。また、上下には見られない黒褐色砂が含まれており、その由来については検討が必要である。

4層では、土坑の全面に焼人骨が濃密に分布する。構成物がほぼ焼人骨からなり、土壌や砂礫をほとんど含まない。また、5・6層が広がる長方形区画の長軸と平行するように、四肢長骨が並列されており、意図的に配列された可能性がある。なお、調査中に頭骨が比較的多く認められると考えたが、部位別の深度を確認したところ、4層段階ではそうはいえない。

3層では4層と同様、土坑の全面に焼人骨が濃密に分布する。土壌等をほとんど含まず、ほぼ焼人骨で構成する。外周を四肢長骨で方形または多角形に囲っており、配列された可能性が高いが、土坑の外周に沿うように配列されたと捉えることもできる（第17図左）。外周の配列の内側にも焼人骨が密集し、配置に関わる規則性は認められない。

2層では3・4層と同様、土坑の全面に焼人骨が濃密に分布するが、黒褐色砂の混在が顕著である。黒褐色砂は1層に共通しており、被覆する1層が焼人骨の隙間に浸透した結果と考えられる。

最終的に埋土最上位の1層が被覆して埋没が完了する。1層はⅢb層に共通しており、また、南三十稲場1式段階の土器片が出土している。現状においては、Ⅲb層が堆積したころに埋没が完了したと見ておきたい。

なお、焼人骨が集中する2～5層の間に、間層となる堆積物はほとんど認められない。すなわち、各層の間に時間差が存在するものの、長期間、露出したような状況は考えにくい。現状では、比較的短期間のうちに、断続的に集積したと考えられる。

**3）焼人骨集積土坑の焼人骨**

SK439の焼人骨は概ね灰白色または白色である。骨と骨との間には間層がほとんどなく、焼土や炭化物はほとんど含まれていない。解剖学的な位置は保たれていないが、全身の骨の部位が確認されている。骨の部位としては特定の部位に偏る傾向はなく、より下の方には頭蓋骨が目立つ。また、骨には縄文時代人骨に観察されることが多い外耳道骨腫、柱状大腿骨、蹲踞面などの形態学的特徴の他に、抜歯習俗の痕跡が確認できる。骨からわかる年齢層には多様な年齢が含まれ、成人骨のほかに乳児・幼児があり、男女の両方が混在している。最小個体数は、下顎骨のオトガイ隆起部から導かれた8体に歯から推定された乳児段階の1体を加えて9個体である（註1）。

## 4　その他の焼人骨の概要

焼人骨集積土坑SK439以外にも焼人骨を検出し、新潟医療福祉大学で分析を実施している。

SL9131はSR103と重複して構築されており、SR103の埋め戻し後に構築された遺構である。平面形は楕円形で規模は長径約0.7mで、遺構検出面からの深さは約0.4mである（第18図）。底面から壁面にかけて強く焼けており、焼人骨（椀骨・歯根）は北側の埋土から出土している。上野遺跡では焼土を伴って焼人骨を検出する例はほとんどないため、貴重な事例である。

SK9262はSR103の東側に構築された遺構で、平面形は不整形で、長径約1.0 m、短径約0.8 mである（第19図）。埋土にはⅢa層に起因する土壌が堆積しており、遺跡の中でも新しい時期の埋葬事例と思われる。

第18 図　SL9131焼土検出状況・完掘状況

第19図　SK9262検出状況・セクション

第20図　P10174検出状況・石鏃出土状況

第21図　P10174出土の石鏃

第22図　SK9236焼人骨状況

遺構の東側で被熱した扁平な礫が置かれており、形態的な特徴を合わせると土坑墓と考えられる。

P10174は扁平な石を蓋石状に上面に配置する遺構で、埋土中に焼人骨が集中し、骨の間に土壌が堆積している。平面形は楕円形で長径約0.64m、短径約0.5mである（第20図）。焼人骨の量はSK439よりも明らかに少なく、遺存状態は良好でない。焼人骨とともに石鏃が出土し（第21図）、焼人骨直下では炭化物を確認している。

SK9236はP10174に隣接する場所から検出した遺構で、第9次（2025年度）調査でも継続して調査している。平面形は楕円形で、規模は長径約0.64m、短径約0.4mである（第22図）。焼人骨間に土壌が堆積していることを確認している。SK439よりも明らかに焼人骨の検出数が少なく、焼骨間に土壌を有するなどP10174の類似する点がある。近接した場所に両者があることが興味深い。

## 5　焼人骨についての若干の考察

縄文時代の焼人骨を集成し、第1表に掲載した（註2）。北海道から沖縄県まで広範囲に分布している。時期としては縄文中期から確実な事例が認められ、後期以降に増加する。各県の遺跡数は5遺跡以下がほとんどであるが、長野県、北海道、新潟県では5遺跡を超え、長野県が19遺跡と特に多い。長野県では1遺跡で複数の事例が検出され、他地域でも複数事例の遺跡があることから焼人骨は偶発的な存在ではないことが分かる。

焼人骨は高温で焼かれたことで無機質となり、一般的な土壌であれば土葬の人骨よりも残りやすい。しかしながら、検出した遺跡数は100遺跡に満たない程度で、極めて限られている。その少なさから焼人骨の特殊性を知ることができる。出土遺構は土坑墓に限らず、配石墓や土器棺墓、包含層から検出されており、埋葬施設との関係性を示す偏りはない。焼人骨を検出する遺構では、焼土や灰、炭化物を伴う場合と、それらを伴わない場合があり、人骨を焼いた痕跡が残っている事例は少ない。岩手県上米内遺跡RD39土坑やRD41土坑では、焼人骨が出土し、壁や底部が黒っぽく焼け焦げている。京都府伊賀寺遺跡の土坑SK20では焼土・炭化物とともに埋土が2層あり、掘り返されてはいるが、火葬した場所とされている。焼人骨とともに焼土や炭化物が出土する事例は多いが、遺構内は被熱しておらず、人骨を焼いた場所は別の場所と考えられていることが多い。

焼人骨は変形や細片化して部位同定が困難であるが、性別は男女ともにあり、子どもの事例もある。性別や年齢段階も偏るような傾向は見受けられない。単体以外にも最小個体数が複数個体の事例がある。5体以上の事例としては岩手県萪内遺跡（後・晩期）、岩手県上米内遺跡（後期）、新潟県元屋敷遺跡（後期以降）、新潟県寺地遺跡（晩期）、長野県中村中平遺跡（晩期）、愛知県伊川津貝塚（晩期）、京都府伊賀寺遺跡（後期）、大阪府西福井遺跡（後期）、大阪府鬼塚遺跡（晩期）があり、新潟県寺地遺跡、愛知県伊川津貝塚、京都府伊賀寺遺跡、大阪府鬼塚遺跡では女性や子どもを含んでいる。

上野遺跡では今のところ焼人骨を焼いた遺構は明確になっていない。焼土が形成されたSL9131では焼人骨が出土しており、人骨を焼いた遺構の可能性があるが、断定するまでには至っていない。焼人骨が出土した遺構は集落の規模に比して少ない。骨組織の分析を進めており、土葬後に焼かれたと考えられるが、一次葬となる土坑墓を含む土坑の検出数は極めて少ない。京都府伊賀寺遺跡SK20を参考に、焼土や炭化物を含む遺構で掘り返しの痕跡を有する遺構も含めて検討する必要がある。また、焼人骨集積土坑SK439では男女が混じり、子どもの骨も含まれていた。先に述べたように同様な事例は散見される。焼かれることによる変形や収縮、細片化で、性別の鑑定は困難な側面もあるが、単体でも女性とされる焼人骨がある

ことから、焼人骨を集積するに際して性別や年齢による区分はなかったものと考えられる。

## 6　おわりに

本稿では、上野遺跡の第７次・第８次調査の成果を報告し、焼人骨については若干の考察を試みた。本遺跡は長期的な整理作業により報告書を作成するが、現段階での所見をまとめることで、今後の整理作業にも活かせると考えたため報告した。

焼人骨集積土坑については、経過や現段階の考古学的な所見を記載した。現場作業と同時に新潟医療福祉大学で調査を進め、第８次調査の期間で焼骨の取り上げが完了し、遺構の掘削や記録作業も終了したため、本報告に含めて記載した。また、全国的な集成により若干の検討を試みたが、その希少性からその具体的な背景を説明するまで至っていない。人類学的な分析結果も含めて、再度、検討が必要である。

最後に、本遺跡の調査にご協力頂いた地域の方々やご指導頂いた方々に感謝を申し上げる。

## 註

1）新潟医療福祉大学の奈良貴史氏のご教授による。

2）縄文時代の出土焼人骨一覧は、過去の文献［石川 1988、設楽 1993］や墓制に関わる資料集［南北海道情報交換会第 20 回記念シンポジウム実行委員会 1999、関西縄文文化研究会 2000、縄文時代文化研究会 2019、長野県内遺跡出土古人骨データベース（https://naganomaibun.or.jp/news/21566/）］を参考に把握し、各文献にあたって作成した。また阿部友寿氏、加藤隆則氏に事例等をご教示頂き、深澤太郎氏・山口晃氏に文献収集のご協力を頂いた。なお、本一覧の責任は加藤元康にある。

## 引用文献

石川日出志 1988「縄文・弥生時代の焼人骨」『駿台史学』74 pp.84-110　駿台史学会

関西縄文文化研究会 2000『関西の縄文墓地資料集』

新潟県教育委員会・公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2019『新潟県埋蔵文化財調査報告書 281 集 上野遺跡Ⅰ 第１次調査』

設楽博已 1993「縄文時代の再葬」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 49 集 pp.7-46　国立歴史民俗博物館

品田髙志 1999「越後における縄文後期住居の検討－柱穴配置による住居認定への模索－」『新潟考古学談話会会報』第 20 号 pp.35-39　新潟考古学談話会

平　慶子・奈良貴史・加藤　学・石川智紀 2023「縄文時代後期の焼人骨集積土坑の調査」『季刊考古学』第 164 号 pp.93-94・97-98　雄山閣

富樫真理 2018「早稲田の歴史」『早稲田里山の自然と歴史　新潟県村上市早稲田「里山」自然調査研究所』pp.105-120　早稲田里山研究会

南北海道情報交換会第 20 回記念シンポジウム実行委員会 1999『北日本における縄文時代の墓制資料集』

新潟県農地部 1991『土地分類基本調査　塩野町』新潟県

新潟県埋蔵文化財センター 2025『発掘！新潟の遺跡 2024』新潟県埋蔵文化財センター・公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

縄文時代文化研究会 2019『列島における縄文時代墓制の諸様相』

## 第1表　縄文時代の出土焼人骨一覧（1）

| | 所在地 | 遺跡名 | 遺構名 | 遺構所見 | 時期 | 人骨所見 | 引用・参考文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 北海道苫小牧市 | 柏原18遺跡 | 10号墳墓 | 9号墳墓より新しい。焼骨群は60cm×35cmの範囲で検出された。強度の火熱を受けて白色の細～小破片化していた。土坑は楕円形の長軸推定80cm、短軸50cmで、断面形は深皿状を呈し、検出面からの深さ15cmであった。覆土は単一で、焼骨群が5cmほどの厚さで堆積。被熱で細片化した小型の剥片、碧石製の勾玉で変色している。 | 晩期 | 頭蓋が中央に位置し、押しつぶされたような状態。人骨は強く火を受け焼けている。頭蓋の一部、臼歯2、破片となった肋骨片、四肢骨（中手・中足骨・指骨）、主要骨は割れたり、欠けたりしてその一部を残すのみ。四肢骨では成人の域に達している。 | 苫小牧市埋蔵文化財調査センター1995『苫小牧東部工業地帯の遺跡群』苫小牧市教育委員会 |
| 2 | 北海道千歳市 | 美々4遺跡 | P-59 | 平面形は楕円形、長軸1.20m、短軸1.10m。中央部からシラカンバ属と思われる樹皮を用いた0.7×0.45mの容器状のものを検出。容器状のものは、底面に1枚の樹皮、湾曲した側面に2～3枚を組み重ねて作られている。樹皮には炭化した部分が認められる。頭位は歯と上顎骨の位置から南東方向。歯は焼けた可能性がある。漆器と櫛、垂飾が出土している。漆器の底部付近からは、焼けた獣骨が出土している。 | 晩期後葉 | 小さな骨細片約30個、破損し完形を示さない歯牙のエナメル質部分十数個を残す。性別・年齢は推定できない。歯牙はいずれも表面が黒っぽく変色し、一部硬化し、火に焼かれたような感じを受ける。しかし、わずかに残る小片はほぼ正常で、焼成を示す所見はない。歯牙のみ焼成は不自然。歯冠には明らかに焼成を思わせる所見が出現しており、X線によってもそれを否定しえない結果が出ている。 | 北海道埋蔵文化財センター1984『北海道埋蔵文化財センター調査報告書14：美沢川流域の遺跡群Ⅶ』北海道埋蔵文化財センター、財団法人北海道埋蔵文化財センター1997『北海道埋蔵文化財センター調査報告書：美々・美沢』北海道埋蔵文化財センター |
| 3 | 北海道千歳市 | 美々5遺跡 | MP-36 | 平面形は楕円形で、土壙底面から人骨を検出。残っている人骨は屈葬と考えられる。成人骨と小人骨が混在。頭骨のまわりに焼骨および炭化物が密着するような状態で検出され、玉が1点出土。 | 晩期 | 成年骨2個体分を同定。この他、総重量30ｇの焼骨片を検出。骨片はいずれも熱を受けて収縮。椎骨椎弓、椎体及び椎弓、左肩甲骨の破片、左手の舟状骨、左第2中手骨、指の末節骨、末節骨の骨端が癒合するので思春期以後と想定。性別不明。頭骨片や四肢長骨が見当たらないので、1個体分を構成しているとは思われない。前記の成人骨の一部であるのか、まったく別個体であるのかは明らかでない。 | 財団法人北海道埋蔵文化財センター1983『財団法人　北海道埋蔵文化財センター調査報告書3：美沢川流域の遺跡群Ⅷ（美々4・美々5・美々6・美々7・美沢1・美沢3）』財団法人　北海道埋蔵文化財センター |
| 4 | 北海道富良野市 | 無頭川遺跡 | A18 Pit20 | ほぼ円形の土坑で、規模は80cm×70cm、深さ50cmである。覆土の上部には黒曜石のチップを多量に含む土層で、下に行くにつれて、焼土・炭化物を含む。南側の底面近くから人骨。頭を下に向けたような姿勢で焼土に包まれるように出土。人骨の上に、長さ15cm、直径4cmの炭化材が残る。礫10数個を覆土から検出。 | 晩期後葉 | 頭蓋骨の破片、椎骨を主とし、椎体と椎弓の破片、尺骨骨体の遠位端と思われる長骨。頭蓋骨の色調は乳白色、やや青みを帯びた白色をしたものが多い。椎骨も熱により白く変色。長骨は長軸方向に裂け、変形している。男性の可能性が高く、熟年と考えられる。 | 富良野市教育委員会1988『富良野市文化財調査報告4：無頭川遺跡』富良野市教育委員会 |
| 5 | 北海道余市町 | 大川遺跡 | GP-309 | 径2.23×1.85m、深さ約110cmの長い楕円形。上面は同心円状に外側から炭化物を主体とする黒色砂が8cmの幅で確認され、その内側にベンガラ混じりの砂質粗粒が30cm程の幅で巡っている。厚さ30cm程の砂層下にベンガラの範囲を確認。ベンガラ直下から5体の合葬。北側から遺体1～5。遺体上面が全体的に黒色を呈し、火葬墓と断定。 | 晩期前半 | — | 余市町教育委員会2001『大川遺跡における考古学的調査：大川遺跡における考古学的調査』余市町教育委員会 |
| 6 | 北海道余市町 | 大川遺跡 | GP-432 | 径1.70×1.15m、深さ約72cmの隅丸方形。上面に配石。坑底部中央にベンガラの範囲を確認。ベンガラ除去時に東側を中心に炭化材を検出し、火葬墓と判断。その下部より遺体確認。腐食が著しい。 | 晩期前半 | — | 余市町教育委員会2001『大川遺跡における考古学的調査：大川遺跡における考古学的調査』余市町教育委員会 |
| 7 | 北海道余市町 | 大川遺跡 | GP-445 | 径2.03×1.65m、深さ約73cmの長い楕円形。ピット上面に配石。墓壙の北東50cm程の所に25×15cm、高さ49cmの立石。配石中央に異形土製品出土。2体合葬にベンガラが厚く堆積。両方の遺体の上面および両脇に炭化物が検出され、火葬墓と思われる。 | 晩期前半 | — | 余市町教育委員会2001『大川遺跡における考古学的調査：大川遺跡における考古学的調査』余市町教育委員会 |
| 8 | 北海道余市町 | 大川遺跡 | GP-449 | 径1.93×1.30m、深さ約105cmの長い楕円形ピット。上面はやや大形の礫が配され、南側に注口土器が出土。坑底部にベンガラで厚く覆われた遺体を検出。腐食が著しい。ベンガラの上面両側と遺体の両脇に炭化物を検出し、火葬墓と考えられる。 | 晩期前半 | — | 余市町教育委員会2001『大川遺跡における考古学的調査：大川遺跡における考古学的調査』余市町教育委員会 |
| 9 | 北海道余市町 | 大川遺跡 | GP-460 | 径1.26×1.12m、深さ約90cmの長い楕円形。ピット上面に配石、その南寄りに石柱。ほぼ中央に土器底部が出土。ベンガラで厚く覆われた遺体を確認。腐食が著しく細部は不明。歯を検出。遺体の両脇と下面より炭化材が出土し、火葬墓と断定。遺体上面北西側より赤塗りの腕輪1点が出土。 | 晩期前半 | — | 余市町教育委員会2001『大川遺跡における考古学的調査：大川遺跡における考古学的調査』余市町教育委員会 |
| 10 | 北海道余市町 | 大川遺跡 | GP-505 | 径1.26×0.84m、深さ約45cmの長い楕円形。覆土上面に[illegible]土器・撚糸土器が出土し、中位に礫を確認。ベンガラ混じりの遺体を検出。腐食が著しく、頭部等の細部不明。遺体正面は黒色を呈し、火葬墓の可能性がある。 | 晩期前半 | — | 余市町教育委員会2001『大川遺跡における考古学的調査：大川遺跡における考古学的調査』余市町教育委員会 |
| 11 | 北海道斜里町 | 朱円栗沢遺跡 | A号-13号土坑墓 | 人骨土壙第13号墳は火葬後の骨片を埋葬してあった。 | 後期末～晩期初頭 | — | 河野広道1955「先史時代史」『斜里町史』第1巻 斜里町史編纂委員会 |
| 12 | 北海道斜里町 | 朱円周堤土墓 | A号土墓13号墓 | 火葬後の骨を埋めたのが1例ある。火葬骨に付着して、着衣のアツシの一部とみられる小片も発見された。 | 晩期 | — | 河野広道1981「斜里町朱円白墳の調査」『河野広道ノート考古編1：北海道北部の考古学的調査』北海道出版企画センター、pp.118-119 |
| 13 | 北海道斜里町 | ピラガ丘遺跡秋山地点 | PIT36 | やや角ばった楕円形で、規模は1.9m×1.6m、深さ0.7mである。浅鉢状の掘り込みであるが、人体を安置した部分だけやや深みを持ち床面が2段になっていた。上層部に木炭、土器を置く。焼け跡も伴っていた。木炭は上層と下層の2か所で見られ、下層部の木炭は人骨の脇（肋腹のやや下）から中身を覆うように置かれてあった。ベンガラも寛骨の右側で少しみられた。上層部には木炭と土器、下層部には木炭と土器、石器、装身具（サメの歯）があった。埋葬方法は仰臥屈葬で、手は胸の上で右腕を上にして交差させていた。 | 晩期 | 全身の骨格が残存していたが、火を受けて細片に分かれている。右尺骨の粗面は強く発達。大腿骨は骨体に柱状形成が認められる。脛骨は骨体のほぼ中央で、大きく扁平である。大腿骨や脛骨の骨体は太く、男性と推定。椎骨の関節面に関節症性の変異があり、成人で熟年に達していた可能性が高い。 | 斜里町教育委員会1990『斜里町文化財調査報告4：ピラガ丘遺跡秋山地点』斜里町教育委員会 |
| 14 | 北海道斜里町 | ピラガ丘遺跡秋山地点 | V層 | — | — | 1989年度出土の資料は焼けており同定は困難であったが、ヒトの歯を確認することができた。四肢骨破片もみられ、すべて人骨と思われる。 | 斜里町教育委員会1990『斜里町文化財調査報告4：ピラガ丘遺跡秋山地点』斜里町教育委員会 |
| 15 | 青森県青森市 | 松山遺跡 | 土器棺No.1 | 昭和53年4月の農作業中に土器棺3個が出土し、うち1個に人骨が入っていた。 | 後期前半（十腰内1式） | 人骨は焼熱を強く受けて変形。総重量115ｇ。頭骨・椎骨・上腕骨・前腕骨(橈骨・尺骨)・中手骨・寛骨(骨盤)・大腿骨・下腿骨(脛骨・腓骨)などほぼ全身骨。歯は欠如。頭蓋冠の縫合は内板は閉じているのに外板が開いている。骨盤体が華奢。壮年期前半女性のほぼ1体分の人骨との鑑定。 | 葛西　励2002「第2章　土器棺内の人骨と副葬品」『再葬土器棺墓の研究』『再葬土器棺墓の研究』刊行会 |
| 16 | 青森県六ヶ所村 | 上尾駮(2)遺跡 | C-26号配石 | DE-172グリッドに位置する。大形礫5個により構成され、両側が解放されるコの字状を呈する。下部に土坑が確認された。土坑は、開口部115×100cm、底面85×80cm、深さ50cmで、底面から焼化された人骨が細片状で検出された。また、人骨の10cm程上面から赤色顔料が小ブロックで出土した。人骨は成人1個体分と考えられ、土坑底面中央に埋葬されていた。 | 後期前葉（十腰内1式） | 骨片は白色を呈し、細かにひび割れし、一見して焼骨であることが分かる。骨片は焼き締まって硬化し、ねじれて変形している。焼き割れて細片となっている。保存状態が極めて悪く、部位を同定できたのは数片にすぎない。第1頸椎(環椎)の外側塊、横突孔から先の横突起の先端部欠如、肋骨片4個、左肋骨の肋骨結節付近の破片、右肋骨体の破片、左右不詳の肋骨体片、橈骨体または尺骨体の一部と思われる破片。重複する部位が見られないため、1個体分の人骨とみなして差し支えないと思われる。収縮しているが、成人骨としての十分な大きさを保有しているので、成人骨と考えて良い。 | 青森県埋蔵文化財調査センター1988『青森県埋蔵文化財調査報告書115：上尾駮(2)遺跡』青森県教育委員会 |
| 17 | 青森県三戸町 | 泉山遺跡 | Ⅲ区B-9グリッドⅢ層 | — | 前期～晩期 | 焼けた人骨片。保存状態は不良。合計3個。人骨片であるが骨片が小さく人体のどの部分の骨であるか確定できない。 | 青森県教育庁文化課1996『青森県埋蔵文化財調査報告書32：泉山遺跡発掘調査報告書』青森県教育委員会 |
| 18 | 青森県三戸町 | 泉山遺跡 | Ⅲ区第7号フラスコ状ピット上部 | 口径136cm、146cm、胴径125cm、底径225～226cm、深さ90cm。上部に礫があり、石鏃が出土している。 | 中期(円筒上層a) | 焼けた人骨片。保存状態不良で、骨片約30個と大きな骨片1個が土中に散乱。細骨片の種類は不詳で、大きな骨片は成人の肋骨頭の一部と思われる。性別は不明。 | 青森県教育庁文化課1996『青森県埋蔵文化財調査報告書32：泉山遺跡発掘調査報告書』青森県教育委員会 |
| 19 | 岩手県盛岡市 | 萪内遺跡 | F-286 | 隅丸方形土坑(182cm×158cm)、深さ82cm。底面は皿状。柱穴を有し、人骨が入っている。 | 後・晩期 | 骨片は色調が白色ないし灰白色を呈し、表面に小さなひび割れが生じてることから焼熱を受けた焼骨と思われた。頭蓋骨でも上顎骨、下顎骨、椎骨は破損していない。手根骨、中手骨、指骨、足根骨、中足骨が全形を保存、片寄りがないことから、ほぼ全身の骨が埋葬。手・足の指が少ないのは火葬されたために細い指は焼熱による破壊が強いと思われる。右側中足骨16個、左側距骨13個、第2頸椎10個、左側踵骨10個、上顎骨左側臼歯部10個、左側下顎頭9個がほぼ完全な形態で同定されていることから、少なくとも10～13体以上が埋葬。6区画の各区画に平均2～3体分の骨が含まれていることは、この土坑に骨を埋葬する際、何らかの人為的な配分がなされた可能性がある。上顎骨が小さいこと、中足骨の大きさ等から女性が含まれている。頭骨・歯牙を中心にして年齢を推察すると、2～3歳1体、5～6歳1体、10～15歳2体、15～20歳2体、20～30歳5体、30～50歳3体、50歳以上1体の合計15体が少なくとも存在した。 | (財)岩手県埋蔵文化財センター1982『岩手県埋文センター文化財調査報告書32：盛岡市　萪内遺跡』(財)岩手県埋蔵文化財センター |

## 第１表　縄文時代の出土焼人骨一覧（２）

| | 所在地 | 遺跡名 | 遺構名 | 遺構所見 | 時期 | 人骨所見 | 引用・参考文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 20 | 岩手県盛岡市 | 上米内遺跡 | RD30土坑 | 洋梨形。壁や底部が黒っぽく焼け焦げている。長径1.6m、深さ30cm。砂礫の混じる黒褐色の覆土に大量の人骨破片と炭化物が出土。骨片のなかには頭骨や大腿骨など部位鑑定可能な骨もあったが、かなり混じっており、部位・個体識別は不明。 | 後期 | 少なくとも8個体以上の骨。小児の骨を含む。頭蓋骨片778個のうち、33個の部位を同定。上顎骨は左側3個、右側3個を同定。左側と右側で対にならないことから、8個体分を想定。小児の下顎骨が含まれる。椎骨は528個の骨片。軸椎の歯突起が6個存在し、いずれも成人。肋骨524個。第一肋骨3個を除くと小片のため同定不可能。上肢骨204個、下肢骨71個。部位不明長管骨930個。 | (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1995「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書220：上米内遺跡発掘調査報告書」(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター |
| 21 | 岩手県盛岡市 | 上米内遺跡 | RD241土坑 | 楕円形状。底面や壁には礫が露出し、壁や底部は黒っぽく焼け焦げている。長径1.7m、深さ30cm。黒褐色の覆土には大量の人骨破片と炭化物が出土。骨片には頭骨や大腿骨などの部位鑑定の可能なものがあったが、混じった状況で部位や個体識別は不明。墓形土製品が出土し、この土坑で火葬して埋葬したと思われる。 | 後期末葉 | 少なくとも10個体以上の骨。小児の骨が認められる。2000以上の骨片のうち、部位同定は1/121/6程度。頭蓋骨片1003個、104個で部位を同定。上顎骨の切歯縫合消失または外側が縦線状に残存する程度であるため20～30歳と思われる。5個で抜歯の痕跡を確認。下顎骨23個。右側臼歯部下顎体は10個認められたため、少なくとも10個体が埋葬。4個で顎骨の抜歯の痕跡。椎骨328個の骨片、環椎1個、軸椎の歯突起10個存在し、いずれも成人。上腕骨滑車、橈骨頭、尺骨を多く確認。中手骨4本、第三中手骨左右ともに10個出土。少なくとも10個体を埋葬。肋骨413個、上肢骨184個、下肢骨10個、部位不明長管骨495個。 | (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1995「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書220：上米内遺跡発掘調査報告書」(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター |
| 22 | 岩手県北上市 | 八天遺跡 | G-26イ遺構 | 85×80cmの円形。深さ38cm。土器片2、イノシシ下顎骨も出土。表土層を除去した段階で覆土は白い骨片を多く含む黒い覆土のピットを認識。覆土は全体が黒色土で炭化物、焼土は含まず硬化面も存在しない。 | 後期初頭 | 焼骨の総重量は664.5g。頭骨、肋骨・椎骨、頭蓋骨1歯を含む。四肢骨、手・足骨を同定。四肢長骨の破片がとくに少ないのが目立った傾向。同定できないものが多い。歯突起部を含む前弓の破片が3点。少なくとも3個体の人骨がある。1例は歯突起周囲面に強度の退縮骨棘があり、高年齢を示唆。2例は正常であり、1例はとくに小さく、未成年の可能性もある。手根骨13点のうち、右の舟状骨が2点、月状骨が3点含まれ、少なくとも成人2個体の骨が存在。少なくとも成人2個体と10歳以下の未成年者1個体が含まれ、総量は1個体分に満たず、断片的・部分的にしか保存されていない。成人の1個体は老年性の変化がみられる。このほか、イノシシの左下顎頭が1点同定された。 | 北上市教育委員会1978「文化財調査報告24：八天遺跡」北上市教育委員会 |
| 23 | 岩手県北上市 | 八天遺跡 | H-33イ遺構 | 140×130cmの方形、隅丸方形に近いプラン。深さ25cm。土器片2、円石1出土。遺構確認面では骨は露出せず。覆土は炭化物、焼土等を含まない地山の土質に近い。層序も分離できず。骨は底面に近い部分で出土。肋骨や他の骨片がきわめて散在していた。土坑の西半分にやや多い。 | 後期後半 | 総重量829.7g。少なくとも成人2個体の焼けた人骨が含まれている。全身火葬骨の成人男性標準重量約1.5kgに比べて、量はかなり少ない。頭骨、肋骨・椎骨、頭蓋骨、上肢骨、手骨、下肢骨、足骨を同定。骨片は全体としてかなり良く焼けており、大小のひび割れと歪みを示し、ほとんどが灰白色を呈するが、なかには幾分黒みを残す部分もみられる。女性のものと推定される右上顎骨歯槽突起前部の破片、下顎骨オトガイ部の破片が残っている。右第1中手骨2本が完全な形で残っており、前者は男性、後者は縄文女性および現代男性の平均値とほぼ一致する。成人2個体分の全身骨格の各部がごく不完全に残っている。大きさから男性と女性である可能性が考えられるが判別精度は低い。 | 北上市教育委員会1978「文化財調査報告24：八天遺跡」北上市教育委員会 |
| 24 | 岩手県一関市 | 狐穴洞穴遺跡 | — | 人骨のほとんどが洞内北側で発見され、南側で出土していないが、南側は過去の調査で出土している可能性がある。第1号人骨より洞口部に向かって約2.5mの地点で発見され、角礫の下に3個体以上の頭蓋骨あるいは遺骸して安置されていた。頭蓋骨の上あるいは大腿骨、椎骨あるいは下顎がまとまって出土した。この骨の下にも角礫が敷かれてある。状況からすると第3号人骨は1個体づつ埋葬されたものではなく、同時に埋葬されたものであるが、頭蓋骨の向きは一定していない。 | 晩期後葉 | 3号人骨下顎3の成年性別不明の右側頭突起を残す骨。骨は焼かれており、黒灰色に変色している。3号人骨は少なくとも6個体分の頭骨が同定される。 | 岩手県立博物館 1985「岩手県立博物館調査研究報告書1：狐穴洞穴遺跡発掘調査報告書」岩手県立博物館 |
| 25 | 秋田県横手市 | 八木遺跡 | 第2区LJ282地点 | 第2区包含層中から検出。 | 後期初頭～中葉 | 14歳位の年齢に達したおそらく男性1個体分の火葬骨。総重量は985gで1個体分。人骨はかなりの高温で焼かれたと思われ、手及び足指の一部を除いてすべて小骨片と化し、収縮、変形が著しく、しかも骨表面に無数の亀裂が認められる。色調は部位によって異なり、黒灰色、灰色および白色のものが認められる。意図的に焼かれた、すなわち火葬されたものと考えてさしつかえない。 | 秋田県埋蔵文化財センター1989「秋田県文化財調査報告書182：八木遺跡発掘調査報告書」秋田県教育委員会 |
| 26 | 秋田県横手市 | 虫内Ⅰ遺跡 | LN45Aウ置場 | 遺物包含層 | 後期後葉～晩期前葉 | 長骨の破片1点。他の獣骨と同様に灰白色を呈しており、保存状態もあまり良くない。ヒトの骨はこれが唯一である。 | 秋田県埋蔵文化財センター1998「秋田県文化財調査報告書274：虫内Ⅰ遺跡」秋田県教育委員会 |
| 27 | 秋田県北秋田市 | 藤株遺跡 | SK05 | 193×95cmの楕円形の土壙墓。初めは焼土と炭が楕円形状に広がっており、それによりプランを確認。遺物は土坑面に多く、土器片とフレイク・チップであり、特別な副葬品はない。骨は2層の炭と4層の焼土に覆われて出土し、土坑内南側の底面からは、炭化した木材片も認められた。骨は西側と中央部の保存状態が良く、頭骨は検出されなかった。下半身の骨は破片で飛び散ったような状態で検出。深さは確認面から10cmほど、実際の掘り込み面は2層の上面と考えられる。骨の出土状態からは、二次的埋葬とは考え難く、土坑内で火葬したものと考えられる。 | 晩期：大洞B期 | 人骨は1個体分と考えられるが、全身的に強い焼熱をうけて変形し、白色ないし灰色に変じて、右上腕骨以外は小片あるいは破片と化している。火熱による灰化の度合いの強い白色の骨片は比較的よく保存されているが、灰化の度合いの弱い、黒灰色の骨片はすべて保存状態が悪い。下肢長骨の破片と思われる骨片が、土坑の南東西半に集中し、上肢骨、椎骨が北北西半に位置し、歯骨片がほぼ中央に分布している。右の上腕骨、前腕骨、手骨が解剖学的位置を保って、骨格の西側に位置している。下肢骨骨片の分布がきわめて不規則であり、頭骨の骨片が全く認められない点は奇妙であるが、全体としては、仰臥伸展位をとっていたものと推測。成人女性と推定。成年ないし熟年。上腕骨遠位端、前腕骨の近位端および遠位端の化骨が完了し、椎骨関節突起、肘関節、腕骨手根関節、手根間関節、指節関節、脛関節に全く老年性変化が認められないことから、成年ないし熟年の範囲内と推測。前腕骨の骨幹径が小さいこと、大腿骨切痕部の形態がどちらかというと女性的。右前腕の橈骨と尺骨は比較的よく保存されているが、ひび割れが入って、かなりの変形を受けている。 | 秋田県教育委員会1981「秋田県文化財調査報告書85：藤株遺跡発掘調査報告書」秋田県教育委員会 |
| 28 | 山形県村山市 | 宮の前遺跡 | 第1調査区C7グリッド | — | 後期後葉～晩期 | 焼骨はすべて人骨。小さな破片となっていたが、頭蓋骨を確認。四肢骨も少量含まれていたが、小さく割れていたため、部位同定はできなかった。収縮を予想しても頭蓋骨が比較的薄いことから若年と推測。性別は不明。 | 山形県埋蔵文化財センター1995「山形県埋蔵文化財センター調査報告書19：宮の前遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター |
| 29 | 福島県福島市 | 宮畑遺跡 | SK574 | 80×60cmの長い楕円形の土坑で、深さ最大30cm。骨片が混ざった黒褐色シルトが堆積。 | 後期中葉 | 頭蓋、体幹、上肢、下肢骨を同定。いずれも白色を呈し、細かな破片で、骨体表面に微細なひび割れが生じるなど、焼骨の特徴を示す。多量の骨片は主要骨だけではなく、末節骨など微細な部位もみられる。蝶後頭軟骨結合部の内側が閉じている状態が確認でき、若くても熟年(40～50歳程度)に達していると思われる。収縮・変形を考慮しても右有鉤骨が比較的大きく男性的である。遺構内に均一に骨片が混ざる点を考慮すると、骨となった状態で一個体分の全身骨格が遺構内に納められたと考えられる。 | 福島市教育委員会2010「福島市埋蔵文化財報告書206：史跡宮畑遺跡」福島市教育委員会 |
| 30 | 福島県福島市 | 宮畑遺跡 | 582号土坑 | 長軸1.25mの楕円形の土坑。掘り込みは浅く、遺構の中央部分を中心に多量の焼骨片が混ざっている。全体に混ざっており、土に混ざった状態で土坑内に納め置かれたものと思われる。手洗した分を水洗選別した。 | 後期中葉（加曽利B式期） | いずれも白色を呈した破片で、骨体表面に細かなひび割れが生じるなど、焼骨の特徴がみられる。頭蓋、上顎小臼歯、椎骨、肋骨、大腿骨/脛骨、腓骨?、四肢骨などの破片。年齢・性別は鑑定できる部位がなく不明。主要部位がみられるが、1個体分としては極めて少ないことから、他の場所で焼かれたものと推定。 | 福島市教育委員会2008「福島市埋蔵文化財報告書196：史跡宮畑遺跡」福島市教育委員会、福島市教育委員会2010「福島市埋蔵文化財報告書206：史跡宮畑遺跡」福島市教育委員会 |
| 31 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 第1墓坑2号棺 | 第1墓坑は楕円形の短軸0.8m、長軸1.1m、深さ0.3mで墓坑内から6個体の土器が出土している。 | 晩期末 | 骨はいずれも灰白色を呈するほどよく焼けている。1cmほどの頭骨片2点。 | 梅宮 茂他1986「霊山根古屋遺跡の研究」霊山町教育委員会 |
| 32 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 第1墓坑4号棺 | 第1墓坑は楕円形の短軸0.8m、長軸1.1m、深さ0.3mで墓坑内から6個体の土器が出土している。 | 晩期末 | 左肩骨下端の一部、その他長管骨骨体の小片3点、1cmほどの[illegible]1点。 | 梅宮 茂他1986「霊山根古屋遺跡の研究」霊山町教育委員会 |
| 33 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 第2墓坑1号棺 | 第2墓坑は直径1.1m、深さ0.35mの墓坑、3個体土器が収納。1号は正位で出土。 | 晩期末 | 5cm以下の頭骨片30余点、四肢骨骨片100点以上。前頭骨眼窩部、後頭骨鱗体、蝶形骨翼基部、肋骨骨体の一部などが同定された。ほぼ全身の骨から偏りなく検出されているように見られる。10点ほどの骨片の内面は炭化して黒くなっている部分が認められる。 | 梅宮 茂他1986「霊山根古屋遺跡の研究」霊山町教育委員会 |
| 34 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 第3墓坑2号棺 | 第3墓坑は楕円形を呈し、長軸1.4m、短軸0.8m、深さ0.4mで、6個体の土器が出土している。 | 晩期末 | 2cmほどの骨片2点、3cmほどの四肢骨片4点、他の不明小片3点。橈骨・尺骨の骨体一部が認められる。 | 梅宮 茂他1986「霊山根古屋遺跡の研究」霊山町教育委員会 |
| 35 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 第3墓坑3号棺 | 第3墓坑は楕円形を呈し、長軸1.4m、短軸0.8m、深さ0.4mで、6個体の土器が出土している。 | 晩期末 | 数cm以下の頭骨片約20点、四肢骨片30余点、椎骨片若干。前頭骨眼窩部を同定。大腿骨骨体一部2点、腓骨骨体小片2点が認められた。全身から偏りなく検出されている。数点の骨片では内側に炭化部分がある。 | 梅宮 茂他1986「霊山根古屋遺跡の研究」霊山町教育委員会 |
| 36 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 第3墓坑4号棺 | 第3墓坑は楕円形を呈し、長軸1.4m、短軸0.8m、深さ0.4mで、6個体の土器が出土している。4号土器は正位で5号土器と接近している。 | 晩期末 | 頭骨片3点、四肢骨片10余点。 | 梅宮 茂他1986「霊山根古屋遺跡の研究」霊山町教育委員会 |

## 第１表　縄文時代の出土焼人骨一覧（３）

| | 所在地 | 遺跡名 | 遺構名 | 遺構所見 | 時期 | 人骨所見 | 引用・参考文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 37 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 第3墓坑5号棺 | 第3墓坑は楕円形を呈し、長軸1.4m、短軸0.8m、深さ0.4mで、6個体の土器が出土している。 | 晩期末 | 頭骨小片2点、四肢骨片10点余、肋骨骨体の一部が認められる。上腕骨骨体の一部と考えられる骨片は内側に炭化した部分が付着している。 | 梅宮 茂他1986『霊山根古屋遺跡の研究』霊山町教育委員会 |
| 38 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 第4墓坑1号棺 | 第4墓坑は楕円形で長軸1.1m、短軸0.75m、深さ0.5mで、第5号墓坑と切り合い第5墓坑より古い。墓坑内からは3個体の土器が出土している。 | 晩期末 | 頭骨片3点、その他小片20点ほど。前頭骨の眼窩縁部分を同定。炭化した骨片が若干ある。 | 梅宮 茂他1986『霊山根古屋遺跡の研究』霊山町教育委員会 |
| 39 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 第5墓坑1号棺 | 第5墓坑はほぼ楕円形を呈する。長軸1.4m、短軸1.1m、深さ0.45mで、8個体の土器が収納された。1号棺は正位である。本墓坑の切り合いは第4墓坑よりも新しい。 | 晩期末 | 頭骨片8点、その他小片20点ほど。頭頂骨頭頂部、下顎骨右臼歯部の歯槽を確認。他に椎骨の破片がやや目立つ。 | 梅宮 茂他1986『霊山根古屋遺跡の研究』霊山町教育委員会 |
| 40 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 第6墓坑2号棺 | 第6墓坑は楕円形で、長軸1.1m、短軸0.9m、深さ0.4mを、墓坑内からは5個体の土器が出土している。1号土器の上にあたかも倒置された状況で出土した。 | 晩期末 | 3cm以下の頭骨片30点、椎骨片4点、肋骨片10点、手足骨6点、その他の長管骨小片多数。前頭骨頭頂部、上下顎歯槽部小片、椎骨一部、右第1中足骨、足の第1基節骨。中足骨と基節骨はかなり大きく、男性のものと考えられる。部分的に炭化した骨片数点。全身各部の骨が含まれる。 | 梅宮 茂他1986『霊山根古屋遺跡の研究』霊山町教育委員会 |
| 41 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 第6墓坑3号棺 | 第6墓坑は楕円形で、長軸1.1m、短軸0.9m、深さ0.4mを、墓坑内からは5個体の土器が出土している。 | 晩期末 | 頭骨の小片10点、椎骨片数点、その他四肢骨片10点余り。側頭骨錐体、下顎骨歯槽の一部を確認。部分的に炭化しているもの数点。 | 梅宮 茂他1986『霊山根古屋遺跡の研究』霊山町教育委員会 |
| 42 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 第7墓坑1号棺 | 第7墓坑は長軸1.4m、短軸1.1m、深さ0.3mで5個体の土器が収納されていた。墓坑からは少量の骨片と10cm内外の礫3点が出土。 | 晩期末 | 頭骨小片数点、その他の骨片20点ほど。 | 梅宮 茂他1986『霊山根古屋遺跡の研究』霊山町教育委員会 |
| 43 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 第7墓坑5号棺 | 第7墓坑は長軸1.4m、短軸1.1m、深さ0.3mで5個体の土器が収納されていた。墓坑からは少量の骨片と10cm内外の礫3点が出土。 | 晩期末 | 数cm以下の頭骨片約50点、その他骨片100点ほど。左頬骨の一部、下顎骨のオトガイ部から左第１大臼歯まで、下顎骨に抜歯。頭骨翼片、左右肋骨、左第1中手骨基部を同定。他に指趾骨体、全身各部から採取されている。 | 梅宮 茂他1986『霊山根古屋遺跡の研究』霊山町教育委員会 |
| 44 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 第8墓坑1号棺 | 第8墓坑は楕円形を呈し、長軸1.4m、短軸1.1m、深さ0.45mを測り、なかに12個体の土器が収納されていた。骨片が混じり合う大きな第2号土坑墓の上に営まれたもの。本墓坑からは蛤刃石斧1点が出土している。 | 晩期末 | 2.5cm程の頭蓋冠の破片1点のみ。 | 梅宮 茂他1986『霊山根古屋遺跡の研究』霊山町教育委員会 |
| 45 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 第8墓坑2号棺 | 第8墓坑は楕円形を呈し、長軸1.4m、短軸1.1m、深さ0.45mを測り、なかに12個体の土器が収納されていた。骨片がまじり合う大きな第2号土坑墓の上に営まれたもの。本墓坑からは蛤刃石斧1点が出土している。 | 晩期末 | 頭骨片9点、その他20点余。下顎骨が3個体出土。1点は5歳前後と推定、他2点は性別不明の左下顎枝の一部。 | 梅宮 茂他1986『霊山根古屋遺跡の研究』霊山町教育委員会 |
| 46 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 第10墓坑1号棺 | 第10墓坑は直径0.7m、深さ0.3mの円形の小墓坑で、なかより2個体の土器が出土している。 | 晩期末 | 長骨小片4点、他に不明小片2点。 | 梅宮 茂他1986『霊山根古屋遺跡の研究』霊山町教育委員会 |
| 47 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 第10墓坑2号棺 | 第10墓坑は直径0.7m、深さ0.3mの円形の小墓坑で、なかより2個体の土器が出土している。 | 晩期末 | 前頭骨片1点、その他50点ほど。 | 梅宮 茂他1986『霊山根古屋遺跡の研究』霊山町教育委員会 |
| 48 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 第11墓坑2号棺 | 第11墓坑は楕円形の小墓坑で長軸1.0m、短軸0.8m、深さ0.25mで、3個体の土器が出土。本墓坑は1号土坑墓と切り合い関係にあるが1号土坑墓よりは新しい。 | 晩期末 | 頭骨小片3点、その他7点。わずかに炭化した部分が認められた。 | 梅宮 茂他1986『霊山根古屋遺跡の研究』霊山町教育委員会 |
| 49 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 第12墓坑1号棺 | 第12墓坑は楕円形を呈し、長軸0.8m、短軸0.7m、深さ0.4mで第19墓坑、1号土坑と切り合い関係があり、1号土坑、19号墓坑よりは第12墓坑の方が新しい。 | 晩期末 | 四肢骨片十数点。椎骨骨体の小片が認められる。 | 梅宮 茂他1986『霊山根古屋遺跡の研究』霊山町教育委員会 |
| 50 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 第12墓坑3号棺 | 第12墓坑は楕円形を呈し、長軸0.8m、短軸0.7m、深さ0.4mで第19墓坑、1号土坑と切り合い関係があり、1号土坑、19号墓坑よりは第12墓坑の方が新しい。 | 晩期末 | 頭骨片2点。 | 梅宮 茂他1986『霊山根古屋遺跡の研究』霊山町教育委員会 |
| 51 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 第13墓坑1号棺 | 第13墓坑はほぼ円形を呈し、直径1.3m、深さ0.3mで、なかより2個体の土器が出土している。表土層下の2層はCグリッド付近の骨片層が流れ込んで人骨片が含まれている。 | 晩期末 | 頭骨片2点。 | 梅宮 茂他1986『霊山根古屋遺跡の研究』霊山町教育委員会 |
| 52 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 第13墓坑2号棺 | 第13墓坑はほぼ円形を呈し、直径1.3m、深さ0.3mで、なかより2個体の土器が出土している。表土層下の2層はCグリッド付近の骨片層が流れ込んで人骨片が含まれている。 | 晩期末 | 頭骨片5点、その他50点ほど。下顎骨オトガイ部、上顎左第2大臼歯1点も認められる。手足の骨が比較的多い（5点）。 | 梅宮 茂他1986『霊山根古屋遺跡の研究』霊山町教育委員会 |
| 53 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 第14墓坑1号棺 | 第14墓坑は13墓坑の直下にあり、長楕円形で、長軸0.75m、短軸0.6m、深さ0.4mで、3個体の土器が収納されている。 | 晩期末 | 頭骨片10点ほど、その他約10点。左舟状骨、中手骨、手足の基節骨各1点、坐骨の一部、大腿骨下端の小片も確認された。 | 梅宮 茂他1986『霊山根古屋遺跡の研究』霊山町教育委員会 |
| 54 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 第15墓坑4号棺 | 第15墓坑は大型の楕円形の墓坑で、長軸1.6m、短軸1.2m、深さ0.45mで、墓坑内から正位で整然と10個体の土器が収納されていた。 | 晩期末 | 頭骨片1点、椎骨骨体小片1点、その他小片3点。 | 梅宮 茂他1986『霊山根古屋遺跡の研究』霊山町教育委員会 |
| 55 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 第15墓坑5号棺 | 第15墓坑は大型の楕円形の墓坑で、長軸1.6m、短軸1.2m、深さ0.45mで、墓坑内から正位で整然と10個体の土器が収納されていた。 | 晩期末 | 頭骨片6点、その他10余点。側頭骨錐体岩様部、左上顎骨体（歯槽あり）、下顎左第3大臼歯が確認された。上腕骨滑車の一部、尺骨骨体の破片、右脛骨下端も認められた。脛骨には小さな内側顆関節面が認められる。 | 梅宮 茂他1986『霊山根古屋遺跡の研究』霊山町教育委員会 |
| 56 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 第15墓坑6号棺 | 第15墓坑は大型の楕円形の墓坑で、長軸1.6m、短軸1.2m、深さ0.45mで、墓坑内から正位で整然と10個体の土器が収納されていた。 | 晩期末 | 頭骨片1点、その他3点。 | 梅宮 茂他1986『霊山根古屋遺跡の研究』霊山町教育委員会 |
| 57 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 第16墓坑1号棺 | 第16墓坑は1号土坑墓の上に営まれたもので、ほぼ円形のプランを持ち、直径0.75m、深さ0.3mで5個体の土器が出土している。 | 晩期末 | 四肢骨片数点。 | 梅宮 茂他1986『霊山根古屋遺跡の研究』霊山町教育委員会 |
| 58 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 第16墓坑2号棺 | 第16墓坑は1号土坑墓の上に営まれたもので、ほぼ円形のプランを持ち、直径0.75m、深さ0.3mで5個体の土器が出土している。 | 晩期末 | 頭骨片6点、その他50点ほど。左頬骨、肋骨骨体の一部、左脛骨内果などが認められる。 | 梅宮 茂他1986『霊山根古屋遺跡の研究』霊山町教育委員会 |
| 59 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 第16墓坑3号棺 | 第16墓坑は1号土坑墓の上に営まれたもので、ほぼ円形のプランを持ち、直径0.75m、深さ0.3mで5個体の土器が出土している。3号浅鉢土器は4号土器を覆っている。 | 晩期末 | 頭骨片2点、その他20点ほど。 | 梅宮 茂他1986『霊山根古屋遺跡の研究』霊山町教育委員会 |
| 60 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 第16墓坑4号棺 | 第16墓坑は1号土坑墓の上に営まれたもので、ほぼ円形のプランを持ち、直径0.75m、深さ0.3mで5個体の土器が出土している。 | 晩期末 | 全身骨破片200余点。幼児、少年、成人。幼児骨片は下顎乳切歯、上下顎第1乳臼歯、未萌出の永久歯、5歳前後と考えられる。その他、頭蓋冠破片、左腓骨、坐骨、足の基節骨を確認。幼児骨は1個体に属する。少年は9cmの上腕骨骨体下半のみ。成人骨片10点。歯、椎骨、胸骨体、左大腿骨、右頭骨、右第3楔状骨、手足指骨数点。右第3楔状骨は2点あるため、2個体以上のもの。 | 梅宮 茂他1986『霊山根古屋遺跡の研究』霊山町教育委員会 |
| 61 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 第16墓坑5号棺 | 第16墓坑は1号土坑墓の上に営まれたもので、ほぼ円形のプランを持ち、直径0.75m、深さ0.3mで5個体の土器が出土している。 | 晩期末 | 頭骨片数点、その他20点ほど。胸骨柄、大腿骨、脛骨骨体の一部が認められた。 | 梅宮 茂他1986『霊山根古屋遺跡の研究』霊山町教育委員会 |
| 62 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 第16墓坑6号棺 | 第16墓坑は1号土坑墓の上に営まれたもので、ほぼ円形のプランを持ち、直径0.75m、深さ0.3mで5個体の土器が出土している。 | 晩期末 | 頭骨小片4点、その他20余点。踵骨、腓骨骨体の一部、手の中節骨。わずかだが炭化部分が見られる。 | 梅宮 茂他1986『霊山根古屋遺跡の研究』霊山町教育委員会 |
| 63 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 第19墓坑1号棺 | 第19墓坑は長楕円形を呈し、長軸1.60m、短軸1.2m、深さ0.5mで第15墓坑の形態に酷似する。なかから14個体の土器が出土しており、最多の土器が収納されていた。 | 晩期末 | 頭骨片数点、その他細片数十点。左手舟状骨。一部炭化している。 | 梅宮 茂他1986『霊山根古屋遺跡の研究』霊山町教育委員会 |
| 64 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 第19墓坑2号棺 | 第19墓坑は長楕円形を呈し、長軸1.60m、短軸1.2m、深さ0.5mで第15墓坑の形態に酷似する。なかから14個体の土器が出土しており、最多の土器が収納されていた。 | 晩期末 | 大腿骨骨体片2点。 | 梅宮 茂他1986『霊山根古屋遺跡の研究』霊山町教育委員会 |
| 65 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 第19墓坑3号棺 | 第19墓坑は長楕円形を呈し、長軸1.60m、短軸1.2m、深さ0.5mで第15墓坑の形態に酷似する。なかから14個体の土器が出土しており、最多の土器が収納されていた。 | 晩期末 | 頭骨片14点、その他30余点。右側頭骨一部、前頭骨右眼窩部、下顎骨左歯槽部（抜歯あり）、上腕骨、寛骨、大腿骨、脛骨、腓骨の一部も認められる。全身各部から検出されている。 | 梅宮 茂他1986『霊山根古屋遺跡の研究』霊山町教育委員会 |
| 66 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 第19墓坑4号棺 | 第19墓坑は長楕円形を呈し、長軸1.60m、短軸1.2m、深さ0.5mで第15墓坑の形態に酷似する。なかから14個体の土器が出土しており、最多の土器が収納されていた。 | 晩期末 | 100余点のうち、小児の骨片20点余点。左頬骨、右肩甲骨、尺骨、橈骨、坐骨、大腿骨、腓骨の破片。残りの骨は成人骨で側頭骨錐体、鎖骨、尺骨、橈骨、腓骨の破片。部分的に炭化している。シカの右前肢第4中手骨があり、焼けて収縮しているのにもかかわらず、現生ニホンジカの最大級のものに匹敵する。 | 梅宮 茂他1986『霊山根古屋遺跡の研究』霊山町教育委員会 |
| 67 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 第19墓坑5号棺 | 第19墓坑は長楕円形を呈し、長軸1.60m、短軸1.2m、深さ0.5mで第15墓坑の形態に酷似する。なかから14個体の土器が出土しており、最多の土器が収納されていた。 | 晩期末 | 数cm以下の骨片100余点。寛骨3点。2点は成人男性のもの、1点は女性か、少年のもの。左上顎骨に抜歯が見られる。全身骨から抽出されているようである。 | 梅宮 茂他1986『霊山根古屋遺跡の研究』霊山町教育委員会 |
| 68 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 第20墓坑1号棺 | 第20墓坑は楕円形で、長軸1.0m、短軸0.8m、深さ0.6mで、なかより4個体の土器が出土している。 | 晩期末 | 左尺骨骨体1点のみ。細いので女性であろう。 | 梅宮 茂他1986『霊山根古屋遺跡の研究』霊山町教育委員会 |
| 69 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 21-1号棺 | 第21墓坑は長楕円形を呈し、長軸1.15m、短軸0.8m、深さ0.5mで、なかには13個体の土器が収納されていた。欠損資料も多い。 | 晩期末 | 頭骨片20点前後、その他数十点。鎖骨、橈骨、尺骨、大腿骨、脛骨などの一部。左距骨が認められる。鎖骨、尺骨は細く、少年か、女性のもの。左距骨は外側距踵関節面がよく発達している。 | 梅宮 茂他1986『霊山根古屋遺跡の研究』霊山町教育委員会 |

## 第1表　縄文時代の出土焼人骨一覧（4）

| | 所在地 | 遺跡名 | 遺構名 | 遺構所見 | 時期 | 人骨所見 | 引用・参考文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 70 | 福島県伊達市 | 根古屋遺跡 | 土器棺外 | — | 晩期末～弥生 | 骨片の大きさは土器棺内よりやや大きい傾向。10cmを超えるものは稀。焼け方は土器棺内の骨片と同様。亀裂・変形が著しく、通常の形態学的分析は困難。骨の総重量は約42g。頸椎骨椎体、上腕骨、歯、椎骨、肩甲骨、有鈎骨、第1中手骨、膝蓋骨、距骨、第1中足骨など。 | 梅宮 茂他1986「霊山根古屋遺跡の研究」霊山町教育委員会 |
| 71 | 福島県西会津町 | 塩喰岩陰遺跡 | B1区2b層 | — | 晩期 | 骨は完全に灰化しており、高温で焼かれたものである。表面には細かな亀状の亀裂が多数認められるため、軟部がついたままで焼かれたものと推測される。上腕骨あるいは大腿骨骨頭が骨幹とは癒合していなかった。若い個体ではなさそうである。年齢不明の焼人骨がすくなくとも1体。 | 福島県文化センター遺跡調査課1994「福島県文化財調査報告書296：東北横断自動車道遺跡調査報告」福島県教育委員会 |
| 72 | 群馬県長野原町 | 石川原遺跡 | 18号配石墓 | 4号配石墓の底面石敷きの下で確認された配石墓。長径296cm、短径72cm、深さ33cmの長方形。壁石は扁石を縦位に立てて長方形に組んだ配石墓で、その上に小口積みの石を二段ほど重ね、底面の全面に石敷きを施している。北西隅の覆土中位から床面直上にかけて多量の焼骨破片が出土した。 | 後期中葉（加曽利B3式） | ほとんどのものが白色か灰白色を呈し、輪状による亀裂が見られたことから、焼熱した焼骨と思われる。人骨は破片化が著しく、部位の同定が困難なものが多いが、頭骨、体幹骨、四肢骨片が確認される。最小個体数は2個体で、男性・女性とも含まれている可能性が高い。すべて成人のもので、未成人の個体は確認されない。 | 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2023「公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書687：石川原遺跡」公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 |
| 73 | 群馬県長野原町 | 横壁中村遺跡 | 30区33号住居 | 敷石の分布や柱穴配置、遺物の時期から2時期の住居跡が重複していると判断。33a号と33b号とした。33b号が後出で、鉄平石による敷石を住居跡の南西部および北東部に検出し、北東部の柱穴に沿って鉄平石が直線状に配され、その付近から大量の焼骨が出土した。 | 後期前葉が主体 | ニホンジカやイノシシの多数の「焼獣骨」に混じって出土。側頭骨の岩様部及び指節骨片。重複部位はなく、1個体。比較的骨壁が薄く女性である可能性があるが、部位が少なく不明。指節骨片は成人で癒合していない状態であるため、約20歳～30歳代で女性1個体と推定。 | 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2009「群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書466：横壁中村遺跡」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 |
| 74 | 群馬県みなかみ町 | 深沢遺跡 | 20a号配石遺構 | 大型配石遺構。平面形は隅丸長方形をなし浸食のため東半が広がっている。規模は長軸3.85m、短軸3.22m、深さ43cmと配石遺構中最大規模を持つ。長軸方位はN-83-Eである。覆土上半には大小の礫が流入していた。微細な破片ではあるが焼骨が覆土に多量に含まれていた。 | 後期中葉 | 亀裂や歪みの生じているものが多く、灰白色の破片になっていて、焼骨としての特徴を備えている。1502片の骨片が出土している。指節骨、頭蓋骨、頭頂骨、縫合線の見られる頭蓋骨片、歯根、脛骨、末節骨、四肢骨などが検出。同定できる部位が少ないが、1個体分の人骨に由来する。成人、性別は不明。 | 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1988「群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書68：深沢遺跡・前田原遺跡」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 |
| 75 | 群馬県みなかみ町 | 深沢遺跡 | 21号配石遺構 | 石囲状配石は楕円形で、規模は長軸1.55m、短軸1.00m、深さ40cmである。配石は比較的小ぶりな河原石や山石を水平に敷き詰めている。遺物は土器破片196点、打製石斧1点、石鏃1点、ヒスイ製小玉2点、枯化木1点、剥片55点が出土した。また、覆土中には焼骨の破片が極少量流入していた。 | 後期中葉 | 亀裂や歪みの生じているものが多く、灰白色の破片になっていて、焼骨としての特徴を備えている。9片の破片。骨の長軸方向に沿って細かいすじがみられる。年齢、性別は不明。 | 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1988「群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書68：深沢遺跡・前田原遺跡」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 |
| 76 | 埼玉県川口市 | 石神貝塚 | 第3号住居跡（SJ3） | 平面形は炉を中心にした4m前後の隅丸方形。焼土・炭化粒子、獣骨片・骨粉などとともに遺物が万遍なく分布。P2・3で意図的な埋め方と思われるニホンジカの中足骨が出土。 | 後期中葉（加曽利B2式期） | 頭蓋冠の破片1点。外面に亀裂が入っていた。 | （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団1997「埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書182：石神貝塚」（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団 |
| 77 | 埼玉県川口市 | 石神貝塚 | SK29 | 不整楕円形の土坑。確認面からの深さは0.6m以上、底面は傾斜面を作りながら楕円形にしている。焼けたヒトの長骨と哺乳類の関節が出土。 | 後期中葉 | 長骨の破片1点。 | （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団1997「埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書182：石神貝塚」（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団 |
| 78 | 千葉県市川市 | 堀之内貝塚 | P116 | 円形土坑で、長径97cm、短径96cm、深さ98cmである。焼かれた人骨破片が土坑の下層に集積されている。人為的に埋め戻された堆積状況である。 | 中期末～後期前葉 | 被熱を受けてひび割れし、破片化した骨片が多い。部分的に黒灰色を呈するものもある。肋骨、椎骨、頭蓋、手骨、足骨の破片があり、成人と考えられる。四肢の主要な長管骨の破片がほとんどなく、1個体分の焼骨としては骨片の量はきわめて少ない。 | 市川市堀之内土地区画整理組合設立準備委員会1987「堀之内」市川市堀之内土地区画整理組合設立準備委員会 |
| 79 | 千葉県大網白里市 | 香取貝塚 | 第88号跡 | 平面形は楕円形で長軸1.05m、短軸0.7mで、深さは確認面より20cm。北西隅に一部張り出しが認められる。覆土1層に骨粉がみられ、張り出し部から歯が多く出土している。 | 晩期 | 小骨片が50数片残存。このうちの5～6片はひび割れや灰白色の部分を持つ。これらは恐らく焼骨と思われる。縄文時代の遺跡から焼骨が発見された例もないではないが、一般には稀であり、あるいは8世紀以降の人骨が含まれている可能性も捨てきれない。 | 千葉県文化財センター1987「千葉県教育振興財団調査報告127：香取貝塚」千葉県文化財センター |
| 80 | 東京都国分寺市 | 恋ヶ窪遺跡 | SK2832土坑 | 第27次調査で検出。長径1.15m、短径1.05mのほぼ円形の土坑。確認面から深さ50cm。断面形は鍋底状である。焼人骨・獣骨・土器片・炭化物が出土。焼人骨は土坑底面から上部約15cmの範囲にまとまって発見。遺構内部には焼け面・焼土は認められない。焼人骨のまとまりの中や、その他の覆土中から出土している土器片は勝坂II式期のものが大半。 | 中期中葉 | 人骨は強い焼成を受けて変形し、大小の破片に分かれている。白色を呈し、ひび割れを示す。重量は約750g。成人1個体分としてはやや少ない。頭骨の破片、椎骨片、肋骨片、右肩甲骨、右上腕骨、右尺骨骨幹片、左右の橈骨片、手根の月状骨、左右大腿骨、左右の脛骨骨幹片、腓骨片、中足骨片など、不完全ながら全身の各部位の骨片が認められる。年齢は熟年の範囲で、女性である可能性が高いように思われる。 | 国分寺市遺跡調査会1996「恋ヶ窪遺跡調査報告書」国分寺市遺跡調査会 |
| 81 | 神奈川県横浜市 | 小丸遺跡 | 40号土壙 | 円形土坑。 | 後期前葉～中葉 | 上腕骨体片の骨表面がやや灰白色に変色しており、焼骨である可能性がある。年齢不詳成人男性1個体分。病痕・外傷などは認められない。 | 横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター1999「港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告25：小丸遺跡」横浜市教育委員会 |
| 82 | 神奈川県横須賀市 | 茅山貝塚 | — | 不明。 | — | 人骨は焼き焦げのある頭蓋骨の破片と左下顎骨である。 | 西村正衛1951「横須賀市茅山貝塚」『日本考古学年報』1日本考古学協会、pp.54-56 |
| 83 | 神奈川県伊勢原市 | 上粕屋・秋山遺跡 | 6区中期竪穴住居跡 | — | 中期 | — | 小川岳人2021「令和3年度発掘調査成果発表会資料集」公益財団法人かながわ考古学財団 |
| 84 | 新潟県見附市 | 耳取遺跡 | 28T SK1304 | 円形土坑。 | 後期前葉 | いずれも白色～灰黒色を呈し、表面に微細なひび割れが生じるなど焼骨の特徴を示す。脳頭蓋片、四肢骨、部位不明破片。縫合部の状況から壮年よりも若い個体である。 | みつけ伝承館他2015「見附市埋蔵文化財調査報告30：耳取遺跡」みつけ伝承館他 |
| 85 | 新潟県見附市 | 耳取遺跡 | 32T | — | 中期中葉・後期後葉 | いずれも白色を呈する破片で、表面に微細なひび割れが生じるなど焼骨の特徴がある。ヒトの可能性がある脳頭蓋は縫合部がみられ、内板・外板とも閉じておらず、縫合が比較的明瞭である。壮年以下の可能性がある。 | みつけ伝承館他2015「見附市埋蔵文化財調査報告30：耳取遺跡」みつけ伝承館他 |
| 86 | 新潟県見附市 | 耳取遺跡 | 38T | — | 後期前葉～後葉 | いずれも白色を呈する破片で、表面に微細なひび割れが生じるなど焼骨の特徴がある。後頭骨破片、ヒトの可能性がある頭蓋を確認。脳頭蓋の縫合で内板が閉じている状態を観察し、熟年に達していた可能性がある。 | みつけ伝承館他2015「見附市埋蔵文化財調査報告30：耳取遺跡」みつけ伝承館他 |
| 87 | 新潟県見附市 | 耳取遺跡 | 51T | — | 晩期 | いずれも白色を呈する破片で、表面に微細なひび割れが生じるなど焼骨の特徴がある。ヒトの可能性がある肩甲骨の破片。年齢や性別は不明。 | みつけ伝承館他2015「見附市埋蔵文化財調査報告30：耳取遺跡」みつけ伝承館他 |
| 88 | 新潟県見附市 | 耳取遺跡 | 61T | — | 後期前葉主体、後期前葉～後葉 | いずれも白色を呈する破片で、表面に微細なひび割れが生じるなど焼骨の特徴がある。ヒトの後頭骨・側頭骨錐体部、上顎骨・下顎骨・足根骨、ヒトの可能性がある脳頭蓋・頭蓋の破片、大腿骨や脛骨の可能性がある骨を確認。 | みつけ伝承館他2015「見附市埋蔵文化財調査報告30：耳取遺跡」みつけ伝承館他 |
| 89 | 新潟県村上市 | 元屋敷遺跡 | 7319土坑 | — | — | 頭蓋冠破片、四肢骨片が数点遺存。 | 朝日村教育委員会2002「朝日村文化財報告書22：元屋敷遺跡II（上段）」朝日村教育委員会 |
| 90 | 新潟県村上市 | 元屋敷遺跡 | 7250配石墓 | 長径118cm、短径68cm、深さ53cmの長楕円形。焼骨片は378.6g。覆土全体し、土器片。検出層位a層。 | 後期後葉～晩期前葉 | 頭蓋冠破片数点、下顎骨前歯部破片1、手または足の基節骨1が遺存する。ほか、部位不明の四肢長骨片若干。下顎骨の歯は脱落しているが、歯槽の形態から歯出は完了と判断。右側犬歯部あるいは側切歯部に歯槽の閉鎖が認められる。 | 朝日村教育委員会2002「朝日村文化財報告書22：元屋敷遺跡II（上段）」朝日村教育委員会 |
| 91 | 新潟県村上市 | 元屋敷遺跡 | 8048配石墓 | 長径100cm、短径50cm、深さ56cmの長楕円形。焼骨片は57.8g。大半が人骨と鑑定されたが、人以外の可能性が高い哺乳類の動物骨も数g存在する。8102配石墓を切る。検出層位a層。 | 後期後葉～晩期前葉 | 頭蓋冠破片数点、下顎底面歯部（歯槽部欠損）、臼歯1、手または足の骨数点、部位不明四肢長骨片。 | 朝日村教育委員会2002「朝日村文化財報告書22：元屋敷遺跡II（上段）」朝日村教育委員会 |
| 92 | 新潟県村上市 | 元屋敷遺跡 | 8096土坑墓 | 残存径約40cm、深さ約40cm。人骨以外の出土遺物がない。トレンチによる削平のため、南半を欠く。覆土は6層に細分できるが、人骨検出は上面の1層のみ。検出層位a層。 | 後期後葉以降 | 頭蓋冠破片数点、後頭骨左外側部（舌下神経管）、椎骨破片1、左右不明腸骨骨幹部1、指骨1。舌下神経管二分はない。 | 朝日村教育委員会2002「朝日村文化財報告書22：元屋敷遺跡II（上段）」朝日村教育委員会 |
| 93 | 新潟県村上市 | 元屋敷遺跡 | 8107土坑墓 | 8140・8143土坑墓と同一グリッド、対象を切る。楕円形を呈し、長径65cm、短径75cm、深さ30cm。人骨以外の出土遺物がない。焼人骨の出土量が最も多く、最低でも7体分が出土。土坑の規模から焼骨は焼成後、再葬された。覆土は7層に細分できるが、人骨は1～3・5・6層から検出し、2層で多量の人骨を検出。2層が骨の含有率が最も高い。検出層位a層。 | 後期後葉以降 | 左側頭骨乳様突起が7点のため、少なくとも7体以上の人骨群。頭蓋は、前頭骨、頬骨、蝶形骨、後頭骨、上顎骨、下顎骨の破片。歯槽形態からみて全て永久歯。下顎骨破片2点で右側犬歯部および小片のため歯種が同定できない前歯部に、歯槽の閉鎖がみられる。四肢は、肩甲骨、鎖骨、上腕骨、橈骨、尺骨、寛骨、大腿骨、脛骨、腓骨、中手骨、足根骨、中足骨、指骨などの破片。体幹は、環椎2、軸椎歯突起5、胸椎、腰椎、仙骨、肋骨などの破片。歯槽の形態からみて歯根は完成していたと判断。正中口蓋縫合上顎骨部の閉塞は完了していない。四肢骨の骨端部はいずれも癒合している。左恥骨結合面の一部の結合面の隆起は顕著ではない。椎体の骨棘などの加齢性の形成異常は観察されない。青年から熟年にかけての成人骨が主体を占めているものと判断。筋付着部が発達した下顎角は男性的、骨盤部の柱状性の弱い大腿骨破片は女性的であるが断定はできない。 | 朝日村教育委員会2002「朝日村文化財報告書22：元屋敷遺跡II（上段）」朝日村教育委員会 |

## 第１表　縄文時代の出土焼人骨一覧（５）

| | 所在地 | 遺跡名 | 遺構名 | 遺構所見 | 時期 | 人骨所見 | 引用・参考文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 94 | 新潟県村上市 | 元屋敷遺跡 | 8140土坑墓 | 8207・8143土坑墓とは同一グリッド、8143と接する。残存長は径約1mで、楕円形を呈する。人骨以外の出土遺物がない。切り合い関係から8207土坑墓より先行する。焼人骨の出土量が少ないことから、土坑墓8207からの混入の可能性も否定しえない。 | 後期後葉以降 | 上位胸椎椎弓破片1点。 | 朝日村教育委員会2002『朝日村文化財報告書22：元屋敷遺跡Ⅱ（上段）』朝日村教育委員会 |
| 95 | 新潟県村上市 | 元屋敷遺跡 | 8143土坑墓 | 8207・8140土坑墓とは同一グリッド、8140と接する。残存長は径約60cmで、楕円形を呈する。人骨以外の出土遺物がない。8140土坑墓とともに単複。人骨の出土量は少ないが、定量認められる。 | 後期後葉以降 | 頭蓋冠破片数点、左右不明腓骨骨幹部1。 | 朝日村教育委員会2002『朝日村文化財報告書22：元屋敷遺跡Ⅱ（上段）』朝日村教育委員会 |
| 96 | 新潟県村上市 | 元屋敷遺跡 | 23C配石 | — | — | 頭蓋冠破片数点、椎骨1、左右不明腓骨骨幹部1、右有頭骨1、指骨1。 | 朝日村教育委員会2002『朝日村文化財報告書22：元屋敷遺跡Ⅱ（上段）』朝日村教育委員会 |
| 97 | 新潟県村上市 | 元屋敷遺跡 | 遺物包含層 | — | — | 左側頭骨1、上顎骨歯槽突起前歯部1、下顎骨破片5、頭蓋冠破片多数、肩甲骨肩峰1、右上腕骨遠位部1、右尺骨滑車切痕1、肋骨片1、右膝蓋骨1、腓骨骨幹部片1、手足の骨数点、椎骨片数点。 | 朝日村教育委員会2002『朝日村文化財報告書22：元屋敷遺跡Ⅱ（上段）』朝日村教育委員会 |
| 98 | 新潟県村上市 | 長割遺跡 | 遺物包含層 | 調査区のほぼ中央部に当たる8E23グリッドのⅡb層出土。 | 後期前葉 | 頭蓋骨2点。頭蓋骨の厚さや縫合状態から、どちらも成人の骨片と考えられる。 | 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団2011『新潟県埋蔵文化財調査報告書224：長割遺跡』新潟県教育委員会 |
| 99 | 新潟県村上市 | 長割遺跡 | P6804（SI7626） | 調査区南端の6D7グリッドのP6804出土 | 後期前葉（南三十稲場式） | ヒトの可能性がある四肢骨の骨幹部破片0.03gが出土している。骨端部が出土していないため、ヒトと断定することはできないが、ヒトの骨表面に特徴的な多孔質が観察されたため、「ヒト？」として記載した。 | 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団2011『新潟県埋蔵文化財調査報告書224：長割遺跡』新潟県教育委員会 |
| 100 | 新潟県糸魚川市 | 寺地遺跡 | 人焼骨ピット | 炉状配石内の北端に82×43cm、深さ25cmのピットがあり、炭・木炭片と多量の人焼骨と焼けた獣骨片が充填して検出された。ピット上部から長さ3.9cmの有茎石鏃が出土し、ピット底面から晩期土器を含む4点の土器が出土。 | 晩期中葉に属する配石遺構中 | 大骨片は頭蓋骨、体幹骨、上肢骨、下肢骨。左側頭骨の外耳道上壁および左頬骨の前頭突起がともに10個体分あり、少なくとも10個体以上。少なくとも1個体は未成人人骨で、最少の個体数は計11個体と推定。老人性変化を示す所見はない。右坐骨切痕の1骨片は切痕部が広く女性骨と判定。11個体のうち1体は女性成人骨。乳児が1～2個体存在。 | 寺村光晴・青木重孝・関　雅之1987『史跡・寺地遺跡』青海町教育委員会 |
| 101 | 新潟県阿賀野市 | 土橋遺跡 | D101 | 平面形は円形、断面形は不整形である。規模は長軸150cm、短軸127cm、深さ71cm。底面が変形しており、地震の影響を受けている。覆土は単層。上位は焼骨片・炭化物粒を多量、小礫(径約2.5cm)を含む。 | 後期前葉（南三十稲場式） | 細片化が著しい。大きなもので5cm、大半は1cmに満たない。骨片は全て灰色から白色。右上顎骨、右前頭骨、前頭骨、右側頭骨、右頭頂骨、右側頭骨、後頭骨、大腿骨、左脛骨で、いずれも破片。頭骨片には未成人、成人が確認される。年齢段階も異なる。 | 阿賀野市教育委員会2023『阿賀野市埋蔵文化財発掘調査報告書第19集：土橋遺跡』阿賀野市教育委員会 |
| 102 | 新潟県阿賀野市 | 土橋遺跡 | D102 | 平面形は不整形、断面形は階段状である。規模は長軸440cm、短軸186cm、深さ27cm。ピットD135と重複。覆土は3層で、1層の覆土の洗浄による焼人骨を検出。土器片を多量に含む。2層には焼土ブロック・炭化物を多量に含み、大小の礫がまとまって出土。 | 後期前葉（南三十稲場式） | 細片化が著しい。大きなもので5cm、大半は1cmに満たない。骨片は全て白色。輪状に走る亀裂が観察できる四肢骨片が存在。右大腿骨骨幹部片が同定できた部位。 | 阿賀野市教育委員会2023『阿賀野市埋蔵文化財発掘調査報告書第19集：土橋遺跡』阿賀野市教育委員会 |
| 103 | 新潟県阿賀野市 | 土橋遺跡 | C316 | 平面形は楕円形、断面形は階段状で、規模は140cm、短軸136cm、深さ21cm。底面からは焼人骨がまとまって出土。ピットC342と重複。覆土は単層。焼土などの被熱痕跡は認められない。焼人骨は土坑底面付近に幅27cm、横31cm、深さ15cmの範囲にまとまって出土した。 | 後期前葉（南三十稲場式） | 骨は頭骨・体幹骨・上肢・下肢骨の全身。部位の重複は確認されていない。上腕骨・腓骨などは変形せず、肋骨が著しく変形。一部の骨に輪状に走る亀裂。下顎左右の第3大臼歯が萌出完了していることから成人段階。右腸骨の近位骨端部が癒合し、20才以上。比較的若い25才から壮年期後半程度。外後頭隆起は比較的発達、乳様突起などは華奢ではなく、男性を想起させ、総合的な判断として男性と思われる。上顎の右側は切歯・犬歯部の歯槽が吸収されている。歯冠の磨耗、抜歯習俗と思われる。 | 阿賀野市教育委員会2023『阿賀野市埋蔵文化財発掘調査報告書第19集：土橋遺跡』阿賀野市教育委員会 |
| 104 | 新潟県阿賀野市 | 土橋遺跡 | C区71G19グリッド（Ⅲb②層） | — | 後期 | 頭蓋骨片1点。白色主体で表面は青白色。長辺側に鋸状縫合があり、頭蓋骨の一部と思われる。 | 阿賀野市教育委員会2023『阿賀野市埋蔵文化財発掘調査報告書第19集：土橋遺跡』阿賀野市教育委員会 |
| 105 | 新潟県阿賀野市 | ツベタ遺跡 | — | 1993年確認調査で検出。平面形状が楕円形、断面形状が袋状の土坑覆土(暗褐色砂質土)に大量の焼人骨が含まれていた。後期遺物包含層で検出。3,600±155y BP～3,360±250y BP。 | 後期 | 小片が多く完形を留めている骨はなく、亀裂や変形が認められ、700～800℃以上の温度で焼かれていた成人骨である。部位の偏たりは認められず、最小個体数は3個体で、加工痕、抜歯痕は認められない。 | 阿賀野市教育委員会2023『阿賀野市埋蔵文化財発掘調査報告書第19集：土橋遺跡』阿賀野市教育委員会 |
| 106 | 新潟県佐渡市 | 浜田遺跡 | グリッド | 44-AF、44-A1のグリッドから出土。いずれも一括出土ではない。 | 後期前葉か。 | 手の基節骨、右踵骨、第1中節骨、大腿骨の骨部の一部。いずれも焼骨で、破片で変形している。性別、年齢及び個体数は不明。 | 本間 嘉晴他1975『浜田遺跡』真野町教育委員会 |
| 107 | 富山県富山市 | 布尻遺跡 | SK1348及び周辺 | 長さ0.97m、幅0.87m、深さ0.17mの楕円形の土坑で、土器、打製石斧が出土している。骨片が多く混じっている。年代測定では後期末葉から晩期中葉頃とされている。 | 後期後葉以降 | 土坑の覆土及び遺構上部の周辺の包含層で発見され、土坑の壁面や床面に焼成土はなかった。総重量は1,632gで想定可能資料は208点(634g)。同定部位はほぼ全身であるが、体幹部(脊椎・肋骨・骨盤)や手足の骨(手根骨、中手骨、足根骨、中足骨)の数が比較的少ない傾向がある。下顎骨のオトガイ部が4個体分、左頭蓋冠状縫合部が4個体分、後頭骨の外後頭隆起部が4個体分、右大腿骨骨幹近位部が4個体分であり、骨質の厚さや筋付着痕から成人個体由来と考えて矛盾がない。乳幼児の左鎖骨がある。最小個体数は5個体で、成人男性1個体、成人女性1個体、乳幼児1個体が含まれる。頭蓋骨の表面に齧歯目の噛み跡と判断される線条痕が混在する。一時的に地面から露呈していた状態であった骨も含まれると推定される。 | 公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査課2019『布尻遺跡発掘調査報告』富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告76公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査課 |
| 108 | 富山県魚津市 | 早月上野遺跡 | 632号土坑 | 広場2の西側縁辺にあたる。長径1.4m、短径1m、深さ0.60mがあり、重複する土坑のため、形状は不明である。広場2西側縁辺で検出した配石墓列と約1.2mの間隔で平行に並ぶ土坑列の延長にある。 | 後期後葉 | 人の頭骨3片の他に、人の可能性のある骨片3、不明骨片2片がある。 | 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所2012『富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告51：早月上野遺跡発掘調査報告』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 |
| 109 | 富山県南砺市 | 井口遺跡 | P207 | 大形の河原石が2個置かれており、墓壙的な性格をもつ。 | 後・晩期 | P200出土で、人骨の可能性がある。 | 富山県埋蔵文化財センター1980『富山県井口村井口遺跡発掘調査概要』井口村教育委員会 |
| 110 | 富山県朝日町 | 境A遺跡 | 第22号住居跡 | 推定約7×6.5mの規模で、平面形は隅丸方形もしくは長円形。炉は大型の長方形石囲炉。土器と石器が出土し、土製品では後期～晩期の円盤状土製品が出土している。サメ、魚、炭化物が出土。 | 中期中葉～後葉 | ヒト頭 | 富山県埋蔵文化財センター・富山県埋蔵文化財センター1989・1992『北陸自動車道遺跡調査報告』朝日町編4『北陸自動車道遺跡調査報告』朝日町編7富山県教育委員会 |
| 111 | 富山県朝日町 | 境A遺跡 | P3656 | 平面形は不整長円、規模は不明。石器2点が出土している。 | 後期後葉 | ヒト | 富山県埋蔵文化財センター1989『北陸自動車道遺跡調査報告』朝日町編4 富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター1992『北陸自動車道遺跡調査報告』朝日町編7富山県教育委員会 |
| 112 | 富山県朝日町 | 境A遺跡 | 出土区G02−46 | 包含層 | — | ヒト | 富山県埋蔵文化財センター1989『北陸自動車道遺跡調査報告』朝日町編4 富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター1992『北陸自動車道遺跡調査報告』朝日町編7富山県教育委員会 |
| 113 | 富山県朝日町 | 境A遺跡 | 出土区G03−63 | 包含層 | — | ヒト頭(その他：ニホンカモシカ、ツキノワグマ、イルカ) | 富山県埋蔵文化財センター1989『北陸自動車道遺跡調査報告』朝日町編4 富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター1992『北陸自動車道遺跡調査報告』朝日町編7富山県教育委員会 |
| 114 | 富山県朝日町 | 境A遺跡 | 出土区G04−63 | 包含層 | — | ヒト(その他：ニホンカモシカ) | 富山県埋蔵文化財センター1989『北陸自動車道遺跡調査報告』朝日町編4 富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター1992『北陸自動車道遺跡調査報告』朝日町編7富山県教育委員会 |

# 第1表　縄文時代の出土焼人骨一覧（6）

| | 所在地 | 遺跡名 | 遺構名 | 遺構所見 | 時期 | 人骨所見 | 引用・参考文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 115 | 富山県朝日町 | 境A遺跡 | 出土1684-65 | 包含層 | — | ヒト頭蓋片(その他：ニホンカモシカ) | 富山県埋蔵文化財センター1989『北陸自動車道遺跡調査報告』朝日町編4 富山県教育委員会,富山県埋蔵文化財センター1992『北陸自動車道遺跡調査報告』朝日町編7 富山県教育委員会 |
| 116 | 富山県朝日町 | 境A遺跡 | 出土1684-66 | 包含層 | — | ヒト頭骨 | 富山県埋蔵文化財センター1989『北陸自動車道遺跡調査報告』朝日町編4 富山県教育委員会,富山県埋蔵文化財センター1992『北陸自動車道遺跡調査報告』朝日町編7 富山県教育委員会 |
| 117 | 富山県朝日町 | 境A遺跡 | 出土1685-68 | 包含層 | — | ヒト(その他：ニホンカモシカ) | 富山県埋蔵文化財センター1989『北陸自動車道遺跡調査報告』朝日町編4 富山県教育委員会,富山県埋蔵文化財センター1992『北陸自動車道遺跡調査報告』朝日町編7 富山県教育委員会 |
| 118 | 富山県朝日町 | 境A遺跡 | 出土1687-65 | 包含層 | — | ヒト歯 | 富山県埋蔵文化財センター1989『北陸自動車道遺跡調査報告』朝日町編4 富山県教育委員会,富山県埋蔵文化財センター1992『北陸自動車道遺跡調査報告』朝日町編7 富山県教育委員会 |
| 119 | 富山県朝日町 | 境A遺跡 | 出土1688-56 | 包含層 | — | ヒト | 富山県埋蔵文化財センター1989『北陸自動車道遺跡調査報告』朝日町編4 富山県教育委員会,富山県埋蔵文化財センター1992『北陸自動車道遺跡調査報告』朝日町編7 富山県教育委員会 |
| 120 | 富山県朝日町 | 境A遺跡 | 出土1689-56 | 包含層 | — | ヒト頭骨・歯(その他：ツキノワグマ) | 富山県埋蔵文化財センター1989『北陸自動車道遺跡調査報告』朝日町編4 富山県教育委員会,富山県埋蔵文化財センター1992『北陸自動車道遺跡調査報告』朝日町編7 富山県教育委員会 |
| 121 | 富山県朝日町 | 境A遺跡 | 出土1692-47 | 包含層 | — | ヒト歯 | 富山県埋蔵文化財センター1989『北陸自動車道遺跡調査報告』朝日町編4 富山県教育委員会,富山県埋蔵文化財センター1992『北陸自動車道遺跡調査報告』朝日町編7 富山県教育委員会 |
| 122 | 石川県野々市市 | 御経塚遺跡 | 4号配石遺構 | 3区の長方形状の配石遺構で約5.6×4.5mの範囲全体を遺構とした。集積が密になるまとまりの①～④がみられ、③は楕円状の配石で大きさが100×60cmである。この配石の西～南側で一定量の焼けた人骨を検出し、頭蓋骨、橈頭骨、上腕骨、四肢骨があった。下部の土坑・ピットの関連は認められなかった。 | 後期中葉から晩期末 | 種別は頭蓋骨、橈頭骨、上腕骨、大腿骨、四肢であった。 | 野々市町教育委員会2003『御経塚遺跡Ⅲ』 |
| 123 | 福井県永平寺町 | 成仏木原町遺跡 | — | — | 晩期後葉 | 遺構・遺物に伴って骨片が広い範囲から検出。大・小骨片はすべてほぼ全身骨格の部分骨で、これらの骨片はすべて焼骨である。骨の色調は概ね白色または灰白色を呈し、骨質は硬く、その破損は鋭利である。 | 永平寺町教育委員会2004『永平寺町埋蔵文化財調査報告書4：金合丸・成仏・木原町遺跡』永平寺町教育委員会 |
| 124 | 山梨県韮崎市 | 山影遺跡 | 1号土坑 | 長楕円形(1.4×2.1m程度)、深さ20cm前後。骨は土坑内の黒褐色土中に川原石と混入し散在。土器片・黒曜石片が2点ずつ出土。 | 中期初頭(五領ヶ台式) | 四肢骨や頭蓋骨には亀裂が多い。骨の状態から推測して比較的高温(800度前後)であると考えられる。左側頭骨の錐体が7つ出土。少なくとも7個体。5～6歳の幼児骨1体を含む。病的な変化としてクリブラ・オルビタリアが観察される。 | 韮崎市遺跡調査会他1997『山影遺跡』韮崎市遺跡調査会他 |
| 125 | 山梨県北杜市 | 金生遺跡 | 第1号配石第2ブロック | 石棺状組石で内側の規模では180×100cm程の長方形の空間。焼人骨は南西壁ぎわの南壁に偏った部分にまとまって出土した。ほかに土製耳飾2点出土。 | 晩期前葉 | 1号配石の石棺状組石中より一括出土。量が限られたもので一部があるにすぎない。この場所で焼かれたわけではない。頭骨は前頭骨、左右の頭頂骨。各骨は強い火を受けてひび割れ、亀裂が入り、たわむ。四肢骨は橈骨左右。亀裂、破損は著しい。歯骨片、中骨、大腿骨片は前面部分のみで多少変形するが、幼骨程ではない。 | 山梨県埋蔵文化財センター1989『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書41：金生遺跡』山梨県教育委員会 |
| 126 | 山梨県北杜市 | 川又遺跡 | 再葬墓 | A区南部の発掘ながら円形の石列遺構が検出され、東側の石組の間から再葬墓が発見された。条痕文を有する深鉢の下半部を利用したもので、深鉢内外から多量の成人男性の火葬骨片が出土し、土器内部からは骨以外に石鏃1個と、土器より蓋にしたのであろうか大きな土器片が発見された。 | 晩期 | — | 須玉町史編さん委員会編1998『須玉町史　史料編』第1巻(考古・古代・中世) 須玉町，pp.72-76 |
| 127 | 山梨県北杜市 | 長坂上条遺跡 | — | 人骨(頭蓋骨片2、脛骨片1のほかに細片5)の外にわずかに遺灰と、たくさんの石鏃があった。その人骨はいずれも焼熱し、焼いて青白色を呈している。当時、すでに火葬があったものか、あるいは何らかの機会に偶然に焼けたものか、はっきりわからないが、将来研究を要するものと思われる。 | 後期後半から晩期 | — | 大山柏・竹下次作・井出佐重1941「山梨県日野春村長坂上条発掘調査報告」『史前学雑誌』第13巻第3号史前学会 |
| 128 | 長野県上田市 | 深町遺跡 | SKP14 | 埋甕に伴う。 | 後・晩期 | 白色の骨粉状となって崩壊が進み、形を成さない。焼骨の可能性があるが明確でない。 | 依田地区埋蔵文化財発掘調査団1980『深町』丸子町教育委員会 |
| 129 | 長野県岡谷市 | 梨久保遺跡 | 273P | 平面形は円形、断面形はタライ状を呈する。口径100×96cm、底径90×85cm、深さ15cm。小石と焼土の混じった土とともに多量の人骨が出土。一体分の人骨がひとまとまりに詰まっているような状況であった。 | 中期中葉～後葉 | もっとも多量の骨が残るもので原形を保つ部位も多い。全体的にみて1個体の人骨と認められるものであるが、各部の骨はまったく四散状態でピット内に集積された傾向をうかがわせる。下顎骨は右下隅に位置するが、同じ箇所に手・足の指骨が密集し、中央辺に前腕部や指骨など、左方に前腕部、その直下に下顎骨の一部などが混在。長骨はピット全域に散在している。各骨は上下間にも密着したブロック状となっている。後頭骨の大型破片、頭蓋骨の縫合部分、側頭骨岩様部、頭蓋底の一部、上顎骨の歯槽部、歯槽部が正中口蓋縫合から離れて残る。下顎骨の骨体は亀裂が生じ変形が著しいが、やや原形が保たれ、歯槽も右側で大歯、小臼歯などはエナメル質を消失しながら植立して残る。脊椎骨は椎体、椎弓が破壊する。肋骨数片、四肢骨はすべて破片状。鎖骨、骨盤部分、上腕骨、脛骨などはわずかに存在。距骨(右)、手足の指骨。1個体の人骨と推定される。 | 梨久保遺跡調査団1986『郷土の文化財15：梨久保遺跡』岡谷市教育委員会 |
| 130 | 長野県岡谷市 | 梨久保遺跡 | 289P | 平面形は楕円形、断面形はタライ状を呈する。口径114×(90)cm、底径96×(90)cm、深さ21cm。上面に人頭大以上の大きな石4個が覆い、その下に焼土と小礫がつまり、底部付近に焼人骨がひとかたまりに出土。打製石斧片1、磨製石斧2、石皿片2、石棒片1点。 | 中期中葉 | 破片は多量。骨の隙間に炭の混入。土器片、黒曜石片が混入している。前頭骨の前頭稜部分、縫合線を残す脳頭蓋部分もある。脊椎骨の棘突起、肋骨片、肩甲骨の肩峰、腕骨骨体部分、膝蓋骨の一部、指骨関節部などが識別できる。大腿骨、脛骨などの長大な骨の骨体部分も含まれている。 | 梨久保遺跡調査団1986『郷土の文化財15：梨久保遺跡』岡谷市教育委員会 |
| 131 | 長野県岡谷市 | 梨久保遺跡 | 304P | 平面形は楕円形、断面形はタライ状を呈する。口径114×(90)cm、底径98×(70)cm、深さ37cm。焼土と炭化材が多量にあり、その下に焼けた人骨がひとかたまりになって出土。 | 中期中葉 | 焼土・炭化材の下部に人骨が残存。すべて細小片で、形状を残すものは少ない。脳頭蓋部分は小片であるが数が多い。骨盤腸骨の一部や下顎枝(左)の破片、寛骨の臼、肋骨の一部、肩甲骨関節窩、大腿骨骨体部分、腓骨骨体、指骨が認められる。歯冠の先端部分が2片(臼歯)が認められる。 | 梨久保遺跡調査団1986『郷土の文化財15：梨久保遺跡』岡谷市教育委員会 |
| 132 | 長野県岡谷市 | 梨久保遺跡 | 354P | 平面形は楕円形、断面形はタライ状を呈する。口径110×(90)cm、底径90×(80)cm、深さ34cm。上面に扁平石が据えられたようにあり、その他に焼土と炭化材と、焼けた人骨が多量に詰まっていたが、底面に密着するような出土状態であった。 | 中期後葉 | もっとも多量の残存骨であるが損壊は著しい。脳頭蓋部分が小片ながら数多く残る。鋸歯状の縫合が直線状に分離する部分が認められる。上顎骨の正中口蓋縫合から離開した左側部分と歯、下顎骨の骨体全部と歯。右尺骨、左腕骨の各体骨上部がいずれも収縮、湾曲をへながらも原型を保ち、かなりきゃしゃで繊細な形状を示す。膝蓋骨、上腕骨、大腿骨、脛骨等の骨体の破片や関節部分。手骨の末節骨、中足骨の体部も残る。大型の長骨骨体などが大きな破片として残存していないのが特徴。全身部分にわたる骨の存在から1個体のものとみなされる。 | 梨久保遺跡調査団1986『郷土の文化財15：梨久保遺跡』岡谷市教育委員会 |
| 133 | 長野県岡谷市 | 梨久保遺跡 | 722P | 平面形は円形、断面形はタライ状を呈する。口径80×85cm、底径65×70cm、深さ26cm。石の下から形をとどめた焼骨が出土。炭化材の痕跡がほとんど認められなかったが、焼土は北隅半分に集中していた。滑石製管玉1点、石鏃1点、上面に中期土器片と小石多量に検出。 | 中期中葉 | 密着した各骨の隙間に炭の混入する部分がみられる。上腕骨骨体の太さの円筒状の破片、前腕骨の縦断された破片のなかに尺骨の半月状切痕の部位が認められる。 | 梨久保遺跡調査団1986『郷土の文化財15：梨久保遺跡』岡谷市教育委員会 |

## 第１表　縄文時代の出土焼人骨一覧（７）

| | 所在地 | 遺跡名 | 遺構名 | 遺構所見 | 時期 | 人骨所見 | 引用・参考文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 134 | 長野県須坂市 | 繁入保遺跡 | 342P | 平面形は楕円形、断面形は鍋状を呈する。口径90×79cm、底径74×60cm、深さ35cm。やや多量の焼けた人骨出土。上面より出は土器片。 | 後期 | 脳頭蓋を形成する板状骨(頭頂骨？)が数片、長骨の破片、それらの関節部分や指骨。 | 繁入保遺跡調査団1966『郷土の文化財15：繁入保遺跡』須坂市教育委員会 |
| 135 | 長野県飯田市 | 中村中平遺跡 | 土坑墓2 | 平面形は不整楕円形を呈すると思われる。規模0.85×0.6m、深さ30cmを測る。覆土から焼骨92g、炭が微量出土した。無文の粗製深鉢小片、土製耳飾(臼形耳飾)がある。 | 後・晩期 | ヒトの頭蓋骨片、中手骨近位片、椎骨片など | 飯田市教育委員会2011『中村中平遺跡　遺物編』飯田市教育委員会 |
| 136 | 長野県飯田市 | 中村中平遺跡 | 土坑墓2・12 | — | 後・晩期 | ヒトの頭蓋骨片数点(左側頭骨錐体部を含む) | 飯田市教育委員会2011『中村中平遺跡　遺物編』飯田市教育委員会 |
| 137 | 長野県飯田市 | 中村中平遺跡 | 土坑墓3 | 平面形は不整楕円形を呈し、内面が一段深くなる。規模0.95×0.7m、深さ32cmを測る。覆土から焼骨169g出土。土器片出土。 | 後期後半 | ヒトの頭蓋骨片(左頭頂骨乳突起部ほか)、椎骨片、右肩甲骨(関節窩)、右の橈骨近位部、肋骨片など | 飯田市教育委員会2011『中村中平遺跡　遺物編』飯田市教育委員会 |
| 138 | 長野県飯田市 | 中村中平遺跡 | 土坑墓6 | 方形柱列址1を切り、土坑墓9・10と重複。平面形は不整楕円形を呈すると思われる。規模は(1.3)×1.25m、深さ25cmを測る。焼骨35g出土。脚付きの台付鉢台部がある。 | 後期後半 | ヒトの頭蓋骨数点 | 飯田市教育委員会1994『中村中平遺跡』飯田市教育委員会、飯田市教育委員会2011『中村中平遺跡　遺物編』飯田市教育委員会 |
| 139 | 長野県飯田市 | 中村中平遺跡 | 土坑墓7 | 平面形は不整円形を呈する。規模は0.5×0.45mと小さく、深さ20cmを測る。覆土から焼骨17g出土。出土遺物なし。 | 詳細時期不明 | ヒトの小さな頭蓋骨片、指骨片(？)などが少量 | 飯田市教育委員会1994『中村中平遺跡』飯田市教育委員会、飯田市教育委員会2011『中村中平遺跡　遺物編』飯田市教育委員会 |
| 140 | 長野県飯田市 | 中村中平遺跡 | 土坑墓8 | 平面形は不整円形を呈する。規模0.5×0.4m、深さ25cmを測る。覆土から焼骨9g、炭1g出土。粗製無文の深鉢出土。 | 後・晩期 | ヒトの頭蓋骨片3点、右側頭骨後頭乳突孔部など | 飯田市教育委員会1994『中村中平遺跡』飯田市教育委員会、飯田市教育委員会2011『中村中平遺跡　遺物編』飯田市教育委員会 |
| 141 | 長野県飯田市 | 中村中平遺跡 | 土坑墓9 | 土坑墓6と重複する。不整楕円形を呈し、規模は0.95×0.7m、深さ45cmを測る。覆土から焼骨77g出土。浅鉢、羽状沈線文深鉢、粗製無文深鉢。 | 後期後半 | ヒトの頭蓋骨片が数点、加齢変化のリッピングのある椎体(腰椎か)、粗線の発達した大腿骨骨幹。 | 飯田市教育委員会1994『中村中平遺跡』飯田市教育委員会、飯田市教育委員会2011『中村中平遺跡　遺物編』飯田市教育委員会 |
| 142 | 長野県飯田市 | 中村中平遺跡 | 土坑墓12 | 方形柱列址1、土坑墓11と重複する。不整楕円形を呈し、規模は(1.15)×1.0m、深さ43cmを測る。覆土から38gの焼骨と微量の炭が出土。浅鉢、深鉢出土。 | 後期後半 | ヒトの頭蓋骨片少数、椎骨片。 | 飯田市教育委員会1994『中村中平遺跡』飯田市教育委員会、飯田市教育委員会2011『中村中平遺跡　遺物編』飯田市教育委員会 |
| 143 | 長野県飯田市 | 中村中平遺跡 | 土坑墓13 | 平面形は不整円形を呈し、規模は0.95×0.9m、深さ15cmを測る。覆土から焼骨12g出土。鉢が出土。 | 後期後半 | ヒトの四肢骨片 | 飯田市教育委員会1994『中村中平遺跡』飯田市教育委員会、飯田市教育委員会2011『中村中平遺跡　遺物編』飯田市教育委員会 |
| 144 | 長野県飯田市 | 中村中平遺跡 | 土坑墓14 | 平面形は不整形を呈する。規模は1.2×0.9m、深さ20cmを測る。底面は平坦ではなく、北側が高い。覆土から32gの焼骨が出土。浅鉢、深鉢がある。 | 後期後半 | ヒトの大腿骨後面と考えられる骨片と頭蓋骨片1点、不明細片 | 飯田市教育委員会1994『中村中平遺跡』飯田市教育委員会、飯田市教育委員会2011『中村中平遺跡　遺物編』飯田市教育委員会 |
| 145 | 長野県飯田市 | 中村中平遺跡 | 土坑墓15 | 平面形は不整楕円形を呈する。規模は0.8×0.65m、深さ30cmを測る。壁は北側がやや急に立ち上がる。焼骨28g出土。深鉢出土。 | 後期後半 | ヒトの頭蓋骨片数点 | 飯田市教育委員会1994『中村中平遺跡』飯田市教育委員会、飯田市教育委員会2011『中村中平遺跡　遺物編』飯田市教育委員会 |
| 146 | 長野県飯田市 | 中村中平遺跡 | 配石墓9 | 敷石状部分は3.3×1.6mの長方形状に分布。断方は平面不整台形を呈し、規模は3.4×2.25mで敷石状部分の方向とずれがある。深さ50cm。覆土は1層で焼骨の多く混じった土、2層で多量の焼骨の入る層、3層・4層でわずかに焼骨がある。焼骨は3mm篩別で約32,830g、容積約46,500ccを測る。炭は微量ながら5g出土。敷石状部分の下部で高さ10cmの台石個体出土。内部に焼骨が入っていた。検出状況から小型台は副葬品とは考え難く、土器棺と考えられる。定角式磨製石斧は焼けて白色化し、細かい亀裂が走る。土製耳飾は二次焼成を受けている。丸小玉はヒスイ・蛇紋岩製で、二次焼成を受けているものがある。その他、石鏃、磨製石斧、石錘がある。 | 晩期前葉(大洞BC式並行期) | 頭蓋骨の右側9個、左側8個、左右不明6個で推定最小個体数は9個体。左右不明を左右に振り分けても計算個体数は12。配石墓の総重量による個体数推定値(10体)よりも少ない。椎骨、数個の上腕骨片、下肢骨(後面に粗線がみられる)が出土。籠骨は含まれない。総重量32,830g、歯を含めた頭蓋骨片は2,557.5g。火葬骨1体分の重量からの計算では約16体分であるが、再葬墓とすると失われた部分が多いため、実際の被葬体数はさらに多いだろう。大きな破片はなく骨幹部が少なすぎるため、人為的に破片化されたとしても片寄った構成になっている。 | 飯田市教育委員会1994『中村中平遺跡』飯田市教育委員会、飯田市教育委員会2011『中村中平遺跡　遺物編』飯田市教育委員会 |
| 147 | 長野県小諸市 | 郷土遺跡 | 1335号土坑 | 径136×122cmの円形、深さは122cm。下部には人頭大の礫石が数点認められる。縄文土器やイノシシ骨が出土した。 | 中期末 | 下顎骨片1点のみである。萌出直前の切歯を持ち、7歳位である。 | 財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター2000『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書52：三子塚遺跡群　三田原遺跡群　岩下遺跡　石神遺跡群　郷土遺跡　東丸山遺跡　西丸山遺跡　深沢遺跡群』長野県埋蔵文化財センター |
| 148 | 長野県小諸市 | 七五三掛遺跡 | — | 洞穴。1か所目の洞穴の東隣のやや緩やかな斜面に、少し上向きに開口。奥行は1か所目よりやや浅い。 | 後・晩期 | 2か所目に焼骨が含まれる。黒色に変色しているものの、亀裂等は認められない。 | 田中和彦2003「長野県七五三掛遺跡出土の縄文時代人骨」『人類学雑誌』111－1日本人類学会 |
| 149 | 長野県伊那市 | 野口遺跡 | 石囲状遺構 | 縄文晩期の旧表から60cm掘り下げた長方形土坑で、東西4.2m、南北2.5mである。内壁を拳大の自然礫を高さ50cm前後に積み上げて長方形の石囲状施設を構築している。長方形石囲の上面に配石遺7基があり、下部に人骨片堆積と遺物が掘納されていた。人骨群は焼けた破片となって、2～3体分が一括されている。 | 晩期前葉～中葉 | 人骨群はすべて焚熱によって収縮調整され破片化しているが、四肢骨や頭蓋骨の大きな破片もある。下顎骨類によって31個体が推定されるものの、変形しているため性別は不明である。年齢別には老・熟年各4、壮年20、若年2体であり、抜歯の事例もある。 | 林　茂樹1983「野口遺跡」『長野県史考古資料編・主要遺跡（中・南信）』長野県史刊行会 |
| 150 | 長野県茅野市 | 御社宮司遺跡 | 土坑P7 | 平面形は不整方形土坑（60×50cm）から1体分の焼人骨が出土。推定の深さは30cm。墓内南西側付近、底面近くに深鉢形土器の大破片が水平に伏せられ、直下に人骨を埋葬しているが、人骨は土器内の下からはみだし、墓墳外にも広がっていた。墓墳内からは晩期終末の小片が出土したが、墳底に囲わる痕跡は認められなかった。墓墳内上部から使用面のある黒曜石の剥片が1点出土。 | 晩期終末 | すべて一様に火焼を受け、骨質には亀裂、変形を生じた破片状のものであるが、全体的には一個体分の人骨とみなされる。頭骨、椎骨、肋骨、上腕骨、腓骨、手・足骨、指骨でありながら微小な骨の残存が量的にも多い傾向がうかがえる。 | 長野県中央道遺跡調査団編1982『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書茅野市その5　昭和52・53年度（御社宮司遺跡）』日本道路公団名古屋建設局 |
| 151 | 長野県茅野市 | 棚畑遺跡 | 第56号土壙 | 平面形は140×110cmの楕円形で深さ24.8cmの断面形はタライ状を呈する。土壙の中ほどに、骨片とブロック状の焼土を多量に含むかたまりを検出。特に北隅の30×20cmほどの不円形の部分に骨片の集中が著しく、この部分では骨片と焼土が攪乱され、混土共に入り混じった状態。土壙には焼けた痕跡が認められない。骨片は別の場所で焼かれたものが、焼土とともに1つのまとまりとなって土壙に埋められたものと思われる。長さ35cmほどの角柱状の礫が1点ブロックの上に置かれていた。 | 中期 | すべてが焼骨で破片化している。大形の破片には輪状に割れたり、亀裂やまみを生じ、色は総じて灰ねず色を呈するが、一部の骨片の髄腔には低加熱により炭素が付着し、黒色に変化した部分もある。後頭骨で後頭鱗の認められるもの、ラムダ縫合が離開した痕跡を残すものなどが多い。頭蓋底の各所の破片や歯根のみがある。上腕骨滑車関節の一部、尺骨肘関節の滑車切痕部、手骨の中手骨の頭部。頭蓋骨片の割合が多いが、全体としてはごく一部で、少量であること、保存に耐える多くの部位が欠失していることから、同一個体の人骨と推測しながらも、限られた一部の骨の埋存経緯がうかがえる。 | 棚畑遺跡発掘調査団1990『棚畑』茅野市教育委員会 |
| 152 | 長野県千曲市 | 円光房遺跡 | 第1号配石墓址 | 長方形を呈する石棺状配石。長辺1.5m、幅0.4m、深さ0.3mである。南端に蓋石が2個認められ、底には敷石が一部認められた。骨粉状の骨は歯とともに、石棺内から検出し、獣骨とされた焼骨は比較的上部の覆土から検出された。土器、石器が出土している。 | 後期中葉 | 生骨と焼骨に分けられ、生骨は人の歯のみである。焼骨は管状の長骨片などが含まれる。同じ覆土内での少量の破片はすべて白色化した焼骨。 | 戸倉町教育委員会1990『円光房遺跡』戸倉町 |
| 153 | 長野県千曲市 | 円光房遺跡 | 第7号配石墓址 | 長辺2.1m、短辺0.6m、深さは推定で0.3mである。石棺の側壁及び蓋石は一部のみ確認でき、敷石は整然としている。石棺と呼ぶより土坑に近く、一部は蓋石近くに検出された。土器や石器が出土している。 | 後期後半 | 大小の破片がかなり多量である。人骨として確認できるのは、頭蓋骨、歯根2本、上腕骨の骨頭（左右）、尺骨、大腿骨の骨体部分、脛骨の上関節面の一部や歯根を残す骨体の破片、第1中手骨である。その他の破片がすべて人骨か、獣骨と混在するのかは明確でない。 | 戸倉町教育委員会1990『円光房遺跡』戸倉町 |
| 154 | 長野県千曲市 | 円光房遺跡 | 第9号配石墓址 | 第7号配石墓址の下層で検出し、側方によって約2分の1を破壊されている。長辺2.0、短辺0.9mである。石棺の側壁等は検出されず、側方とみられる土坑のみである。遺物群は残存敷石上面の覆土と一緒に検出された。敷石面には極めて多量の焼人骨片が集中して検出された。石器や小型の土偶が出土した。 | 後期 | 人骨はほぼ全身に亘るものであるが、遺存の状態からみて、1個体のすべての骨の集積とは考え難い。頭蓋骨では脳頭蓋を形成する板状の破片が数が多い。骨盤の橈骨起？、上腕骨の骨体下部や滑車部分、大腿骨の殿筋粗面部分や遠位関節面の一部、脛骨の骨体の一部、足根骨の関節面の小部分がある。シカの角の破片などが混入。 | 戸倉町教育委員会1990『円光房遺跡』戸倉町教育委員会 |
| 155 | 長野県千曲市 | 幅田遺跡 | 環状列石第Ⅱブロック | 第Ⅱブロックでは礫群下に小土壙があり、その内部から強い焼熱を受けた成人の頭蓋骨片を11個検出。この場所で焼かれたものではなく、ほかで焼かれたのちに土壙内に納められたとみるべきである。 | 中期 | — | 森嶋　稔1982「幅田遺跡」『長野県史考古資料編・主要遺跡（北・東信）』長野県史刊行会 |

## 第１表　縄文時代の出土焼人骨一覧（8）

| | 所在地 | 遺跡名 | 遺構名 | 遺構所見 | 時期 | 人骨所見 | 引用・参考文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 156 | 長野県東御市 | 辻田遺跡 | SX-01 | 本遺構はSB-02内に造られ、礫を囲んだ状態で検出された。規模等のプランは明確でない。SX-01の配石を除去したところ、石囲炉が検出され、SB-02住居の存在が分かったため、SB-02よりも新しい。覆土の違いによって平面プランを明確にできなかった。 | 後期前葉以降 | SX-01出土の骨はすべて一括の人骨の破砕片で分量的にも多い。これらの骨片は各区を通じて幾つかの部位で接合されることから散乱状態が指摘できる。すべて焼骨で破片状となって原形を留めていない。かなり高温の燃焼の結果、骨の表面から内部の海綿質まで一様に白色化している。頭蓋各部は極めて細小な破片。椎体15個、椎弓部分約10個、肋骨数本、鎖骨の胸骨端寄りの一部、肩甲骨の関節窩の一部、上腕骨3本で骨表面の剥落や亀裂・変形によりその形状の多くは崩壊し、接合は不可能。左右2本は同一個体と思われるが、左1本はかなり華奢である。4本橈骨は骨体中央部での接合によりほぼ原形に復する。尺骨4本、手骨、寛骨、大腿骨は接合による約13cmは1片のみ。脛骨、腓骨、足骨の一部は遺存するが歪曲・変形が著しい。上腕骨・橈骨・尺骨は側方のみのもの、左右対象のものなど形状の対比から少なくとも2個体以上の人骨の混在が推測される。 | 東部町遺跡発掘調査会1995「辻田遺跡」上小地方事務所 他 |
| 157 | 長野県安曇野市 | 北村遺跡 | SH522 | 配石は方形に礫を重ねた内側に長軸を東西にした礫を3個充填。平面形はほぼ円形で深鉢形土器の胴部片を埋設。掘り込み面は長径40cm、短径33cm、深さ15cm。覆土には炭化粒が多量に混在している。土器内部から灰白色化した人骨片が出土し、土器内部にまとまった焼人骨が検出された例は本遺跡では唯一である。 | 後期中葉（加曽利B1式併行） | 土器内の焼骨。全体の骨の量は多い。骨片に重複部分がなく、一体分の大腿骨。骨幹部を中心に、十分に灰化していない黒色から褐色がかった部分がある。骨盤でも後部にやや灰色の分がある。この個体は仰向けに置いた状態で火を受けていることがわかる。頭蓋骨は数cmの破片化。乳様突起は大きい。下顎の第2あるいは第3大臼歯がある。エナメル質は失われているが象牙質から判断して咬耗は進んでいた。若い個体ではない。右踵骨の関節面、寛骨の耳状面がある。脊椎骨に加齢変化の骨増殖がある。大腿骨の粗線はよく発達している。若くない、壮年の男性と考えられる。仰臥位で火葬、あるいは焼死したと思われる。 | 財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター1993「長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書14：明科町内：北村遺跡」日本道路公団名古屋建設局他 |
| 158 | 長野県安曇野市 | 北村遺跡 | SK2309 | — | — | 焼けた頭蓋骨片が数点出土している。焼けて縮小したことを考えても骨は薄い。 | 財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター1993「長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書14：明科町内：北村遺跡」日本道路公団名古屋建設局他 |
| 159 | 長野県御代田町 | 滝沢遺跡 | 30号土坑 | 平面形は楕円形の土坑で、推定規模は南北130cm、東西96cm、確認面からの深さは35cmで、底面は平坦。1層に細かく破砕した焼人・獣骨がまんべんなく散乱。土坑中央北よりの底面から13cmほどの位置に人頭大の礫の集積があり、II層の上に乗る。II層内から人骨の歯を検出。礫直下に滑石製ペンダントが出土。祭祀的な性格を併せ持った墓である可能性が高い。 | 後期前葉 | 出土した骨のほとんどは火を受けており、焼かれていないのはヒトの歯、およびシカの歯2点。ヒトと獣骨が混在。焼骨は細片で、四肢骨はヒトか、獣骨かは判断できないものが多い。ヒトの頭蓋骨及び大腿骨片は火を受けており、歯は焼けていない。火を受けた骨は表面に波型の亀裂が見られるものが多い。頭蓋骨片6点、下顎骨片1点、歯1点出土。上顎左の第3大臼歯萌出で、咬耗はしているが、象牙質の露出はなく、比較的若い20歳前後の個体のものであろう。性別は不明。シカ38点で、イノシシは15点が出土。 | 御代田町教育委員会1997「御代田町埋蔵文化財発掘調査報告書23：滝沢遺跡」御代田町教育委員会 |
| 160 | 長野県御代田町 | 滝沢遺跡 | 遺物覆土中 | D-56近くの盛区覆土中からニホンジカ・ヒトの焼骨が出土していることから、廃絶状態の時に埋納行為、祭祀行為が行われた可能性が強い。 | 後期前葉以降 | 大腿骨骨幹中央の後面粗線部、頭蓋骨の頭蓋冠。 | 御代田町教育委員会1997「御代田町埋蔵文化財発掘調査報告書23：滝沢遺跡」御代田町教育委員会 |
| 161 | 長野県大桑村 | 大明神遺跡 | 集石群 | 火熱を受けた人骨はいずれも破片となっており、遺跡南半の3m²の範囲から出土。耕作による攪乱を受けた地点で、埋葬方形の状態をすることは困難。石積みの下部がおかれた土層までの間に点々と混在し、石積みの群と群の間に故意にくだかれた骨片が数cmの層になって発見された。 | 後期後半～晩期前半 | 抜歯の痕跡が認められる上下顎骨13例。下顎の場合、両犬歯の抜歯例が大部分で、他に犬歯及び切歯の全部に施された例がある。上顎では両犬歯の抜歯1例。 | 樋口昇一1962「長野県西筑摩郡大明神遺跡」『日本考古学年報』15 日本考古学協会、pp.113-114 |
| 162 | 長野県大桑村 | 大明神遺跡 | 3号配石 | 約4mの範囲に約150個の石が集中。 | 晩期 | 玉ネグリッド、頭骨後頭部分の板状骨片が多い。大腿骨の骨体の一部には相当の発達を示す粗線を残す。 | 大桑村教育委員会1968「大明神遺跡」大桑村教育委員会 |
| 163 | 長野県大桑村 | 大明神遺跡 | 2号配石 | 約2m四方を石で囲い、その上を覆うように平らな石をのせていた。石囲いの周辺の数方向から骨片が集中して出土。底面に石はない。 | 晩期後葉 | 玉ネグリッド、ほぼ全身にわたる部位の骨が認められる。頭骨、脊椎骨、上腕骨、骨盤部、大腿骨、肋骨、横骨、腓骨、足指骨がある。一括人骨の中には同一部位と認められる骨が5個ある。 | 大桑村教育委員会1968「大明神遺跡」大桑村教育委員会 |
| 164 | 長野県大桑村 | 下条1遺跡 | 18号土坑 | — | 後期後葉～晩期前葉 | ヒト右側頭骨 | 大桑村教育委員会2016「下条1遺跡」大桑村教育委員会 |
| 165 | 長野県大桑村 | 下条1遺跡 | 骨片集中遺構 | — | 中期中葉～後葉 | ヒト肩甲骨 | 大桑村教育委員会2016「下条1遺跡」大桑村教育委員会 |
| 166 | 長野県木曽町 | 芝垣外遺跡 | — | 抜歯例が3、4例。その理由は不明であるが、火を受けたために保存されていた骨片中から検出された。 | 晩期後葉 | — | 西沢寿晃1982「中部高地縄文遺跡の抜歯人骨」「中部高地の考古学Ⅱ」長野県考古学会 |
| 167 | 長野県木曽町 | マツバリ遺跡 | B-1墓坑 | — | 晩期初頭 | 頭骨の板状骨片、肋骨片、上腕骨とみられる骨体部、長骨の破片。 | 日義村教育委員会1995「日義村の文化財11：マツバリ遺跡」日義村教育委員会 |
| 168 | 長野県木曽町 | マツバリ遺跡 | B-2墓坑 | — | 晩期初頭 | 頭骨の破片、前頭骨、頭頂骨、後頭骨の部分、肋骨片、上腕骨の骨体部分、指骨の一部、大腿骨骨体の部分。 | 日義村教育委員会1995「日義村の文化財11：マツバリ遺跡」日義村教育委員会 |
| 169 | 長野県木曽町 | マツバリ遺跡 | B-3墓坑 | — | 晩期初頭 | 頭頂骨・側頭骨の脳室部分の板状骨は湾曲・変形するが大きいものも残る。側頭、頬骨の眼窩縁を含む部分、上顎骨臼歯歯槽の一部、下顎骨骨体中央部下縁と臼歯歯槽の一部、脊椎骨の椎体・椎弓、肋骨片、指骨は手・足部が認められる。手根、踵骨、大腿骨の一部、膝蓋骨の破片も残存。ほぼ全身に亘る骨と量的な傾向から1個体分とみなせる。シカの指の末節骨、トリの上腕骨もある。 | 日義村教育委員会1995「日義村の文化財11：マツバリ遺跡」日義村教育委員会 |
| 170 | 長野県木曽町 | マツバリ遺跡 | 10号墓・10号炉址 | — | 晩期 | 頭頂骨・側頭骨の破片が比較的多く、大きい破片もある。眼窩の一部、下顎骨骨体中央部分、脊椎骨の一部、肋骨片などが認められる。 | 日義村教育委員会1995「日義村の文化財11：マツバリ遺跡」日義村教育委員会 |
| 171 | 長野県栄村 | ひんご遺跡 | SB16竪穴建物 | 東側から円形プランの竪穴建物跡が切り合う(SB16E)。西側は、床面が三日月形に残存する（SB16W）ため、重複と確定。SB16Wは床面に灰白色粘土を貼り、上に2層炭層が堆積し、焼骨片が多く含まれる。 | 中期後葉以降（栃倉式以降） | SB16から部位不明の骨片が多数出土。いずれも被熱して、人骨と思われるものをすべて採集し、50点を数える。収縮による亀裂が見られる。肉などの軟組織が付着した状態で高温に曝された可能性がある。ヒト遺体が火葬された痕跡の可能性がある。長野県では最古に近い事例。 | 一般財団法人　長野県文化振興事業団　長野県埋蔵文化財センター2018「長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書116：ひんご遺跡」長野県 他 |
| 172 | 岐阜県高山市 | 西田遺跡 | SB2 | 方形の石囲炉を検出し、住居址の推定径は4～5m。推定プラン内の床面には数か所で焼土も検出したことから廃絶住居で土器類が一括廃棄された可能性がある。 | 後期末葉 | 長骨の破片。 | 岐阜県文化財保護センター1997「岐阜県文化財保護センター調査報告書29：西田遺跡」岐阜県文化財保護センター |
| 173 | 岐阜県高山市 | 西田遺跡 | SB3 | 約2mのほぼ方形の住居址。掘り込みは30cm。住居のほぼ中央に板状の石を配する石囲炉を検出。床面近くで鹿角器が出土。プランが不明な古相は性格不明の土器集中区（SX2）として取り上げている。 | 晩期 | 中手(足)骨か、指の破片、長骨破片、第2頸椎の歯突起に相当する破片、頭蓋板状骨内板破片、右側頭骨の乳突蜂巣近、冠状縫合と右側頭線の交点を含む破片、頭蓋板状骨の小破片。冠状縫合の閉鎖状態から、死者の1人は熟年ないし老年。 | 岐阜県文化財保護センター1997「岐阜県文化財保護センター調査報告書29：西田遺跡」岐阜県文化財保護センター |
| 174 | 岐阜県高山市 | 西田遺跡 | SB17 | 住居は5m前後の隅丸方形。南ではやや外へはみ出した形となり、炉の西側では基底面に焼土を有する土坑があることから、住居廃絶後に上層に重複する住居が建てられた可能性がある。上層は水田耕作で削平。石囲炉の反対側のP10から焼骨(ヒト)がまとまって出土した。本住居からは焼骨が多く出土し、ヒト以外にも焼獣骨が多く出土している。P4付近の床面の一部に焼けた痕跡があり、焼失による廃絶もしくは意図的な廃絶と考えられる。土偶・磨製石斧、下呂石剥片、骨片が出土した。 | 後期中葉 | 長骨破片、手根または足根の関節部破片、長骨破片、上腕骨破片、尺骨か橈骨の破片、上腕骨程度の太さがあり、新しい断面では緻密質の内部は黒みを帯びている。おそらく焼かれた時の火のまわりが悪かったのであろう。上腕骨の大結節様に類似する長骨の破片。中手骨か中足骨の破片、上腕骨か腓骨の破片。 | 岐阜県文化財保護センター1997「岐阜県文化財保護センター調査報告書29：西田遺跡」岐阜県文化財保護センター |
| 175 | 岐阜県高山市 | 西田遺跡 | P389 | — | 不明 | 焼損していない縫合骨、ヒトの縫合骨と推定。その他頭蓋板状の焼骨2片。 | 岐阜県文化財保護センター1997「岐阜県文化財保護センター調査報告書29：西田遺跡」岐阜県文化財保護センター |
| 176 | 岐阜県高山市 | 西田遺跡 | SX1 | — | 不明 | 長骨、頭蓋骨破片、尺骨または橈骨の太さの破片。イノシシの臼歯エナメル質破片1片ある。 | 岐阜県文化財保護センター1997「岐阜県文化財保護センター調査報告書29：西田遺跡」岐阜県文化財保護センター |
| 177 | 岐阜県高山市 | 西田遺跡 | SX7 | — | 不明 | 頭蓋骨破片。 | 岐阜県文化財保護センター1997「岐阜県文化財保護センター調査報告書29：西田遺跡」岐阜県文化財保護センター |

## 第１表　縄文時代の出土焼人骨一覧（９）

| | 所在地 | 遺跡名 | 遺構名 | 遺構所見 | 時期 | 人骨所見 | 引用・参考文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 178 | 岐阜県高山市 | 西田遺跡 | SX13 | — | 不明 | 頭骨破片。 | 岐阜県文化財保護センター1997『岐阜県文化財保護センター調査報告書29：西田遺跡』岐阜県文化財保護センター |
| 179 | 岐阜県下呂市 | 桜洞遺跡 | 2章7区Pit20 | 大型の穴状遺構で、形態は不整楕円形。大型礫を含む基底層を掘り込む。人骨片は細片化し、礫と混じる。骨片・礫片ともに火気を受けた状態が認められた。底面の北側部も火気による赤色化した部分が確認され、坑内でかなりの規模で火が焚かれたことが明らかである。遺構内から石鏃、石製石器、磨製石器、土器小片が少量出土している。 | 後期？ | 出土人骨のすべてが小片に割れていて、灰色になっている。骨部が著実に変形・縮小していることから、かなりの温度で加熱されたものと考えられる。年齢・性別を推定することはできない。頭蓋骨、椎骨、上腕骨、尺骨、橈骨、大腿骨、脛骨。最小個体数は7個体と推定。 | 萩原町教育委員会1974『飛騨 桜洞・沖田』萩原町教育委員会 |
| 180 | 愛知県一宮市 | 馬見塚遺跡 | F地点5号ピット | 南北110cm、東西130cmの楕円形で、深さ70cmである。西側に多数の大型深鉢形土器が内部に流れ込んだ状態で出土。石鏃、黒曜石片1のほかに焼けた人骨の小片、炭化したシイの実、木炭が少なからず検出されたが、焼土はなかった。 | 晩期 | — | 澄田正一・大参義一・岩野見司1970「馬見塚遺跡」『新編一宮市史 資料編1』一宮市 |
| 181 | 愛知県一宮市 | 馬見塚遺跡 | F地点7号ピット | 直径90cm、深さ30cmのピットで木炭片若干と人骨が多量に出土した。人骨は大腿骨、椎骨、肋骨等数百片以上でいずれも焼けている。土器片数個と黒曜石片が出土した。 | 晩期 | — | 澄田正一・大参義一・岩野見司1970「馬見塚遺跡」『新編一宮市史 資料編1』一宮市 |
| 182 | 愛知県一宮市 | 馬見塚遺跡 | F地点3号土器棺 | 口縁部を上に拳大の扁平な礫を置き横に倒された状態で出土した。土器棺を取り上げるとその下より口縁部を逆にいれた深鉢の大型土器片があらわれた。内部の土器は底部を欠く。地山を僅かに掘りくぼめてその中に据かれていた。内部には小さな焼けた人骨20片があった。 | 晩期 | — | 澄田正一・大参義一・岩野見司1970「馬見塚遺跡」『新編一宮市史 資料編1』一宮市 |
| 183 | 愛知県豊田市 | 本川遺跡 | — | 第2次調査区からは抜歯痕をもつ焼人骨が小動物骨やクリなどの堅果類と出土している。ア4区とア5区の境界部分で焼爆した骨片が集中して出土し、そのほとんどが人骨である。遺構の範囲は明確でないが、複数個体の火葬骨を埋納した土坑墓であった可能性が高い。 | 後・晩期 | 骨片の総重量は約2.5kgで、シカの中手骨とイノシシの下顎骨などの獣骨の混入も認められる。頭蓋骨破片の分析から6個体（乳児1、小児1、成人［複数の熟年～老年個体を含む］4）以上と推定される。生前抜歯の痕跡を有する上顎骨がある。 | 新修豊田市史編さん専門委員会2013「本川・小町高下遺跡」『新修豊田市史 資料編 考古Ⅰ 旧石器・縄文』豊田市，pp.272-287 |
| 184 | 愛知県田原市 | 伊川津貝塚 | 6号人骨群 | B1区の貝層中から出土した13体合葬の再葬墓。大きさは約200cm×130cmで、深さ約20cmで底部は皿状になっている。6号墓の一部分を灰黒色の灰が覆っていたが、貝層上面は発掘区全体にわたって火を受けており、6号墓上のみならず、発掘区全体にわたって、貝層上面及びV層下面には灰・焼骨・焼貝片がみられた。頭蓋骨のみがまとまっている状態ではなく、また四肢骨と頭蓋骨が連結した状態で出土している訳でもない。 | 晩期前葉 | 頭骨では老年に近い女性8体、熟年男性2体、幼児3体。寛骨は約11体分で女性8、男性2、幼児1。集積墓は長軸が北東-南西向き、約2m×1mの隅円形を呈し、基盤層を浅く掘り下げて人骨を積み上げ、南西隅の一部を残して上面をうすく焼骨片混入の灰が覆っていた。No.6-13が焼骨。幼児。 | 伊川津遺跡発掘調査団1988『渥美町埋蔵文化財調査報告書4：伊川津遺跡』渥美町教育委員会 |
| 185 | 愛知県田原市 | 吉胡貝塚 | 第173号人骨（清野433号） | — | 後期末-晩期 | 甕中に焼けた成人骨の骨片。甕は上向きで約30度傾く。ほぼ完形で、頸部はややすぼまり甕棺とは異なった形である。 | 清野謙次1969『日本貝塚の研究』岩波書店 |
| 186 | 愛知県田原市 | 吉胡貝塚 | 第232号人骨（清野512号） | — | 後期末-晩期 | 甕の中に焼けた成人の人骨を容れる。甕は上向きで、わずかに傾く。底部には焼けた尺骨、腓骨様の骨片を容れ（半焼け、生焼けの骨も多い）、その上に大小3個の扁平自然石を置く。この人骨は1人分の女性である。 | 清野謙次1969『日本貝塚の研究』岩波書店 |
| 187 | 滋賀県多賀町 | 土田遺跡 | 10号土器棺墓 | 土坑は楕円形で、長さ1.15m、幅0.7m、深さ15cm。底面に接して2個体の深鉢を口縁部を重ねて横位に埋設。深鉢20の体部下半の埋土下位から人骨を検出。 | 後期中葉-末葉 | ヒトの歯のエナメル質が出土し、同定部位は大臼歯の頬側面と舌側面の破片。細片も多数出土。いずれも焼かれている。 | 多賀町教育委員会2004『多賀町埋蔵文化財発掘調査報告書14：土田遺跡』多賀町教育委員会 |
| 188 | 滋賀県多賀町 | 土田遺跡 | 11号土器棺墓 | 土坑は楕円形で、長さ1.05m、幅0.8m、深さ25cm。底面に接して2個体の深鉢が口縁部を重ねて横位に埋設。深鉢22の体部下半付近の埋土下位から頭蓋骨の破片と歯を検出。土器棺内の埋土を精査したところ、深鉢23の埋土中から焼土、炭、動物遺体、ベンガラ、人骨が検出された。 | 後期中葉-末葉 | 深鉢22埋土下位からヒトの上顎第3大臼歯。その他、ヒトの大臼歯の歯冠隣面。深鉢23埋土下位からヒトの小臼歯と大臼歯出土。出土状況から同一個体と思われる。大臼歯の咬合面の摩耗の程度から30歳前後と推定。深鉢埋土からはシカの臼歯とサカナの骨片が出土。シカの臼歯以外はすべて焼かれていた。 | 多賀町教育委員会2004『多賀町埋蔵文化財発掘調査報告書14：土田遺跡』多賀町教育委員会 |
| 189 | 滋賀県多賀町 | 土田遺跡 | 12号土器棺墓 | 土坑は楕円形で、長さ1m、幅0.75m、深さ25cm。底面に接して深鉢が横位に埋設。別個体の土器片が検出されなかったため、土器蓋を持たない可能性がある。土器体部の下半付近の埋土下位から人骨を検出した。 | 後期中葉-末葉 | ヒトの歯のエナメル質が数点破片で出土。咬頭に摩耗が見られず、若いと思われる。 | 多賀町教育委員会2004『多賀町埋蔵文化財発掘調査報告書14：土田遺跡』多賀町教育委員会 |
| 190 | 滋賀県多賀町 | 土田遺跡 | SK8（土坑墓） | 土坑はいびつな長方形で、長さ2.65m、北端部幅1.42m、中央部幅1.54m、西端部幅1.58m、深さ20cm。埋土の上層から人骨、土器、石器が出土。土坑の北西部、南東部、南西部の3カ所に分かれて人骨が出土。人骨は同じ土層から出土しているため、近接した時期に埋葬された可能性がある。 | 後期中葉-末葉 | すべて焼骨で、ヒトの歯のエナメル質のみで、大臼歯。歯の摩耗の程度より推定年齢は23歳前後である。 | 多賀町教育委員会2004『多賀町埋蔵文化財発掘調査報告書14：土田遺跡』多賀町教育委員会 |
| 191 | 京都府長岡京市 | 伊賀寺遺跡 | 火葬墓SK03 | 平面形は隅形で124×105cm、深さ50cmに多数の人骨片が納められていた。埋土を洗浄し、約10kgを回収した。骨は細片で、一部大きな骨が並べたようになっていた。他で火葬した後に埋め置かれたものである。土坑の10～20cmの最下層の上に焼土・炭が多く混じる層が10cm程度堆積し、その上位に骨片を多く含む層が25cm程度堆積。比較的大きめの人骨が並べられていたのはこの層の上面である。さらに上面には注口土器1点があり、これを埋める層にもわずかに骨片が含まれていた。注口土器は注口部が折られ、胴部を割られていた。焼土・炭が多く混じる層にわずかに骨片が混じることから、遺骸を焼いた場所の焼土を削り取って埋めたと判断される。 | 後期後葉 | 人骨は灰白色や白色になるまで焼かれており、収縮や変形が目立つ。頭蓋骨から足の指骨までほぼ全身の骨を確認できる。数点の歯牙はエナメル質が剥落している。下顎骨右側の歯槽部分で9点重複している。左側頭骨の外耳道周辺部分7点。下顎骨右側の関節突起7点、下顎オトガイ部分が6点重複しており、左肩甲骨関節窩から烏口突起周辺の部分6点。上腕骨の遠位端、尺骨と橈骨の近位端、腓骨でも3点から4点重複している。重複している骨よりもさらに若い子供の腰椎や尺骨が残ることから少なくとも10体分の人骨が残る。性別を確実に判別できる部位は確認できない。男女の骨が混在するようである。大多数は成人で、寛骨破片と恥骨の関節部分の耳状面の形態から壮年（25～40歳）程度の人のものと判明した。頭蓋骨片の縫合線の内板部分の癒合から壮年以上の人。下顎骨の関節突起のサイズから10代後半。椎骨の左椎弓の癒合が癒合済みであることから4歳前後。尺骨の右近位関節部のサイズから1歳前後の可能性がある。 | 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター2009『京都府遺跡調査報告集133：京都府遺跡調査報告集 第133冊』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター |
| 192 | 京都府長岡京市 | 伊賀寺遺跡 | 火葬墓SK26 | 火葬墓SK03の東側約6mのところ位置する。規模は405×285cm（最大）、400×240cm（中央）、深さ40cm（最大50cm）である。焼土・微細な骨・炭が厚さ10～15cmの帯状に入っていた。ほぼ全面に焼土・微細な骨・炭化物が分布する。骨・焼土・炭化物がセットとなり4～5群をなしていた。これらは微細な骨が散らばった状態であったが、西南部では全身の骨が90×42×12cmの中に、四肢長管骨を中心として束ねられていた。1体分の骨を1か所に集めて埋納し、その周囲に焼土・炭化物を撒くというのが埋納の仕方であったと想定する。内部の石や土坑の壁面が焼けていないこと、炭・人骨・焼土が層序をなしていないこと、焼土は小さな塊となった状態であることから、ほかで火葬された骨・炭化物・焼土が土壙内に納められたと判断した。埋土には土器片や3・4点、凝石質の小破片約15点を回収。火葬時に着装されていたかは不明。破損した石鏃4点が出土。サヌカイトの剥片。 | 後期後葉 | 人骨は灰白色や白色になるまで焼かれており、収縮や変形が目立つ。頭蓋骨、下顎骨、肋骨、椎骨、肩甲骨、四肢長骨、手骨、足骨の全身骨を確認できる。重複する部位はなく、別個体と考えられる部位も確認できないことから、少なくとも1個体分の人骨がある。性別不明の成人。四肢長骨では長軸方向や横方向の深い亀裂、捩じれが認められ、頭蓋骨や肩甲骨などの扁平骨や椎骨の表面にも深く亀裂が入っている。軟部組織が残る新鮮骨の状態にあるとき、死後時間が経たないうちに高温で焼かれたと推測できる。 | 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター2009『京都府遺跡調査報告集133：京都府遺跡調査報告集 第133冊』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター |
| 193 | 京都府長岡京市 | 伊賀寺遺跡 | 土坑SK20 | 火葬墓SK26と重複関係を有し、先行するもの。検出時に赤化した石が混じる拳大～人頭大の石が集中した。検出面では炭・焼土が含まれていた。石棺ではなく、不定形の土坑の内部に石を入れたものと判断した。南北2.55m、東西1.4mの不整形な方形で、2段の掘方となる。埋土には炭化物・焼土がわずかに認められ、数ミリ程度の骨片も数点出土した。焼土・炭化物とわずかな骨片が出土したこと、埋土が2層あり、掘り返されたと判断できるため、遺骸を火葬した場所そのものである可能性が指摘できる。 | 後期後葉以前 | — | 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター2009『京都府遺跡調査報告集133：京都府遺跡調査報告集 第133冊』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター |
| 194 | 京都府京丹後市 | 平遺跡 | 埋甕 | 高さ40cm程度の深鉢を正位の状態で口縁部まで埋めている。煤が付着している。胴部下半を打ち割った転用の蓋としたものが2点、口縁部内面から出土。長さ19.5cm、厚さ2.8cmの扁平な板石を蓋標とし、斜めに落ち込む。深鉢内部から被熱したらしい骨片が10点ほど検出。胴部下方に穿孔があり、晩期の浅鉢によって塞がれていた。平面形は楕円（80×60×40cm）である。 | 晩期 | 被熱らしき骨片（未鑑定） | （財）京都府埋蔵文化財調査研究センター1997「京都府遺跡調査概報 第79冊」（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター |
| 195 | 大阪府茨木市 | 西福井遺跡 | 土坑010 | 平面形は隅丸長方形で、長さ1.3m、幅0.75m、深さ0.24mである。埋土は黒色土で、底面はほぼ平らで、厚5cm程は骨をほとんど含んでいなかった。下層ほど骨の残りが良く、量も多かった。骨に混じって、小さな土器片、サヌカイト片、結晶片岩片が出土した。骨は土坑の壁際まで乱雑に投棄されたような状況で、骨の部位をまとめたとか、人為的に並べたような痕跡は認められなかった。 | 晩期 | 燃焼されたことによる骨の変形や亀裂が大きく、小片となっていた。頭骨、椎骨、肋骨、上腕骨、下顎骨を確認した。性別はひずみや破損で不明。未萌出の歯冠点から5～10才の幼児、摩耗がある第3大臼歯の歯冠から15才以上、寛骨の耳状面は20才前後。恥骨結合面で30～40才代と推定。最小個体数は成人5、未萌出の歯冠を持つ幼児1で6個体と推定。関節面の変形、増殖がみられる。抜歯がみられる。 | 大阪府教育委員会2018『大阪府埋蔵文化財調査報告2017-1：西福井遺跡2』大阪府教育委員会 |

## 第１表　縄文時代の出土焼人骨一覧（10）

| | 所在地 | 遺跡名 | 遺構名 | 遺構所見 | 時期 | 人骨所見 | 引用・参考文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 196 | 大阪府和泉市 | 池田寺遺跡 | 250300 | 平面形は長円形で規模は南北約1.15m、東西約0.9m、深さは約0.7mで、底面は鍋底状である。埋土は有機質分や炭化物に富み、骨片の多くは埋土の中層である2層から出土した。底面から約30cm上部の東側壁面に自然礫が横位で出土している。 | 中期末～後期初頭 | 全ての骨片は焼かれており、灰黄褐から骨髄腔に面する海綿質まで灰白色を呈した。左下顎骨の一部と胸椎の2片で、ヒトと思えるものが1片出土。左下顎骨は関節突起の下部のみで、大きさから成人と推定。胸椎は第1胸椎から第4胸椎のひとつで、骨化の状態から成人である。 | 大阪府教育委員会他1991「財団法人大阪府埋蔵文化財協会調査報告書71：池田寺遺跡Ⅱ」大阪府教育委員会他 |
| 197 | 大阪府東大阪市 | 鬼塚遺跡 | 土壙墓1 | 平面形は楕円形で長軸150cm(推定)、短軸140cm、深さは32cm。断面形は浅い皿状を呈する。内部より成人6人、小人1人を含む8個体以上の一部焼けた骨や歯を含む人骨を検出した。人骨は8個体分の下顎骨を土壙の底縁に沿って置き、その内部に長管骨を積み重ねていた。土壙中央のやや北によった長管骨の直上に人頭大の角礫を置いていた。焼骨の中には生焼けの骨や歯の一部も含まれ、埋土より土器片10点と焼土、サヌカイトフレーク1点が出土した。土壙墓の底面には焼けた痕跡は認められず、別の場所で焼かれて移されたことは間違いない。 | 晩期後葉（滋賀里Ⅲb式併行） | 四肢骨多数と下顎骨8個と永久歯、乳歯が出土。四肢骨の多くは土壙内の北西部から出土し、ほぼ北西－南東方向に向いている。四肢骨と遊離歯の一部に火を受けた痕跡が認められる。成人の下顎骨や20代の可能性大きい女性的な下顎骨、小児の下顎骨。成人の下顎体で比較的小さく、女性と推定。少なくとも成人6個体と小児1個体を含む8個体以上が埋葬されていた。残存部位が四肢骨と下顎骨に偏っていることと骨の配置から再葬墓と考えられる。 | 財団法人東大阪市文化財協会1997「鬼塚遺跡第8次発掘調査報告書」財団法人東大阪市文化財協会 |
| 198 | 大阪府東大阪市 | 鬼塚遺跡 | 土壙墓2 | 平面形は方形で検出時の規模は110cm、70cm以上、深さ30cmである。断面形は逆台形を呈する。内部に大人2人、小人1人以上の焼骨。人骨は北東と南東の隅に頭骨を置き、その間に長管骨をまとめて積み重ねていた。埋土内より焼骨や土器片が出土した。底面は焼けた跡はなかった。 | 晩期後葉（滋賀里Ⅲb式併行） | 四肢骨と頭蓋骨及び歯が残存。四肢骨の多くは大きさが近いものが数本ずつまとめられた形で出土。一部の四肢骨に火を受けた痕跡がみられる。頭蓋骨は南東の隅近くから1個と中央からやや北西によった位置で1個出土。大臼歯に齲蝕による象牙質の露出があり、年齢は30代以上と推定。頭蓋骨とは別に中央やや南より位置から歯20本出土し、乳歯9本を含み、歯冠の形成状態から5～6歳の小児と推定。少なくとも2個体の成人と1個体の小児が含まれている。骨の配置から四肢骨は分離し、頭蓋は下顎骨が離脱した状態で埋葬されたものと推定。 | 財団法人東大阪市文化財協会1997「鬼塚遺跡第8次発掘調査報告書」財団法人東大阪市文化財協会 |
| 199 | 大阪府阪南市 | 向出遺跡 | 土坑3 | 平面形は不整楕円形で、規模は東西1.30m、南北0.90m以上、深さ0.25m。埋土の1層からサヌカイト製石核・石鏃・剥片、土器、石鏃、炭化物、骨片、第2層からサヌカイト製剥片、土器、炭化物が出土。出土した骨片はすべて被熱を受けており、イノシシの左橈骨の遠位関節面全体の中央部。人骨は8片出土し、1片は歯槽の一部とみられる。小型の哺乳類の頭骨縫合部と思われる1片以外は同定できなかった。 | 後期後葉 | － | 阪南市教育委員会生涯学習部生涯学習推進課2000「阪南市埋蔵文化財報告43：向出遺跡発掘調査報告書」阪南市教育委員会生涯学習部生涯学習推進課 |
| 200 | 奈良県橿原市 | 橿原遺跡 | 東部包含層第1区D層 | 東部包含層C区で炉址に近接して熟年男性1体を含む推定5体分で人骨には焼けたのではないかと思われるものがわずかに混じっていたが、そのために炉のような施設が火葬のためのものと考えるまでには至らなかった。 | 晩期前半～中葉 | ヒトの頭蓋骨片と歯など。人骨は獣骨等の多く発見された地点の付近から出土した。歯の摩滅具合から成年段階にあるものと推定。 | 橿原考古学研究所 1961「奈良県史跡名勝天然記念物調査報告17：橿原：橿原市畝傍町橿原神宮外苑拡張事業による考古学遺跡の調査」奈良県教育委員会他 |
| 201 | 奈良県吉野町 | 宮滝遺跡 | 配石遺構 | 約1平方坪の面積で周囲の所々に川原石を配して、区画をなし、そのなかに縄文土器片、石鏃、石くずとともに人骨と獣骨が木炭や灰と雑然と堆積し、骨は細片となって焼けていた。 | － | － | 末永雅雄1944「宮滝の遺跡」奈良県 |
| 202 | 岡山県岡山市 | 彦崎貝塚 | 円形土坑 | 地表よりの深さ80cmのところの砂層に直径30cm、深さ23cmの円形土坑に頭骨3個を巴状に配し、他の部分の骨はばらばらで、穴の中に埋葬し、骨は焼けている。頭骨の下及び穴の中に、それら人骨の指骨、趾骨、その他の部分の骨がばらばらに散在して埋葬され、それらが焼けた人骨である。それぞれを埋葬した後になってもう一度埋葬しなおしたものかもしれないが、特殊な葬法をしているものである。 | 前期中葉 | － | 池葉須藤樹1971「岡山県児島郡灘崎町彦崎貝塚調査報告書」 |
| 203 | 岡山県倉敷市 | 船倉貝塚 | 2号土壙墓 | 1号土壙墓の南50cmの位置で確認。平面形は不整隅丸方形で100×90cmと思われる。残存する深さは約30cmである。ほぼ全身骨格が残っていて埋葬時の姿勢を保つものを2号人骨と呼称し、焼骨片を一括して2b号人骨と呼称する。2b号人骨は2号人骨のほぼ下半身の上を中心に検出された。土器小片、石鏃2点、石錘4点出土。 | 前期末以降 | 2号人骨とともに2号土壙墓より出土した。2号人骨は不整方形の土壙墓に仰臥屈位で埋葬されていたが、2b号人骨は2号人骨のほぼ下半部の上に残存した。土器より掘り込まれ、里木Ⅰ式土器を伴う。2b号人骨は2号人骨の埋葬時に集骨されたらしい。人骨は約300個よりなる焼骨。焼骨のほとんどは頭部、上肢、下肢の骨片である。下顎骨、頬骨、前頭骨、側頭骨の一部、鎖骨、肩甲骨、尺骨、手根骨の一部、大腿骨、脛骨、腓骨、足根骨を確認。2号人骨とは別個体であることに相違ないが、1個体に焼骨のすべてが由来するのかは明らかではない。2b人骨は20歳以降の成人である。 | 倉敷埋蔵文化財センター1999「倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告書8：船倉貝塚」倉敷埋蔵文化財センター |
| 204 | 福岡県苅田町 | 浄土院遺跡 | 2号カメ棺 | 人骨は甕棺内及び甕棺外の南側より20片近くが出土し、中には明らかに大腿骨と思われるものも見られた。甕棺は掘器が浅いため耕作により、口縁部は一部を残すのみで大部分は削り取られてしまっている。人骨が甕棺外より出土したことは甕棺を覆していた物質が腐食するについて甕棺内に土砂が流入し、内に収蔵されていた人骨が甕棺の南側に生じていた空隙に流出したものと思われる。 | 後期後半 | 女性成人の大腿骨、頭蓋骨、鎖骨、肩甲骨、肋骨など。 | 前田成洋1974「九州における縄文のカメ棺」『考古学論叢』第2号　別府大学考古学会，pp.41-45　中村修身1974「縄文時代のカメ棺墓の新例」『考古学論叢』第2号　別府大学考古学会，pp.69-72 |
| 205 | 長崎県雲仙市 | 筏遺跡 | 甕棺60号 | 口径31cm、高さ36cm、内容積約867ccの波状口縁の深鉢型土器で、底部穿孔はない。粗製口縁と骨片及び人の骨粉。 | 晩期後葉 | － | 諫見富士郎・内藤芳篤ほか1976「続・筏遺跡」『百人委員会埋蔵文化財報告』第6集百人委員会 |
| 206 | 長崎県雲仙市 | 筏遺跡 | 甕棺64号 | 口径32cm、高さ36cm、内容積約1126ccの深鉢型土器で、底部穿孔はない。成人上腕骨部分その他（一部朱色に染まっていた） | 晩期後葉 | － | 諫見富士郎・内藤芳篤ほか1976「続・筏遺跡」『百人委員会埋蔵文化財報告』第6集百人委員会 |
| 207 | 熊本県熊本市 | 阿高貝塚 | － | 1919年の調査で長さ1.47m、幅0.9～1.2mの地部に成人男性（西側）・小児（東側）・成人女性（中央）が地下約90cmの貝層下部から検出。男性の骨格は火の作用を受けておらず、小児骨格の一部、女性骨格の大部分は火のために黒焼きとなっている。火は主として女性骨の胸部において行われ、肋骨、骨盤、脊椎骨は灰化し、大腿骨、上腕骨、前腕骨等の半ばは灰化し、残れるものも大部分骨炭となっている。女性骨の頭蓋骨はわずかに燃焼している。焚火の跡は直径1.2～1.5mの範囲になる。 | 中期～後期前半（中期？） | 成人女性1、小児1、頭蓋骨、肋骨、椎骨、上腕骨、尺骨、大腿骨など。焼け残りの骨片に対する火力の働き具合から判断すると人骨焼燬は軟部組織の消失時期に行われたもので、軟部存在時期に（すなわち火葬の目的或いは埋葬直後に死者に対する焚火が近くにないため）行われたものではない。軟部付着骨格を灰化するには非常に強力なる火力を要すると推測できる。 | 清野謙次1920「備中国浅口郡大島村津雲貝塚人骨報告」『京都帝国大学文学部考古学研究室報告』第5冊41-42頁　京都帝国大学文学部考古学教室 |
| 208 | 沖縄県伊是名村 | 具志川島遺跡群岩立遺跡 | 人骨層（Ⅵ層） | 第Ⅰ期の岩立遺跡においては19枚の層が確認され、人骨が多量に出土した層はⅥ層。上、中、下の3層。中層は人骨などの遺物、下層は多量の人骨や貝製品を含む。人骨はH3グリッド南端からH4グリッドにかけて多く確認され、人骨の多くは集骨状況であるが、四肢骨等が同一方向に並べられた状態で確認され、ある程度の秩序をもったことがわかる。岩陰の外を中心にビーチロックが確認され、墓域として区画する甲の遺構が存在していたことが推測されている。未焼人骨と焼人骨が確認され、焼人骨は西側壁に沿って出土する傾向がある。焼人骨の周辺には場所により石灰岩や周りの貝が火を受けている部分もある。丁寧に再葬された「1号人骨」や貝輪装着人骨など特徴的な貝輪着装人骨など特徴的な葬法が確認されている。 | 貝塚時代前期～中期 | 第Ⅰ期具志川島遺跡群発掘調査の岩立遺跡における人骨（Ⅵ層）の推定個体数は62体、乾燥骨・焼骨・火葬骨があり、焼骨や火葬骨には細片と化して同定できないものが多数あったため、実際はさらに多いものと考えられる。性別と年齢では成人が61%内、男性22%、女性19%、性別不明13%、未成人が30%がある。焼けた人骨が37%の割合で確認された。一次葬後、遺体が腐食し白骨化した状態の人骨を再び火で焼いて再葬したと考えられる一群があり、全体の約24%を占める。焼いた場所は特定できないが、人骨を徹底的に焼くのではなく、焼け方にかなりのムラがある。例えば、1本の四肢骨でも強く焼けた場所と殆ど焼けていない場所が顕著に見い出せる。このことは、遺体を焼いて粉々に破壊する意識というよりも「焼く」行為そのものに葬送の意味があったと思われる。皮や筋肉といった軟部組織が付着した状態で焼かれたと考えられる一群があり、全体の13%を占める。これは、死後まもない遺体が腐敗して白骨化する前に焼かれたと考えられ、火葬に類する葬法と言える。 | 沖縄県立埋蔵文化財センター2008「紀要沖縄埋文研究」沖縄県立埋蔵文化財センター |
| 209 | 沖縄県伊是名村 | 具志川島遺跡群岩立遺跡西区 | 5号岩陰墓 | 人骨が検出された範囲は約6×1mで、岩陰奥壁面に沿うように狭い、十数体分の人骨が検出されたが、解剖学的な位置関係は保っておらず、岩陰でもさらに壁面を意識して集骨された状態である。人骨のなかには頭蓋骨の復元が可能な保存状態の良好なものもある。 | 貝塚時代前4期 | 人骨のほとんどは解剖学的な位置関係を保っておらず、散乱した状態で出土した。焼骨は女性の上腕骨と脛骨が確認された。 | 沖縄県立埋蔵文化財センター2012「沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書64：具志川島遺跡群」沖縄県立埋蔵文化財センター |

# 南魚沼市金屋遺跡出土の古代の土器について

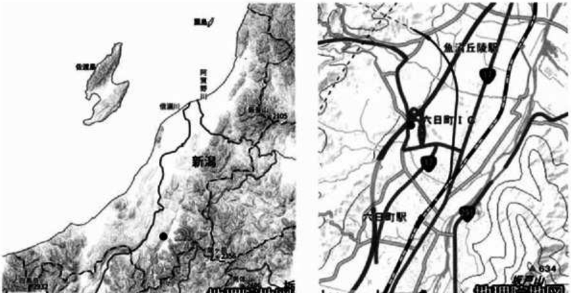
春 日 真 実

## はじめに

金屋遺跡は新潟県の南東部、南魚沼市余川に所在する遺跡である（第１図）。これまで、関越自動車道建設［新潟県教育委員会 1985］、関越自動車道雪氷Ｕターン路建設［新潟県教育委員会ほか 2006］、国道253 号八箇峠道路建設［新潟県教育委員会ほか 2015・公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2023］に伴い発掘調査が行われている。金屋遺跡からは縄文時代から中世の遺物が出土しているが、そのなかでも古墳時代前期と古代（主に平安時代）の遺物が多く出土している。

本稿は金屋遺跡の古代の遺構から出土した主な土器（群）について、その編年的な位置（年代）について検討することを目的とする。検討内容については、2024（令和６）年度の公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団専門研修制度を利用して令和７年２月 17 日に実施した研修結果と、それ以前の知見をもととしている。令和７年２月 17 日の研修は株式会社アコード 中村　毅氏・菅原章太氏・朝田　要氏の３名と金屋遺跡 SI ２・４・５・９［新潟県教育委員会 1985］、04SI40［新潟県教育委員会ほか 2006］・SI1470［公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2023］出土土器を閲覧し、意見交換を行った。従って、以下の検討結果は上記３氏に拠るところが少なくない。ただし以下に誤りがあればその責は春日にある。

以下では、第１表の須恵器の胎土分類、第２表の時期区分を用い記述する。器種分類については、『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 296 集　金屋遺跡Ⅳ』の器種分類［公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2023］に準ずるが、「在地型」とした煮炊具は「魚沼型」と呼び変える。




第１図　金屋遺跡の位置

## 1　竪穴建物出土の土器群（第２～４図）

**SI1470**［公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2023］（第２図）

須恵器杯蓋（227・228）・有台杯（229・230）、土師器無台杯（231）・土師器小甕（232）・長胴甕（233・235）・武蔵型甕（234）などが出土している。須恵器の胎土はＣ群（227・228・230）とＥ群（229）がある。杯蓋の器高が低いこと、胎土Ｂ群の須恵器や土師器無台椀が確認できないことなどから考え７期の新しい段階（９世紀初頭）の土器群と考えている。

**SI 2**［新潟県教育委員会 1985］（第２図）

須恵器杯蓋（147～149）・有台杯（150・151・154）・無台杯（152・153）、土師器無台椀（156～158・160）・小甕（159）・長胴甕（155）などが出土している。須恵器の胎土はＢ群（150・151）、Ｃ群（147～149・153）、Ｅ群（152）などがある。胎土Ｂ群の有台杯（150）・胎土Ｅ群の無台杯（152）の形態およ

| 分類 | 特徴 | 産地・須恵器窯など |
|---|---|---|
| A群 | 石英・長石・雲母など花崗岩起源の大型の鉱物を多く含む粗い胎土。 | 阿賀北の須恵器窯で多く確認できる。 |
| B群 | 軟質の白色小粒子を定量含む。きめ細かいもの（B1）と砂質の強いもの(B2)がある。 | 佐渡市小泊須恵器窯群で多く確認できる。 |
| C群 | 小型の長石・石英を少量含む粘土質の強い胎土。表面に光沢があるものが多い。 | 新津丘陵・長岡市東部の東山丘陵・高田平野東部の丘陵の須恵器窯で多く確認できる。阿賀北北部の須恵器窯にも一部見られる。 |
| D群 | 砂質が強くやや粗い胎土。海綿骨針・やや大型の白色の礫が確認できることが多い。 | 三島郡出雲崎町、長岡市の信濃川左岸の須恵器窯で多く確認できる。 |
| E群 | 砂質もしくはシルト質で均質な胎土。 | 高田平野西部の丘陵の須恵器窯で多く確認できる。 |
| F群 | 黒色の小さな吹き出しが多く確認できる粘土質の胎土。 | 糸魚川市西角地古窯跡で多く確認できる。 |

第１表　須恵器の胎土

| | 時期区分（春日 2019） | | 資料 | 年代 | 文献 |
|---|---|---|---|---|---|
| 600 | 1段階 | 1期 | 上越市一之口遺跡 SI79<br>上越市峪ノ上遺跡 SI1<br>上越市延命寺遺跡 SI006 | | 新潟県教委ほか<br>1994・2005・2008 |
| | 1段階 | 2期 | 上越市津倉田遺跡 SI53・80・102 | | 上越市教委 1999 |
| | 1段階 | 3期 | 上越市津倉田遺跡 SI62B・SX97 | | 上越市教委 1999 |
| 700 | 1段階 | 4期 | 妙高市栗原遺跡 SD25<br>上越市柿崎区木崎山遺跡３号住居 | 大宝元年（701）上限 | 新潟県教委 1982<br>新潟県教委 1992 |
| | 1段階 | 5期 | 長岡市八幡林遺跡Ａ地区Ⅳ層<br>長岡市下ノ西遺跡 SD201<br><br>同 SD202<br>上越市延命寺遺跡 SD1700 | 養老年間（717～724）<br>養老四または六年～天平二年<br>（720 または 722～730）<br>神亀二年（725）<br>天平八年（736） | 和島村教委 2005<br>和島村教委 1998・2003<br>新潟県教委ほか 2008 |
| | 2段階 | 6期 | 上越市今池遺跡 SK24<br>長岡市八幡林Ｈ地区 | | 新潟県教委 1984<br>和島村教委 1994 |
| 800 | 2段階 | 7期 | 上越市滝寺７号窯跡<br>上越市今池遺跡 SK102 | 西暦 775 年（年輪年代、上限）<br>壺Ｇ | 新潟県教委ほか 2006<br>新潟県教委 1984 |
| | 2段階 | 8期 | 聖籠町山三賀Ⅱ遺跡 SI1320・753 | | 新潟県教委 1989 |
| | 2段階 | 8期 | 南魚沼市金屋遺跡 SK3160 | 京都産緑釉陶器（軟質） | 埋文事業団 2023 |
| | 2段階 | 9期 | 新潟市江南区駒首潟遺跡旧河川<br>新潟市西区釈迦堂遺跡Ⅸ層<br>阿賀野市蕪木遺跡 SD21・32・110<br>長岡市八幡林遺跡Ⅰ地区上層 | 天安元～貞観元年（857～859）<br>貞観五年（863） | 新潟市教委 2009<br>新潟県教委ほか 2000・2018<br>和島村教委 1994 |
| | 2段階 | 10期 | 子安遺跡 SI354 | | 上越市史編さん委員会 2003 |
| 900 | 3段階 | 11期 | 西部遺跡 SD1377 | O-53 | 新潟県教委ほか 2010 |
| | 3段階 | 12期 | 長岡市門新遺跡 SD152 | 延長六年（928） | 和島村教委 1995 |
| 1,000 | 3段階 | 13期 | 上越市江向遺跡 SE8 | | 上越市史編さん委員会 2003 |
| | 3段階 | 14期 | 上越市一之口遺跡東地区 SD1’ | 丸石２号 | 新潟県教委ほか 1994 |
| | 3段階 | 15期 | 上越市至徳寺遺跡№ 474 | 明和 27 号 | 上越市史専門委員会<br>考古部会 2003 |

第2表　本稿で用いる時期区分と主な資料（春日2024をもとに作成）
＊「教委」は教育委員会、「埋文事業団」は公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団の略

び土師器無台椀が確認できることからSI1470出土土器群より新しく８期（９世紀前葉）の土器群と考えている。

**04SI40**［新潟県教育委員会ほか2006］（第２図）

須恵器杯蓋（17）・有台杯（18～21）・無台杯（22～26）・甕（30）、土師器長胴甕（27～29）などが出土している。長胴甕のうち27･28は北陸型だが､29は北信型である。土師器食膳具は報告されていない。須恵器の胎土はA群（19）、B群（26）、C群（17・18・20）、E群（25）などがある。杯蓋（17）の形態からSI1470よりも新しいと考えられる。胎土B・E群の須恵器無台杯（26・25）の形態は８期に多くみられる。SI ２と同じく８期の土器群と考えている。

**SI 5**［新潟県教育委員会1985］（第３図）

須恵器無台杯（186）・長頸瓶（187）、土師器無台椀（188～193）・武蔵型甕（194）、黒色土器無台椀（195～198）などが出土している。186は胎土C群で、８期かそれ以前のものと考えられる。土師器無台椀190・193は後述するSI ６出土の土師器無台椀よりも作りが丁寧である。186は別の時期の須恵器で、他の土器群は９期の土器群と考えている。

**SI 9**［新潟県教育委員会1985］（第３図）

土師器無台椀（252・253）・武蔵型甕（254）・長胴甕（255～257）などが出土している。252・253は口径13.4～14.4cmの大型の無台椀で金屋遺跡の比較する対象が見当たらない。しかし、須恵器食膳具が確認できないこと、土師器長胴甕（255～257）の口縁端部が、わずかだが上方に摘ままれている。このことからSI ２や04SI40よりは新しく、９期もしくは10期の土器群と考えている。

**SI 6**［新潟県教育委員会1985］（第３図）

須恵器有台杯（207）、土師器無台椀（208～215・218～220・222～224・226)、黒色土器無台椀（216・217・221）、小甕（225・227・228）、長胴甕（229）、北陸型の鍋（231）、北陸型の長胴甕または鍋（230）などが確認できる。土師器無台椀はSI ５出土のもとと比較すると作りがやや粗雑である。鍋（231）は器壁が厚く、口縁端部を上方にわずかに摘まむ。SI ５に後続し、10期頃の土器群と考えている。

**05SI31**［新潟県教育委員会ほか2006］（第４図）

土師器無台椀（55～64）、黒色土器無台椀（65～67）、須恵器甕または横瓶（73）、長胴甕（68）などが確認できる。73は胎土B群である。須恵器食膳具が確認できないこと、SI ６同様、土師器無台椀がSI ５出土のものと比較すると作りが粗雑であることから、10期あるいは11期の土器群と考えている。

**SI 3**［新潟県教育委員会1985］（第４図）

土師器無台椀（161～165）、羽釜（166）が確認できる。口径約15cmの大型の無台椀161は口縁端部が外反する。全形のわかる食膳具が２点しかなく時期の比定が難しいが、SI ６・05SI31と同時期かやや後続する土器群と考えている。

**SI 7**［新潟県教育委員会1985］（第４図）

土師器無台椀（232～236・244～247）・小甕（239）・羽釜の底部（243）、黒色土器鉢または大型の椀（237）・有台椀（238）・無台椀（242）が確認できる。土師器無台椀232・黒色土器有台椀238の形態や羽釜があることなどから13期頃の土器群と考えている。

**SI 4**［新潟県教育委員会1985］（第４図）

須恵器無台椀（173）、土師器無台椀（176・177・181・182）・北信型長胴甕（174）・武蔵型甕（180）・羽釜（179）、黒色土器無台椀（183）が確認できる。176は口径11.8cm、177は口径11.6cmである。土師器

無台椀 176・177 の形態や土師器羽釜が確認できることから主に 14 期の土器群で、須恵器無台椀 173、北信型長胴甕 174、武蔵型甕 180 は他時期（14 期より古い時期）の土器と考えている。

SI 8［新潟県教育委員会 1985］（第 4 図）

土師器小椀（248・249）・有台椀（250）、黒色土器有台椀もしくは無台椀（251）が確認でき、煮炊具は確認できない。小皿 248・249 は、口径 10.8cm で SI 4 出土の土師器小皿 176・177 に比べ小型であることから、15 期の土器群と考えている。

## 2　その他の遺構出土の土器

SD11［新潟県教育委員会 1985］（第 5 図）

須恵器杯蓋（387）・有台杯（390）・無台杯（389）・杯類の口縁部（388）が確認できる。無台杯 389 の口径が 12.6cm と大型であること、胎土 B 群の須恵器および土師器食膳具が確認できないことなどから 7 期の土器群と考えている。ただし、前章で 7 期とした SI1470 出土土器と対比し同時期であることを確認できる資料は無い。

SK1241［公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2023］（第 5 図）

食膳具は確認できないが、魚沼型の土師器甕類（241 ～ 243）が出土している。前章で 7 期とした SI1470 出土土器には魚沼型の土師器甕が確認できるが、8 期とした SI 2・04SI40 にはこれが確認できない。7 期の土器群の可能性が高いと考えている。

SK3056・SB2000［公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2023］（第 5 図）

須恵器杯蓋 248・285 は胎土 C 群で、248 は口径 11.8cm、285 は口径 11.5cm である。器高が高く形態は 8 期とした 04SI40 出土の胎土 C 群の杯蓋（第 2 図 17）に似る。SK3056・SB2000 出土土器とも 8 期の土器群と考えている。

SK3160［公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2023］（第 5 図）

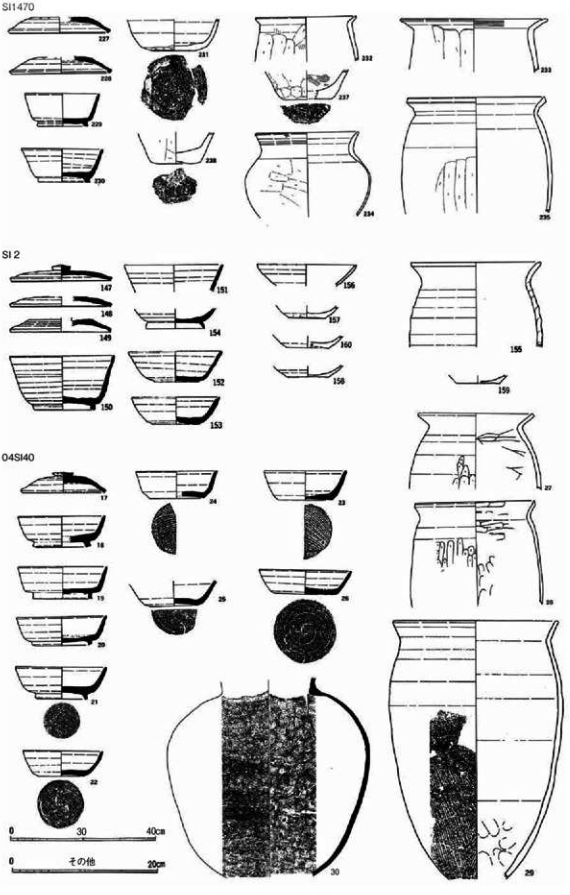
焼成が軟質で平高台を持つ緑釉陶器皿（272）、須恵器杯蓋（256 ～ 258）・有台杯（259・260）・無台杯（261・262）、土師器無台椀（263 ～ 266・268・269）・北陸型の鍋（274）、黒色土器無台椀（267・270・272）、両面黒色土器の蓋もしくは脚部（273）が出土している。土師器無台椀 264 ～ 266 の底部外面は回転糸切りである。須恵器の胎土は 256・257・259・260 が C 群、258 が E 群、261・262 が B 群である。胎土 B・C・E 群の須恵器食膳具、底部回転糸切りの土師器食膳具が存在することから 8 期の土器群と考えているが、胎土 B 群の無台杯（261・262）は、8 期とした 04SI04 出土の胎土 B 群の無台杯（第 2 図 26）に比べ口縁部の外傾が大きい。また 04SI40 には確認できなかった土師器無台椀も相当量確認できることから、8 期の中でも新しい時期の土器群と考えている。

SX64［公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2023］（第 5 図）

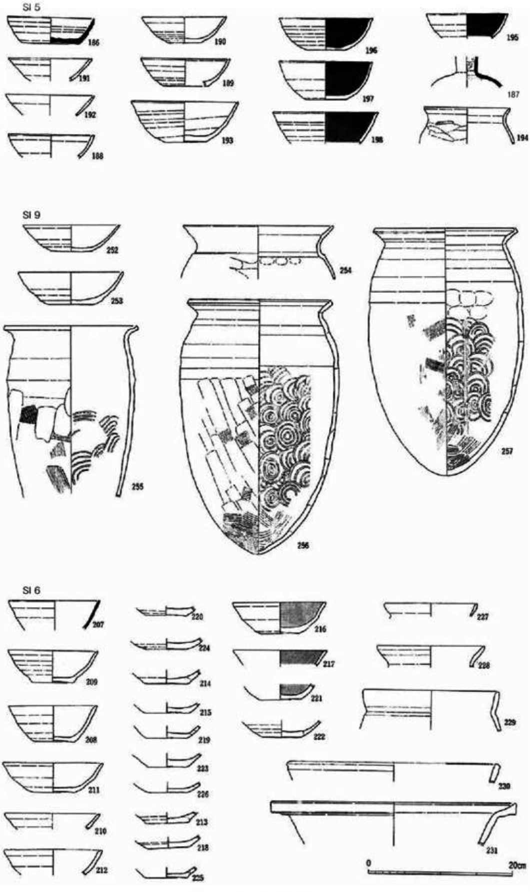
胎土 B 群の須恵器杯蓋（1）、土師器無台椀（2 ～ 10）・北信型の鍋（12）、黒色土器無台椀（11）が確認でき、煮炊具は確認できない。須恵器杯蓋（1）は低平な環状の摘みを持ち、頂部はヘラケズリを行わないことから 10 期かこれ以降のものと考えられる。土師器無台椀には 2・4 など器壁の厚いものがあり、11 期の土器群と考えている。

SX20［新潟県教育委員会 1985］（第 6 図）

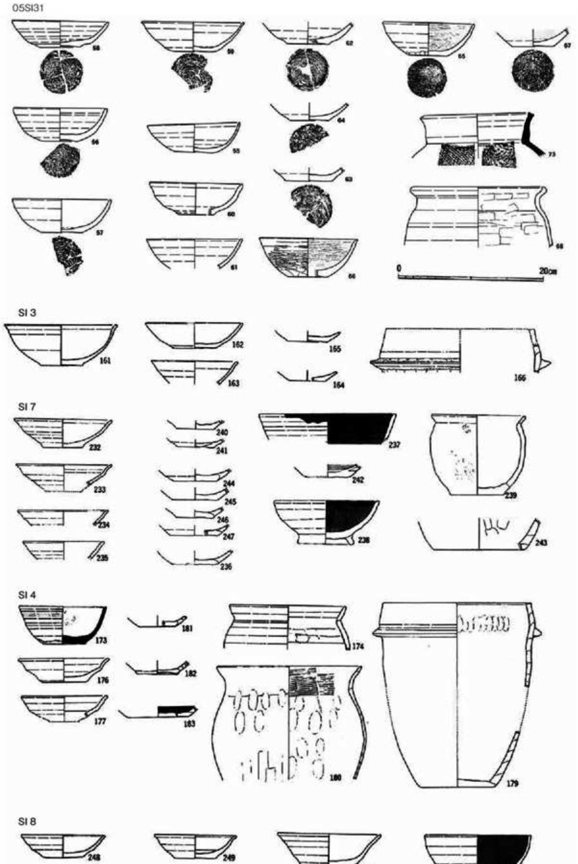
灰釉陶器皿（263）・長頸瓶（264）、須恵器無台杯（258・259）・長胴瓶（260）・横瓶（262）・甕（261）、土師器無台椀（265 ～ 305・307 ～ 311・317・318）、黒色土器無台椀（312・313・315）・有台椀（314）が確認でき、煮炊具は確認できない。胎土 B 群の須恵器食膳具は確認できない。土師器無台椀の形態から考え、



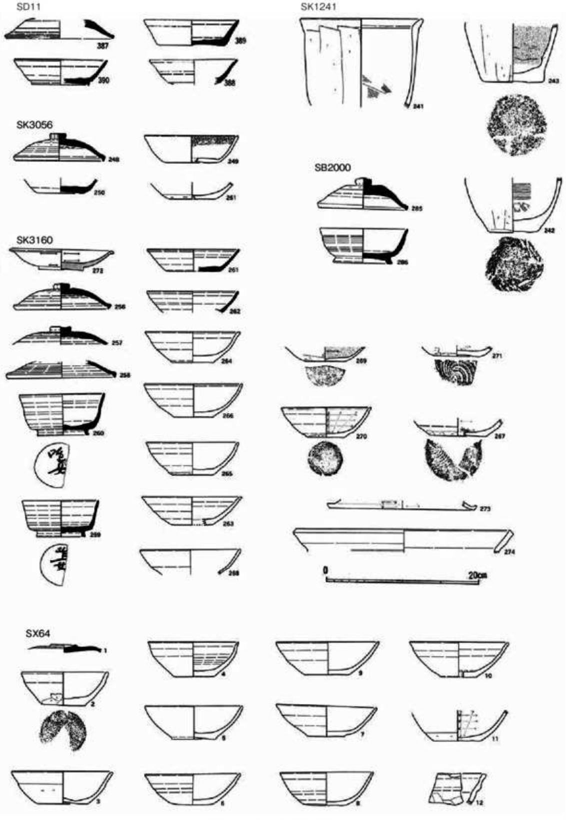

第２図　金屋遺跡出土土器１



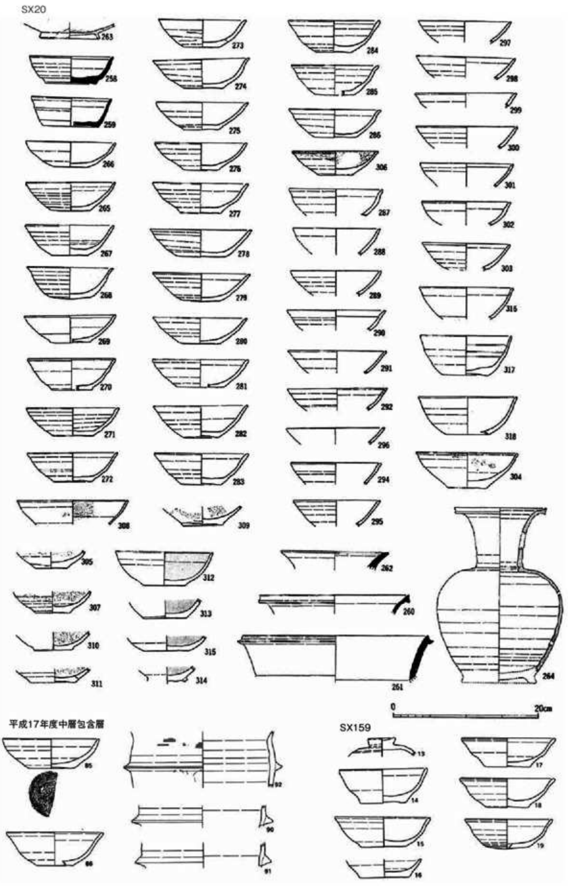

第３図　金屋遺跡出土土器２




第４図　金屋遺跡出土土器３




第５図　金屋遺跡出土土器４




第６図　金屋遺跡出土土器５

SX64（第５図）と近接した時期で、11 期の土器群と考えている。須恵器無台杯（258・259）は他の土器よりも古い時期のものであろう。

**平成 17 年度中層包含層**［新潟県教育委員会ほか 2006］（第６図）

05SI31 と同一の調査区から出土した土器群である。土師器無台椀（85・86）・羽釜（90 ～ 92）が出土している。05SI31（第４図）と近接した時期で、11 期頃の土器群と考えている。

**SX159**［公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2023］（第５図）

黒色土器杯蓋（13）・土師器無台椀（14 ～ 19）が出土している。土師器煮炊具・須恵器は確認できない。土師器無台椀（14 ～ 19）が SX64SX30 の土師器無台椀（第５図 14 ～ 19・第６図 284 ～ 286）に比べ厚手で作りも粗雑であることから 12 期あるいは 13 期の資料と考えている。

| 時期 | 土器群（竪穴） | 土器群（その他） |
|---|---|---|
| 7 期 | SI 1470 | SD11・SK1241 |
| 8 期 | SI 2・04SI40 | SK3056・SB2000<br>SK3160 |
| 9 期 | SI 5 | |
| 10 期 | SI 6・9 | |
| 11 期 | 05SI31・SI 3 | SX64・SX20・H17<br>中層包含層 |
| 12 期 | | SX159 |
| 13 期 | SI 7 | |
| 14 期 | SI 4 | |
| 15 期 | SI 8 | |

第３表　主要土器群の時期

## まとめ

以下をまとめると、第３表となる。金屋遺跡では７～ 15 期の土器が確認でき、特に８期～ 11 期の土器が多い。

## 引用文献


春日真実　2023『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 298 集 金屋遺跡Ⅳ』公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

春日真実　2024「土師器と須恵器　越後国」『東国古代遺跡の定点』眞保昌弘・田中広明編　高志書院

公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　2023『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 298 集　金屋遺跡Ⅳ』

田中祐樹　2021「金屋遺跡出土の関東系土器について１－武蔵型甕とその周辺－」『研究紀要』第 12 号　公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

實川順一　2006「第Ⅵ章２Ｃ　古代の土器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 155 集　金屋遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 pp.46-48

新潟県教育委員会　1985『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 37　金屋遺跡』

新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2006『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 155 集　金屋遺跡Ⅱ』

山本　肇　1985「第Ⅶ章　まとめ」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 37　金屋遺跡』新潟県教育委員会 pp.96 － 106

# 埋蔵文化財センターにおける整理作業の現状と課題

## －「埋蔵文化財担当職員等講習会－埋蔵文化財調査へのデジタル技術の応用－」に参加して－

土橋　由理子

### はじめに

1996（平成８）年に新潟県埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）が完成し、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団の市内２か所の事務所を統合・移転してから30年近くが経とうとしている。移転当初は報告書の図版は手作業でトレースし、台紙に糊付けして版下を作成、印刷業者で版組していたが、2000（平成12）年頃から徐々にDTP編集を専門業者へ委託するようになった。2015（平成27）年度には発掘調査現場での写真記録は完全にデジタルカメラへ移行した。2023（令和５）年度は遺物実測に３Ｄスキャナ（キーエンス社VL-770）を導入し、2024（令和６）年度は三次元画像をもとにデジタルトレース（実測図作成）を行った。報告書編集は引き続き専門業者へ委託している。

作業の効率化や利便性を図るために活用できるデジタル技術の幅を広げたいと思い、「2024（平成６）年度埋蔵文化財担当職員等講習会－埋蔵文化財調査へのデジタル技術の応用－」に参加するとともに、デジタル技術活用の先端を行く公益財団法人山形県埋蔵文化財センターにて作業の詳細についてご指導いただいた。（日程：９月18・19日は山形市民会館にて講義。20日は山形県埋蔵文化財センターにて研修。）

本項では埋文センターにおける整理作業の現状と、研修を通して見えた課題を遺物中心にまとめる。

### 資料・遺物の管理

埋文センター移転を契機に、記録や遺物の収納方法を定めた。それまでは遺跡ごとに最適と思われる方法で収納していた。ところが、埋文センターの収蔵可能量に対して毎年の遺物増加量が想定を上回ったため、既に収蔵されている遺物も圧縮・再収納しなければならなくなった。そこで収納方法を統一し台帳管理することにした。報告書作成前の遺物は調査年次ごとに収納箱に通し番号を付け、収納物と収蔵庫での収納棚位置を遺物箱台帳に記載した。報告書作成後は、図化・掲載した遺物は報告書掲載番号を注記し、掲載番号を記載したラベルを添付したチャック付きポリ袋に入れ、基本的に掲載順に収納して報告書掲載遺物箱台帳を作成した。あわせて掲載外を含む全体量を把握するため、報告書単位の箱台帳を作成して管理することにした。さらに収蔵庫の配置図に遺跡名と箱番号を記載し、遺物の所在を把握している。

遺構図面・写真も台帳を作成し、測量・科学分析など記録全体を把握できる一覧表を作成している。

### 報告書の作成

<u>遺物の把握</u>　遺物は発掘調査年次に水洗・注記を終了するのが原則である。埋文センターで整理作業を行う場合は、土器であれば小グリッドや遺構単位で出土重量を計量した後に接合・復元作業を実施する。石器は器種や石材分類を行い、台帳を作成し必要に応じて接合作業を行う。木製品や金属製品は調査年次に台帳を作成し保存処理班へ納品されたものを確認し、実測個体の抽出などから開始する。

<u>遺物実測</u>　2023年度はキャリパーや真弧を用いた鉛筆図化を主体に、石器や大型の土器、木製品の一部は三次元画像を鉛筆トレースして図化した。2024年度の土器実測は須恵器や小破片からの復元実測は鉛筆図化、完形に近い土器は３Ｄスキャナで生成した画像をもとにデジタル図化（Adobe Illustrator）した。すべてをデジタル図化しなかった理由は以下の３点である。１点目は、須恵器など器面が滑らかで調

整痕が顕著でない遺物では、３Ｄスキャナから生成された断面図では胎土の砂粒の凹凸まで正確に図化してしまい、表現したい調整痕がわかりにくかったこと。２点目は須恵器杯のような小型で単純な器形であれば、スキャニングして画像を調整するよりも早かったこと。３点目は破片からの復元実測は土器の直径や傾きを設定するのが三次元画像で行うより早かったことである。

デジタル図化する土器は、予め調査員がチャコペンで調整痕の輪郭を描いてから嘱託員がスキャニングした。甕のような深い土器は３Ｄスキャナの光が届きさえすれば画像が得られるので、内面の観察や図化が肉眼よりも容易だった。山形県埋文センターではメタシェイプによりモデル作成し、陰影調整することでチャコ入れなしでも調整痕を見えるようにしていた。この方法ならばチャコ入れの時間を縮減できるし、何よりチャコ消しで遺物を傷めることもないので埋文センターでも取り入れたいところである。

石器は三次元画像から展開図を正確に起こせるのでその点では鉛筆図化に勝る。ただし、スキャニングの精度にもよるが、リング・フィッシャーや微細剝離までは把握しきれない。精度を上げれば解決するのだろうが、その分スキャニングの時間やデータ容量が増えるので適切な精度を見極める必要がある。

木製品は真弧を当てなくても計測できたので、劣化した表面を傷つけることなく正確に図化出来た。

編　集　埋文センターでは、本文は Word、観察表は Excel、図版は Illustrator や CAD など複数ソフトで原稿を作成し、編集業者で１冊にまとめている。山形県埋文センターでは InDesign で組見本を作成していた。作業を拝見したが、原稿を書きながら報告書全体が見渡せるので効率的だと感じた。

保　管　遺物・記録とも前述したとおり、台帳を作成し保管している。報告書掲載写真は遺構・遺物とも編集業者が RAW 現像して色調整済みの tiff を図版単位のフォルダーに格納し、報告書 PDF（印刷用とリポジトリ用）とともに DVD やＢＤ等に保管して納品される。納品データは資料保管用 NAS と複数の外付け HDD（ポータブル式・据え置き式）にコピーされ、分散保管される。

2024 年度から各自の PC で Illustrator や CAD で図化作業を行うなどデジタル作業が増えた。そこで、全体を把握しやすくするため作成データを NAS に保管し、お互いに作業状況を把握できるようにした。

## おわりに

山形県埋文センターでは発掘調査現場から報告書作成・データ移管まで対象や方法が明示されていた。埋文センターでは発掘調査現場・整理作業で三次元計測を取り入れ始めたばかりで、詳細なデータ保管のルール作りはこれからである。また、報告書に求められる情報もデジタル技術の進展によって変化し始めている。今後は記録保存の意義を確認しながら、その時々の最適な報告書の提示方法や承継しやすい遺物・デジタルデータを含む資料保管方法を検討し、柔軟に対応していく必要がある。

謝辞　研修ではお忙しい中にもかかわらず、公益財団法人山形県埋蔵文化財センターの高桑弘美様、高桑登様、天本昌希様から懇切丁寧なご指導をいただきました。記して感謝申し上げます。

## 引用・参考文献

天本昌希　2025「R6 全埋協デジタル技術等活用推進委員会事例報告　山形県埋蔵文化財センターでの三次元計測の実践例」公益財団法人山形県埋蔵文化財センター
金田明大　2025「全埋協デジタル技術等活用推進委員会　遺跡・遺構・遺物の３次元計測について」（独）国立文化財機構奈良文化財研究所
三戸部秀樹　2019「公益財団法人山形県埋蔵文化財センターにおけるデジタル技術の利用例について」『研究紀要』第11号　pp.91-108　公益財団法人山形県埋蔵文化財センター
三戸部秀樹　2024「発掘調査現場における三次元写真計測の利用事例について」『研究紀要』第 16 号　pp.43-52　公益財団法人山形県埋蔵文化財センター

# 遺構断面の３次元計測の活用

飯　坂　盛　泰

## はじめに

３次元計測が遺跡発掘調査の現場、整理作業で活用されるようになってきている。当事業団は、2023（令和５）年度から整理作業で３次元計測機器を導入し、遺物実測作成等で活用している。一方、調査現場は、委託した業者により手法は左右され、３次元計測を行っているところとそうでないところと様々である。筆者は、2023（令和５）年度に奈良文化財研究所で実施している「文化財三次元計測課程」の専門研修を受講して３次元計測の活用・方法を学ぶことができた。これから益々３次元計測を活用する調査現場が増えてくると思われるが、まだ調査現場で３次元計測を経験したことがない。それで３次元計測を導入している県内の２か所の調査現場を研修先に選び、作業手順について説明を受けた。また、柏崎市丘江遺跡の発掘調査で試みたフォトグラメトリの３次元計測による遺構断面図の作成について紹介する。

## 専門研修

研修は当事業団で発掘調査を実施している六日町藤塚遺跡（令和６年９月 24 日）と新潟市で発掘調査を実施している五番田遺跡（令和６年 10 月 28 日）を見学した。六日町藤塚遺跡では、調査の支援業務をしている株式会社アコードの担当者から遺構断面図を３次元モデルから３次元 CAD に取り込んで作成している手順を説明して頂いた。五番田遺跡では新潟市から測量業務の委託を受けている株式会社オリスの担当者から資料を準備して頂き、長大で深さのある土層断面図の作成を例に、写真の撮影法、写真解析をして３次元モデルの作成、オルソ画像の作成、デジタルトレースへの作業手順を説明して頂いた。

いずれも高性能なパソコンで、Agisoft 社の Metashape の Professional 版で写真解析をオルソ画像から断面図作成をしていることは共通している。水糸・ピンポールを使っての従来の方法より効率的に作業をしている様子であった。

## ３次元計測による断面図作成の実践

丘江遺跡第 12 次調査で調査支援の株式会社大石組の協力でフォトグラメトリによる３次元計測法を深度のある自然流路の断面や長大な基本土層の断面図の作成などで取り入れたのでその方法を紹介する。

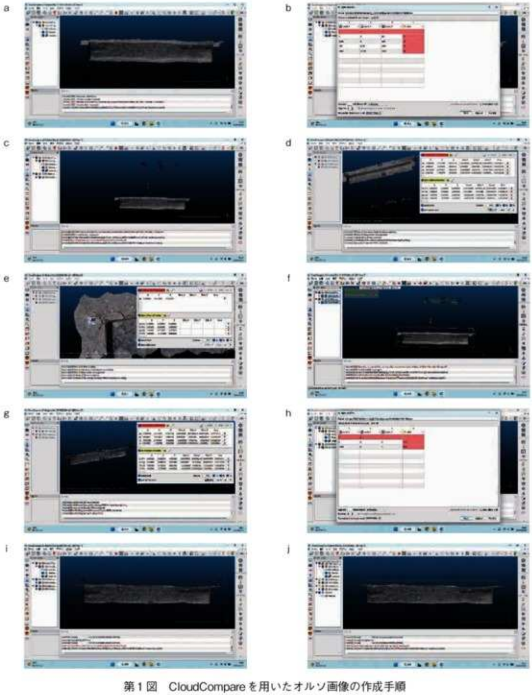
**３次元モデルの作成**　Agisoft 社の Metashape（Standard 版）で写真解析して３次元モデルを作成し、OBJ 形式でエクスポートする。オープンソースソフトウェアの CloudCompare で読み込む（第１図－ a）。被写体に座標を合わせるマーカーを４点（座標合わせに４点必要）打設している。断面の場合、必ず２点は断面の延長上（Ｔ１とＴ２にしてセクションポイントにする）、１点は底部に打設する。

**座標入力**　トータルステーションで４点の座標を測る。断面線を水平にオルソ画像の作成するため、ポイントＴ１の座標を（0,0）にして、他３点の座標を修正する。その座標を Excel に入力し、CSV で保存し、CloudCompare で開く。Accept をクリックすると読み込んだデータが表示される（第１図 -b・c）。

**位置合わせ**　CTRL を押しながらデータベースツリーにある３次元モデル（点群データ）と CSV データをクリックし、位置合わせのアイコンをクリックする（第１図－ d）。CSV データの座標をＴ１・Ｔ２・Ｔ３・Ｔ４の順でクリックすると下段に座標一覧が表示され、次に３次元モデルのマーカーをＴ１から順番にクリックし、位置合わせをクリックする（第１図－ e・ f ）。CSV の座標に３次元モデルのマーカー

に合わさります。OKならレをクリックして位置合わせ完了です(第１図－g)。画面左側列にある正面セットのアイコンをクリックすると、断面が正面になります。

**水平と垂直軸の設定**　断面が見えるように背後、手前、側面のモデルを削除したら、水平と垂直軸を設定するために、T１とT２の真上に切りの良い高度にしたポイントを設定する。その座標をExcelに入力し、CSVデータにして読み込む（第１図－h・i)。ツールにあるポリラインのトレースでT１-１とT２-２を結ぶ。CSVデータを非表示にするとドットが消える。ファイルをレンダリングで画像にすればオルソ画像になる（第１図-j)。縮尺調整は右下にあるスケールで可能である。あとは画像をイラストレータなどでトレースすれば遺構断面図ができる。




第１図　CloudCompareを用いたオルソ画像の作成手順

# 村上市上野遺跡第８次調査の出土土器について

## ― 自然流路 SR103 の出土土器を中心に ―

加　藤　　学　・　加　藤　元　康

### はじめに

新潟県村上市猿沢・檜原に所在する上野遺跡は、縄文時代後期前葉の大規模集落である。三面川の支流である高根川右岸に立地し、標高は約 35 ～ 39 m で、花崗岩を主体とする西側の山地からの土砂流等によって形成された扇状地にある。SR103 は、遺構密度が高い範囲を南北方向に流れる自然流路である。本研修報告では、SR103 のうち、廃棄による埋め戻しで一括性があり、砂層を介在しながら重層的な堆積状況を把握することができた 27 G ～ 30 Ｉグリッドの土器を対象とした。

### 自然流路 SR103

27 G ～ 30 Ｉグリッドの自然流路 SR103 では、遺構上面で平地建物の柱穴や石囲炉を検出し、柱穴の底には柱荷重により湾曲して割れた土器片も出土した。このことから、流路は集落造営中に埋まり切ったと考えられた。また、自然流路のセクション（第１図）では、廃棄によって埋め戻された堆積物間に挟在する砂層を検出し、土砂流等の増水時に一時的に流れ込んできたものと考えられた。この砂層を指標に遺物の廃棄単位を１層から７層まで設定し、層別の遺物の取上げを行った。現地では、２層に南三十稲場式土器、３層以下で三十稲場式土器新段階が出土する傾向が見受けられた（第２図）。

### 研修計画と調査

本流路では土器型式による年代的な基準を設定できること、他地域の土器型式に関する情報が得られることが想定されたため、隣県を含めた後期前葉の土器について２か年の調査を計画した。１年目は、三十稲場式土器段階を中心に、福島県・山形県で調査を実施した。実施日は令和６年 12 月 17 日～ 19 日である。

調査した遺跡は山形県花沢Ａ遺跡、福島県越田和遺跡・獅子内遺跡・高木遺跡である。花沢Ａ遺跡では土坑（DY ３）から出土した一括遺物、福島県越田和遺跡・獅子内遺跡・高木遺跡では綱取Ⅰ・Ⅱ式土器を中心に三十稲場式土器についても調査した。この他、大木 10 式や三十稲場式土器を中心に村上市アチヤ平遺跡の資料も観察した。

### 小結

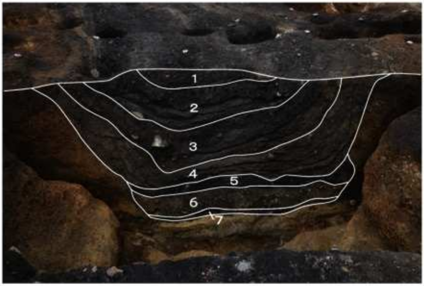
現段階における所見を記載する。最下層で出土した土器（第２図 15）は綱取Ⅰ式土器である。口縁無文帯直下の隆線の上下に沈線を施しており、「最も新しい段階（綱取Ⅰｂ式新）になると口縁直下を巡る隆線のすぐ下に沿って沈線が施されるようになり、隆線も低くなる」（志賀 1990）という指摘から綱取Ⅰ式でも新しい段階に位置づけられる。同一の層から三十稲場式土器新段階の土器（第２図 14）が出土しており、両者は共存すると考えられる。また３層から出土した波頂部に弧状の沈線を連続して施した鉢形土器の破片（第２図５）は注口付鉢形土器で、三十稲場式土器新段階の土器である。この土器と類似する土器は米沢市花沢Ａ遺跡の土坑（DY ３）から出土しており、口縁部の頸部直下に注口が付くいわゆる「千鳥窪類型」（鈴木 1992）に類する土器と共伴している。堀之内１式並行と考えられ、本遺跡の三十稲場式土器新段階は綱取Ⅰ式新段階と堀之内１式に並行すると想定できる。

本遺跡の自然流路 SR103 の出土土器については接合作業が未実施のため、今後、整理作業を進めなが

ら検討する予定である。

## 引用・参考文献


志賀敏行 1990「綱取Ⅰ式土器論序説」『史峰』第15号、新進考古学同人会、pp.26-35
鈴木徳雄 1992「縄文後期注口土器の成立」『縄文時代』第3号、縄文時代文化研究会、pp.63-94


第1図　SR103のセクション（27Hグリッド）

第2図　SR103における土器の層位的出土

# 縄文時代後期前葉の集落における墓域について

## ― 周辺地域の事例調査 ―

石　川　智　紀

## はじめに

新潟県村上市猿沢・檜原に所在する上野遺跡は、縄文時代後期前葉の大規模集落である。三面川の支流である高根川右岸に立地し、標高は約35～39ｍである。2024年度までに本発掘調査が第８次調査まで行われ、その内の第３～６次調査に携わる機会を得た。第４次調査以降に居住域の調査が本格化し、また類例の少ない焼人骨集積土坑が検出されたことで、たびたび墓域の存在の有無および位置について議題となった。焼人骨集積土坑のような特殊な埋葬方法は別としても、いわゆる埋設土器（埋甕）と呼称できる遺構がいくつか検出されているが、密集範囲は認められていない。現在、個別遺構の再検証が行われ、その後に埋設土器の分類基準、集落内における位置関係等が把握されてくるものと思われる。

第８次調査までに上野遺跡で明確に墓と呼称できるものは合葬墓（焼人骨集積土坑）１基のみで、単基であることから墓域とは言えず、また祭祀遺物も共伴していない。墓域の有無及び特徴を明確にすることを目的に、縄文時代後期前葉を主体とした周辺遺跡との比較を行うことにした。

## 検討方法と資料調査

まずは墓域としての認定条件(①墓の種別、②墓の数、③墓の相互位置・範囲、④居住域との差異、⑤居住域との位置関係)がどのようなものかを明らかにし、土偶・石棒等の祭祀遺物と呼ばれるものとの相互関係（①遺物種別、②遺物の系統、③破損状況、④出土位置（墓の内外、墓域の内外）、⑤遺物量等）を検討する。

令和６年度の資料調査として、福島県喜多方市藤権現遺跡の調査所見の聴取と、出土遺物を実見することにした。令和７年１月28・29日に実施した。藤権現遺跡は総合的な報告書が未刊ではあるが、大規模な墓域があると報じられた遺跡であり、その墓域と比較することで、墓の条件に合う遺構があるのかどうか、埋設土器の分布状況や居住域との位置関係で、墓域として認定できるのかを考えたい。

## 藤権現遺跡の概要

調査継続中のため、既刊報告書及び現地説明会資料で公表されている範囲で記述する。

遺跡は喜多方市東部の塩川地区に所在し、雄国山の西側麓に位置する。第２次（令和２年度）調査で、縄文時代後期初頭～中葉の土器埋設遺構や配石遺構のほか､土偶や腕輪などの祭祀遺物が多数発見された。縄文時代後期前葉を主体とした大規模な墓域として注目され、調査途上であったが遺跡の重要性から、事業計画を変更して保存となった。第３次（令和３年度）調査以降は、保存・活用を目的としたトレンチ調査を継続的に実施している。埋設土器の土器型式は､上層が加曽利Ｂ式及び宝ヶ峰式とそれに類するもの、下層が綱取式・三十稲場式を中心に分布する傾向にある。

図は遺跡保存の契機となった、第２次調査の９区（3,391㎡）の調査範囲である。「令和６年度　藤権現遺跡現地説明会資料」（令和６年10月19日開催）から転載した。

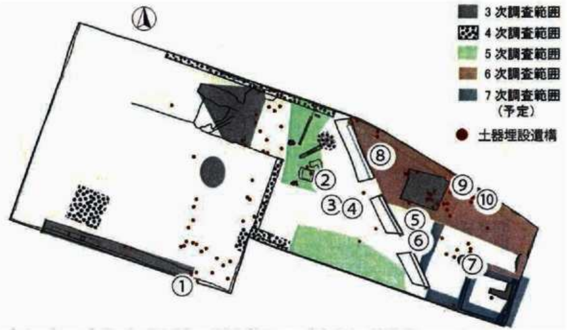
前述した認定条件①（墓の種別)･②（墓の数）は､「配石遺構」約100基（礫の不規則配置含む）と「土器埋設遺構」約100基あり、土器埋設遺構は「正立」･「倒立」･「横置き」が認められるが、横置きの場合

は、遺物包含層内の一括出土で取り上げた可能性があるとのことであった。粗製土器が多いので詳細時期が判別しにくいものが多く、またサイズに統一感は無い。底部穿孔及び体部下半側面穿孔のものも認められる。配石遺構は内外に骨片・焼骨が散在するが、土器埋設遺構で骨が伴う例は無い。土壌分析では、リン・カルシウム分が高い個体があるとのことであった。土器埋設遺構の中で、炉を含む可能性を聞いたが、焼土・炭がほぼ伴わないことから低いとのことである。また被熱礫の存在については、火山による被熱礫（雄国山の安山岩）があるので、現地で生成された被熱痕跡か判別しにくいそうである。条件③（墓の相互位置・範囲）は、図に示されるように近接して存在しているが、この調査範囲では大きく２つのエリアに分けることが可能とのこと。また調査区壁面でも土器埋設遺構を確認していることから、さらに広範囲に墓域が及んでいる。条件④（居住域との差異）と条件⑤（居住域との位置関係）については、居住域と想定できる範囲が未確定であることから、まだ不明である。

祭祀遺物と呼ばれるものとの相互関係①（遺物種別）については、土偶・腕輪・耳栓・耳形土製品・動物形土製品・土製円盤・三角形土製品・石棒・石製品（岩板または岩偶）などがある。②（遺物の系統）については、現段階で詳細は不明である。③（破損状況）は破片が多いが、完形の耳栓２点が同一遺構（S282）から近接して出土している。④（出土位置）については、土器埋設遺構が集中する２つのエリアと重複して出土する例が多いとのことである。⑤（遺物量等）についてであるが、現在までに土偶は約 90 点、腕輪は約 30 点（破片数）出土している。９区（3,391㎡）の約４分の１が古墳時代の流路で削平され、また遺物包含層の半分近くが未調査で残っている状況を勘案すれば、十分多いと思われる。また廃棄エリアと想定している南西部では少ない傾向にある。石器・石製品の内、石鏃・磨製石斧・打製石斧類が少ないので居住域とは異なる状況が考えられるそうだが、居住域が中心と考えられる上野遺跡でも同様の傾向を示している。

## 小結

喜多方市教育委員会のご厚意により、第２次調査当時から現在までの所見を聴取することができ、また報告書刊行前の遺物を実見することができた。今後も相互に情報を共有し、上野遺跡の現地調査及び整理作業に反映できるようにしたい。




令和3年～令和7年（予定）の調査範囲及び土器埋設遺構の分布

本書は研究目的での全文複写を許可します。

研　究　紀　要
第 15 号

2025（令和７）年７月30日印刷
2025（令和７）年７月31日発行

編集・発行　公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845　新潟市秋葉区金津93番地１
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986

印刷・製本　株式会社　ハイングラフ
〒950-2022　新潟市西区小針１丁目11番８号
電話　025（233）0321